
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Nコード】

N0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時は二ト、またある時は宮殿の主になったりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。

潤「仕事したり戦ったりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃…チクショウ、目から汗がとまらねえ」

1 なんか、死にました（前書き）

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしく願います
では、はじめはじまり〜

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。（『ウイスニルの予言』）

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真っ白い空間か？

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

・・・エエッ！！

まあ、落ち着きましようや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰って来る　夕飯を食べる　勉強、と思わせてラノベ
2時を過ぎたので寝る　目が覚める　今　1

ああ、もしかしなくてもこれ夢じゃ…

「夢じゃないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

・・・エエッ！！（本日2回目）

「な、なんだお前。ってかどこから出てきた！」

さつき俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かって俺は言った。

「私？私は転生の女神だよ？」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん！」

んな事言われたって…

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いいよ」

そう言う女神（自称）は何やら小声でしゃべり始めた。
シ、シニールだ…

ボワッ

独り言を終えたらしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう？これで私が可哀想な子じゃないって分かったでしょ」

こんなの見せられたら

「お、おう。本当らしいな」

としか言えせんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、どうやらあなたは寝ている時に死んじやったらしいの」

ん？

「ちょ、ちょっと待て。え？俺死んだの？」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明！

ってか読めてきたぞ、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役と。

はいはいテンプレ乙

「その通り！あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じゃなくて決定事項かよ…ってか心を読むな。

「俺に拒否権は？」

「ない！」

デスよね。

「まあ、そのまま異世界つてのも可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ」

テンプレキター！

「じゃ、今のまま何も変えずにスタートして」

「良いの？反則的^{チート}な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか」

「俺のミステリアスを返せ…!!」

KY女神…!!もう流行ってない？さいですか。因みに俺は今リアルorzになつている。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からないけど、ごめんなさい」

「はあ…まあいいや。で、2つ目は異世界でもお前と話が出るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもって訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ目は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おっ！いい事に気付いたね。あなたは反則的^{チート}な能力がないから言語も学ばなければいけないところだったんだよ」

だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあったからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちよつと待った」

「何よ」

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ!!次の話ですればいいでしょ!!」

次の話って…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの!じゃ、気を取り直して…異世界へしゅっ…」

「出発」
・・・・・してやったり

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。ってか絶対に俺の容姿とかが分らないもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目 いただきます

2 人物紹介

羽山 潤 はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に…ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

転生の女神 てんせいのもがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのようで…身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な…

バコーンッ!!

しばらくお待ちください

「えゝ、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なってしまったので、私、転生の女神が代わりに紹介しまゝす。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよねゝ潤君（ニコッ）」

「イ、イエス マム。何者かにであります!」

「よろしい。っと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちゃいまゝす」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの!潤君が飛ばされた異世界『ウエドリア』は剣と魔法がメインの世界でゝす」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわゝ、やっぱり行きたくね」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさゝ逝ってきなよ」

「危ない世界なだけにシヤレになつてねゝ!!」

「っと、また話が逸れちゃった。潤君がどうでもいいこと言うから」

「どうでもいいことじゃねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカッタネー」

「誰か助けてゝ!!」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどこかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そっちには居ないんであしからず」

「無視しやがった。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だねゝ。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよゝ？笑っちゃうよね」

「俺の扱いひでえ！しかもまた逝こうになつてるし…」

「じゃ、いよいよ本編ヘレッツゴー！」

「開始早々に逝かないようにするんでよろしくお願いします」

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやつと異世界か。ん？なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋ってたんだ？」

3 なんか、緑のものが…（前書き）

やっと異世界に到着

3 なんか、緑のものが…

「何なのこのテンプレ展開」

転生した瞬間、といつても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかというキツネ色の体毛を纏った狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃない？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。目を見る目を、丸いキュートな目とつり上がった獲物を狙う目だよ？どつちがかわいいかなんて分かりきつてるじゃないか。同じネコ目イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけど…そう、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ？作者に至つては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ？」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！つてか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ」

「ミドリムシが現れた」

「何かデカいミドリムシきた〜！つてか変なテロップ流れた〜！」

ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあれがそうなのか分からないけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなのついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あゝあ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張つてね〜」

KY女神はそう言う俺との交信を切った。クソッ、自分だけ作者の怒りから逃れやがった。

「はあ…しょうがないからやりますか」

そう俺が言くと、今まで律儀に待ってくれていた狼が一斉に向かってくる。ミドリムシはその場で待機のように…

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なっ！」

真っ正面から突っ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶をした。急所だからちよつとした力で気絶させられる。続いて狼その2が、俺が1匹倒して油断している所を狙ったのか、後ろから飛びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食らわす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやつぱり気絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟ったのか、逃亡した。相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空気となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、緑のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです（前書き）

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、ニョロニョロした鞭毛を持つユーグレナ目ユーグレナ科の生物。ちなみにユーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

・・・手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか」

俺がヤツに向かって走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。

「キモイっっの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなった鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎってもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かった。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあった石を拾って鞭毛の届かない位置まで下がった。

「あれが本当にミドリムシだとしたら」

俺は石をヤツの核目掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのうち話すとして…

ゴスツという音がして、核の少し手前で止まる。ってかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやったのに…

シューッ

この音？そりゃあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やっぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合成みたいな植物っぽい事もできるんだよね」

正確には原生生物って言って、動物でも植物でもない。中途半端な奴め。

「せっかく頭使って倒そうと思ったけど、弱点も見いだせないし手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」

という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦いが始まりまゝす。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いな。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

そんでもって拾った石を核に向かって連射！
ズドドドドッと凄い音を出しながら石はヤツの核に向かって飛んでいく。寸分変わらず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の1発として大きめの石をヤツの核に向かって全力で投げつけた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避けて…

ってな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じた。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあゝ、ヤツはとにかくキモかった。ってか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会っぜ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（前書き）

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の悪意を倒して、今は広い平原の中を移動中（ちなみに元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで戦闘というシユールな画にはならなかった）。ってか広すぎじゃね！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…こう何もないと方向が合ってるのかすら分かんねーよ。

～1時間後～

「まだかよ～そろそろ木の1本でも見えていい頃だろ」

～2時間後～

「……………」

～3時間後～

「作者アアアッ！！こりゃ何の嫌がらせだあ！さっきから石ころとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いなんてレベルじゃねえぞ！？」

～4時間後～

「作者さんよ。このままだと予告で言ってた第1異世界人に会えずにこの話終わりそうだぞ？」

ガタン

「ん？何の音だ？って、やっと風景動いた～！うわ～、前に進めるって素晴らしい！」

お～、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし1人で喋ってても危ない人に

なつちやうから、こつからは心の中での呟きで。

森に入ってから空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかったので、今日は野宿することになった。食事はしょうがないから木に実っていた果実らしきもので済ませた。

・・・そういえば今回って人と会うんじゃないかな？まあ、思ったより進まなかったから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじ…

ヒュンッ

何かが俺の耳元を過ぎていった。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかった。

人と会うつてそういう事…！？

確かに第1異世界人だけでも、確かに盗賊じゃないなんて言うてなかったけれども…！

俺がそんな事を思っていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」

と、盗賊1（仮）

「そうそう、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかしくなくても、あなたたちって盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？さつきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪ってきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさっきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言った瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどつかの木にぶつかって気絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時の間にか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもつ!」

盗賊1(断定)は顔を真っ赤にして懷から大振りのナイフを取り出した。ちなみに顔を真っ赤にしてるのは恋する乙女的な感じじゃなく、怒り心頭って方の…え?分かってる?さいですか。

顔を真っ赤にするって言えばね、俺が中学2年生の時に…

「死ねや!」

盗賊1(断定)が俺に向かって手に持っているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…昼に出会った狼たちよりせつかちだな。しょうがない、サクツと終わらせますか。

「舐めた真似しやがって」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今まさに俺の命を刈り取るうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。

「そんなもん振り回して危ないですよっ」と

そう言っただけ俺は振り下ろされたナイフを避け、盗賊1(断定)に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1(断定)は倒れ始め、俺は盗賊1(断定)の鳩尾目掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1(断定)は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ、終わったな」

そう言っただけ俺は盗賊たちを放っておいて夜の森を後にした。眠気?命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだった」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君です え〜つと、次回はいよいよ街に入るのか？ってかろくなもん食ってないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち鬱陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてろよ〜」

6 なんか、いい人みたいです（前書き）

潤は二トにジョブチェンジした。

6 なんか、いい人みたいです

「はあ、やつと着いた」

俺は盗賊気絶させた後、さんざん歩き回って街道を見つけ、やつとの思いでどつかの街の前まで辿り着いた。詳しく説明しろって？ご冗談を、今は腹が減ってるんでそんな暇ありませんよ。

（（ここはカラコルね））

KY女神もつい5分位前に繋がった。何で括弧が変わったか？それはだなく、実は今までアイツは俺の頭の中に直接話し掛けてたんだ。んでもってその事をさつき知らされて、なら俺もできんじゃない？ってなって実際に出来ちゃったから、じゃあ声に出してないんだから括弧を変えなきゃっていうわけ。

（（街の名前か？））

こんな感じで。

（（そう。貿易都市で色んな物が手に入るんだよ？））

（（へへ。でも俺金持ってないぞ））

盗賊から剥ぎ取ってくるべきだったかな…

（（この街、っていうか殆どの街にはギルドっていう組織があつて、そこに加入すれば依頼の報酬としてお金が貰えるよ））

（（なるほど。じゃ、早速行きますか））

一旦交信を切って俺は街の中へと入っていく。

しばらく歩いていくと、明らかに普通の住宅とは大きさも雰囲気も違う建物が目に入った。

「あれがギルドかあ。でかい建物だな」

入ってみたいことには始まらないと、その建物に足を踏み入れる中はとても広かったが、ゴツイ男が沢山いて、どちらかというと狭苦しい感じがした。

カウンターには受付嬢、ではなく爽やかな男性が座っていた。テンションただ下がりだ。

「すいませ〜ん。ギルドに加入したいんですけど〜」

テンション今なお下降中の俺。

「はいっギルドの加入ですね！こちらに身分証明書と経歴をお書き下さい！」

やたらテンション高い爽やか兄さん。

ん？身分証明書なんて持つてないぞ〜？

「身分証明書つてないとダメですかね」

ダメもとで聞いてみる。そして帰ってきた答えが

「ダメですね。もし犯罪者を加入させてしまうとギルドの信用に関わりますから」

というものだった。ま、何となく分かってただけど。

「身分証明書忘れちゃったんで出直して来ます」

という無難なことを言っつてギルドを出た。

「さて、どうするか〜」

KY女神とはまた繋がらなくなったし…とりあえず仕事探すか〜

・ ・ ・ ・ ・

仕事みつからね〜！！何でここの仕事は専門的なものばかりなんだよ！

おまけに商売始めようにもギルドに加入しなきゃ出来ないらしいし…ギルドなんて創った奴今すぐ出てこ〜い！

はあ、もう仕事しなくていいかな。俺は悪くない。社会が俺を受け入れてくれないだけなんだ。ハハハハハ。

「あんたこんな所で何してんの？邪魔なんだけど」

不意に俺の背後から声が聞こえた。振り返るとそこには…

いい感じで区切れそうだから今回はここまで。え？ダメ？さいですか。

作者からダメと言われたのもうちよつと進めるよ。

俺の背後に立っていたのは、綺麗な夕焼け空をそのまま移したかのようなオレンジ色の髪をもち、自信に満ち溢れているようなやつり目の目も髪と同じオレンジ。容姿は上の上と言っても過言では無い。目測で身長160cm位の少女だった。だが、さっきの言動といい、この容姿といい、

「どこのツンデレですか？」

しまったアアアッ！！思わず口に出してしまった！

「はあ！？何訳わかんない事言ってるの？」

反応から察するに異世界にはツンデレという言葉は無いらしい。が、機嫌を損ねてしまった。

「ゴメン。君があまりにも可愛かったからつい」

すると彼女は顔を真っ赤に染めて、

「か、可愛い！？な、何変な事言ってるのよ！」

と言ってきた。うん、ナイスツンデレ。

「ところでさあ、今日俺金も無くて泊まる所無いんだよ。1日だけ泊めてくれない？」

深刻な問題を忘れてた。って事でお泊まり交渉開始！

「ふ、ふざけないで！誰があんたなんか」

開始2秒でノックダウンされました。

「そ、そうか。残念だが他をあたるよ」

無理に泊めてもらうわけにはいかないからな。じゃ、今夜も野宿かな。

よつこらせ、と俺が立ち上がって街の外へ歩き出そうとすると、

「い、1日くらいなら、しょうがないから泊めてあげてもいいわよ」
さっきも言ったがもう一度言おう。

ナイスツンデレ

6 なんか、いい人みたいです（後書き）

次回予告

潤「何だあの前書きはアアア！俺は断じてニートじゃない！ニートっていうのはだな、not in education, employment or trainingの略でだな・・・（長いので省略）・・・だから俺はニートじゃない！さて、ではやっと次回予告だな。今回はツンデレと仲良くなれば彼女の過去が明らかに！全ては俺次第ってか。選択肢間違えないようにしないと」

7 なんか、真面目です（前書き）

何か纏まりの無い話になってしまった。

7 なんか、真面目です

「おじゃましま〜す」

そう言つて俺はツンデレさん（仮称）の家にに入れてもらった。1人暮らしなのか生活感を感じさせる物はクローゼットとテーブルとイスくらいだった。キッチンはあるが料理はしないのかあまりにも綺麗だ… つか未使用だろ〜。

「何突つ立つてんのよ。さつさとそこら辺に座りなさい」

では遠慮なく、とイスに座る俺。ツンデレさんも近くのイスに座る。

「ん？そういえば君つて1人暮らしだよ？何でイスが2つも…はっ！もしかしてこれには今回の話のキーポイントなんじゃ…」

「何1人で暴走してんのよ？イスが2つあるのは、このテーブルを買ったときに付属品として付いてきたからよ」

バツカじゃないの、と言わんばかりに…

「バツカじゃないの？」

言われました。

「ごめんなさい…それにしても生活感の無い部屋だな〜」

女性にこんな事聞くのは失礼だと分かつてはいるけど何か引つ掛かるものを感じたので聞いてみる。

「あ、あんたなんかに関係無いでしょ！」

やはり無理か… つか一切デレを見せないってどういうこと？このままじゃせつかくのツンデレがツンツンになっちゃうぞ？

「悪かった。そうだ、まだお互いに自己紹介してなかったよな？」

「え？ええ、まだね」

自己紹介は大切だからな。お互いの印象アップの為にも。

「俺の名前は羽山 潤。出身とかは…知りたかったら教えるけど…？」

そう言つてツンデレさんを見る。

「珍しい名前ね。話すことが嫌じゃないなら教えて。犯罪者だこ
っちが困るし」

この世界って犯罪者が多いのか？ギルドでも言われたし…
だが何て言うべきか、いきなり異世界人ですなんて言っても信じ
てもらえないだろうし。

「羽山 潤って珍しい名前だろ？それは俺が他の世界から来たから
なんだ」

って事で正直に言うことにしました。

「何言ってるの！？確かにハヤマなんて名前は珍しいけど他の世界
なんて…ふざるのもいい加減にして！」

まあ、こうなりますわな。

「今は信じてもらえなくていい。あと、俺の名前は潤の方。羽山は
ファミリーネームだよ」

「ふん、まあいいわ。言動は怪しいけど悪い人じゃなさそうだし
言動は怪しいけど…ホントの事なんだけどな」

「そりやどくも、じゃ今度は君の名前を教えてよ」

「私？私はセレン。セレン・レイナンドよ」

「セレンね。セレンはギルドに入ってるの？」

今更だがセレンの腰には西洋の剣がさしてある。

「ああ、この剣を見て言ってるのね。いいえ、ギルドには入ってな
いわ。ただの護身用よ」

ふん。日本じゃ剣なんて持ってたなら即銃刀法違反で捕まるから
遠い存在だったけど、こっちじゃこんなに一般的なのか？

「そういえば、セレンの髪の色って珍しいけど、それって地毛？」

元の世界にこんな髪の色の人がないのはもちろん、こっちの世
界でも赤、黄、緑、青の4種類しかいなかった。

そう言った瞬間、セレンの顔に影が差した。

これが今回の話のキーポイントになりそうだな。

「ええ、まあね」

と、さっきまででは想像もつかないほどその声は小さく、重かった。

そんな重苦しくなった空気の中、俺は思った。

あれ？俺ら（作者含む）が考えてた以上にシリアスだぞ。

「何か聞いちゃいけない事だったか…その、すまん」

ここでふざけるのは少し違う気がするので素直に謝っておく。
「いいの。気にしないで」

・
・
・
・
・

気まず〜〜い！誰か助けて！ってかKY女神仕事入りすぎだろ！
繋がりにく過ぎるわっ！！

一体どこで選択肢間違えたんだ？あれ？ってか最初から選択肢のコマンドが下に出てないぞ？まさかこれはギャルゲーじゃなかつ…
「ちよつと長くなるわよ？」

「はいっ？」

何のこと？選択肢のコマンドが出てない理由か？

「私の髪の色、珍しいって言ったでしょ？」

「あ、ああ」

そっちの話か？

「私の髪のこのオレンジ色はね、この世界じゃ異端の色なの」

「異端？どうして？綺麗な色なのに」

「う、うるさい！黙って聞いてて！」

こんなシーンでツンデレ発動させなくても。

「人が生きていく上で欠かせない太陽が沈み、闇が人々を包み込む

直前の色。それは破滅の色と人々から恐れられてるの。それがこのオレンジ色よ」

「んなバカな」

髪の色なんてどうしようもないだろう。

「そんな事を教義としているのが、この世界の人口の9割以上が信仰している《シャイネン教》よ」

ドイツ語で《光る》か、如何にも闇が嫌いそうな名前だ。

「そうして私はこの16年間迫害され続けてきたの。どうっ？これであなたも私の事が嫌になったでしょ！？いいのよっ、もう慣れるか……」

「今まで、辛かったんだな」

そう言った俺は、いや、そうとしか言えなかった情けない俺はセレンの頭を撫でる。

「な、なにを……ふ、ふえゝん」

と、遂に限界がきたのか泣き出してしまった。

「泣くといいさ。その涙と一緒に今まで溜め込んできたものの全部流しちまえ」

そうして俺は彼女が泣き止むまで頭を撫で続けた。

7 なんか、真面目です（後書き）

次回予告

潤「珍しく真面目度の高い話だったな。こんなん読んでも面白くないっつゝの。次回は頼むよ？次回はどうやらセレンとお出掛けするらしいぞ？マジっすか？めっちゃ楽しみになってきた！」

8 なんか、旅に出ます（準備編）（前書き）

小説長文化計画実行中

中国語みたいです…

8 なんか、旅に出ます（準備編）

結局セレンが泣きやむ頃には夜になってしまい、夕飯を俺が（こ重要）作り、普通に寝た。自分で作ったとはいえ、調理したものがあんなに美味しいとは思わなかった。あの時はつい悲しくもないのに涙が出てしまったね。

で、今は俺が作った（ここにアンダーライン）朝食も終えてひと息ついてるところだ。

「ところでジューンはいつ出発するの？」

「……はい？何のこと？」

「何惚けた顔してんのよ。ここで1泊したらまた旅に出るんじゃないの？」

そうだったっけ？ってか俺って旅してたんだっけ？いや、違うはずだ。そもそも俺はこっち（異世界）に飛ばされてこの街に流れ着いただけのはず。待てよ？人生という面においては俺は旅人だな。

そう考えると俺はた：

「違ったの？酷く難しい顔してるけど。べ、別にジューンなんか居ても居なくても変わんないから居てくれてもいいのよ？」

顔を真っ赤にしながら提案してくる。おおっ！俺が考えてる間にセレンはツンデレレベルを上げていたらしい。だいたいいいツンデレだったぞ！

「マジっすか！？でもここにずっといるわけにはいかないからそろそろ行こうと思う」

そう言うときセレンはショボンとした顔になった。

分かりやすい表情だな

「で、提案なんだけど、セレン、お前も一緒に来ない？俺はこの世界についてよく知らないし、何よりお前と離れるのも寂しいしさ」
ホントのところはコイツをこのまま放っておけないからなんだけどな。

・・・あとボケとツツコミを1人2役やるのが大変という理由もあったりする。

「な、なに言ってるのよ！ま、まあ、そんなに言っんなら一緒に行つてあげないこともないけど」

とは言つものの、セレンの表情は喜色満面といった感じだった。

「じゃ、早速出発！と、いききたいところだけどお互いに準備もあるだろうから、出発は今日の正午。ギルド前で」

「分かったわ。じゃあ、またあとで」

今街の時計は10時15分を指している。

「さて、何を準備しようか」

まずは食料と思い、スーパーみたいな所に入る。こっちにもスーパーってあったんだね…

中は野菜や干し肉ばかり、ということではなく、冷凍食品とかインスタント食品、缶詰め、お惣菜までもが売られていた。

確かに旅には便利だけどさ、何かちがくね！？せつかくの異世界なのに普通すぎでしょ。おい作者、俺のこの気持ちどうしてくれる。

スーパーで水や、保存が効きそうな缶詰め・インスタント食品を買つて、俺は図書館へと向かった。

上の段落だけ見たら俺が異世界にいらなんて誰も思わないだろうな。図書館へ向かった理由？それは異世界に来たら魔法を習得しないと。KY女神は前にこの世界には魔法があるって言ってたからな。

（（あるよ））

（（おおう、久しぶりに出たなKY女神。セレンに活躍の場を取られそうだから慌てて出てきたな？））

（（違う違う。今日はあなたに連絡があって繋いだの））

（（連絡？何〜？））

（（今日から出張があつてさ〜、しばらくの間繋がらない所にいるから連絡は出来ないよ？））

（（遂に作者がリストラを始めたか））

（（リストラ違〜う！出張って言つたでしょ！居なくなるのは少しだけだよっ！！））

（（分かった。分かったから落ち着け。ところでさ〜、魔法って誰でも使えるの？））

（（うん。魔力の量には個人差があるけど、基本的に誰でも使えるよ〜））

（（ちなみに俺の魔力はどの位だ？そして増えることはあるのか？））

（（あなたの魔力量は…平均的な魔術師くらい。一般人よりは高いかな。あと、魔力っていうのは身長みたいなもので、あなたくらいの年齢で魔力の増加は止まるんだよ〜））

（（それだけ分かればいいや。じゃ出張頑張れよ〜））

（（あ、ちょ、最後に読者の皆様に挨拶を…））

あつ、交信切っちゃった。ま、いつか。話してる内に図書館にも着いたし、早速入りますか。

図書館の中はギルド並に広くて壁には本がギッシリ詰まっていた。

「これだけの図書館、元の世界じゃ見たことないぞ」

こりゃ探すのも大変だ。と思つていたら検索用のパソコンを見つけた。見つけてしまった。

夢壊しすぎだチクショーツ！！

まあ、便利なことには違いがないので、俺はパソコンで『魔法』と打ち込み、魔法に関するそれっぽいのを探す。

パソコンで調べた本を取ってみる。

『魔法のように相手を惹きつける10の方法』

はっ！つい自分の興味のある本を手にとってしまった。まさに魔法だ。

『初級者の魔法』

今度は真面目に取って来ました。

『第1章 まずは魔法について正しい知識をもとう。・・・』面倒くさいので読み飛ばす。

『第2章 じゃ次、魔力がなんなのかやってみようよ。・・・』さつき聞いたから読み飛ばす。ってかだんだん馴れ馴れしくなってるな。

『第3章 魔法を使う時の注意、は後で他の本読んで学んで』2行で終わったアアア！！後でこの本の著者に文句言つてやる。

『最終章 簡単な魔法を使ってみよう！』これこれ、じゃ、早速学びますか。

『・サンダー 対象に雷を落とす魔法。』

使い方：適当に詠唱して雷のイメージが明確になったら「サンダー」と唱える。

・ファイヤー 対象を炎で燃やす魔法。

使い方：適当に詠唱して炎のイメージが明確になったら「ファイヤー」と唱える。

・アイス 対象を氷漬けにする魔法。

使い方：適当に・・・以下略

・ウィンド 細かい刃の風を起こす魔法。

使い方：適当に・・・以下略

・フォースグラビティ 重力をあやつり身体能力の強化、敵の

無力化に使用する上級魔法。

使い方：使用する場所の標高などから、大気圧、位置エネルギーを計算し、それに見合った重力を計算し、その計算結果以内の重力を対象の周囲1メートルの範囲で操作する。詠唱は「太古より流れたる大地の力、我の魔力を礎として今ここに具現せよ。（発動する場所の緯度経度を正確に言う）。フォー스グラビティ」である。まあ、ファイト」

だそうだ。ってか突っ込みどころ満載過ぎだろコレエエツ！！
誰だよ著者。

『著者 誰かの何か』

作者アアアアア！！ふざけんじゃねえええええ！！だいたいお前はな、（しばらくお待ちください）なんだよ。まったく、気を付けてくれよ？

もうお別れの時間？じゃ、あの子の行動をササツと纏めますか。

あの子は中級魔法も習得して、上級魔法も思ったが、上級魔法は難し過ぎて分からなかったの、とりあえず図書館を後にした。その後俺は武器屋に行って武器を買って、ギルド前でツンデレと合流した。ここら辺はまた次の話で…

8 なんか、旅に出ます（準備編）（後書き）

次回予告

潤「何で俺が食料を買えたかって？そりゃセレンにお金を借りたからですよ。そっいえば魔法覚えたよ魔法。どんなもんなのか今から楽しみだな。・・・忘れてた、次回は武器屋行ってギルド前でツンデレと合流して旅に出まゝす。って事で次回もよろしく」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（前書き）

0時に間に合わなかった…

9 なんか、旅に出ます（出発編）

「お待たせ」

予定の時間より15分早くギルド前に着いたが、そこには既に口
ーブをご丁寧にご馳走まで被って着ているセレンが立っていた。

「遅いわよ！私なんか1時間前からずっと居たのよ！」

もう一度言うが俺は遅れたわけじゃない。ってか早いな！1時間
前って、今11時45分だから10時45分には居たのかよ。30
分で準備終わったのか。

「悪い悪い。待たせたついでにもうちよつと待ってくんない？」

「何よ、まだ準備終わってなかったの？」

「ちよつと約束があつてさ」

「まったく、さつさとしてよね！」

「サンキュー」

さてさて、約束通りセレンと合流するまでの回想をしますか。

図書館を出て俺は武器屋へと入っていった。

カラコルという街は貿易都市と呼ばれるだけあって（6話にちよ
こつとだけ書いてある）武器の種類は豊富だ。

剣、鎌、槍、ロッド、ハンマーなどたくさんあった。

ちなみに俺は魔法で戦つていこうと思うのでロッド希望だ。前衛
後衛のバランスを考えてもセレンは明らかに前衛だからな。という
のは建て前で、ホントのところは怖いからだ。命の奪い合いなんて
元の世界じゃしたことないし、相手の命を奪うことに躊躇して殺さ
れるかもしれない。そんな前衛に少女であるセレンを出すのはどう
かと思うが、こつちの世界で戦つてきたセレンの方が俺より適任だ。

いずれは俺も最前線で仲間を守れるようになりたいが…

まあ、今こんな事を話してもしょうがない。

さて、この店にあるロットだが、

- ・天雷のロット（雷強化） 1万ワロ
- ・業火のロット（炎強化） 1万ワロ
- ・氷雪のロット（氷強化） 1万ワロ
- ・風斬のロット（風強化） 1万ワロ
- ・店先に落ちてたロット 1ワロ

が、主なロットだ。ちなみにワロというのはこの世界の貨幣で、スーパ―で100円で買えそうな缶詰めが10ワロだったから1ワロ10円と思ってくれて良さそうだ……。もう突っ込んでいいよな？最後のって商品なの！？売る気ゼロだろ！

「すいませ〜ん」

俺が店員を呼ぶと、店の奥から若い男性が出てきた。

「どうしたつすか？」

口調軽いなこの人。

「この『店先に落ちてたロット』って何ですか？」

「ああ、それつすか？それは先週1日の仕事を終えて店をしまおうと店先に行ったら『持ち主を見つけてやってください』っていう張り紙と一緒に落ちてたんつすよ。で、一応誰かが持ち主になっってくれるように売ってるんすよ」

変わった人も居たもんだな〜

「へ〜、じゃあそれ俺が買ってもいいですか？」

1ワロだしな。損はしないだろ。

「へい、まいどあり〜。代金は1ワロつす」

1ワロス！？と、つい反応してしまった俺だがすぐにこの人の口癖と理解する。

「はい、1ワロス」

しまった〜！！そんな事考えてたらつい言っちゃった〜！！

「？ ありがとうございます〜」

良かった。店員は無視してくれた。
さて、時間もちょうどいいし、ギルドに行きますか。

って感じてした。

「サンキュー、終わったぜ」

「終わったぜって、あんた何もしてなかったじゃない」
変なの、と半眼で見られてしまった。

「さて、準備が整ったわけだが、どこに行こうか」

「え！？そんな事も決めてなかったの？ホント馬鹿ね！」

「ごめんなさい。じゃ、どっか静かな村みたいなのってある？」
この街は人が多くて住むには落ち着かない。

「この辺りだったらキルファ村かな？カラコルから南東へ3時間
くらい歩いた所にあるわ」

「じゃそこにしますか。それではそれでは、出発！」

「ちよつと待った」

歩き出した俺の首ねっこを掴まれて立ち止まる。

「どしたの？」

「どしたの？じゃないわよ！まったく！街を出たらいつ魔物に遭
遇するか分からないのよ！？戦う時のこと考えないと」

ああ、そうか。今までは俺1人で戦ってたから全然気にしてなか
ったな。反省。

「俺はロッド持つてることから分かるように魔術師。後衛で応援、
もとい支援がメインだな」

いざとなったら前衛でも頑張るけど。

「ちよつど良かったわね。私は剣士で前衛タイプよ」

「じゃ、戦闘がはじまったら……」

と、打ち合わせをした。じゃ、今度こそ、
「行きますか」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（後書き）

次回予告

潤「いよいよ出発か。オラ、ワクワクすつぞ。ええつと、次回は俺とセレンによる初めての共同作業。だそうです。どうせ戦闘だろ？期待させて落っこつことは作者の常套手段だからな。みんなも気をつけるよ。」

10 なんか、相方が凄いです（前書き）

朝から何書いてんのかというツツコミについてはスルーの方向で…
学生は学校があるから早起きなんです

10 なんか、相方が凄いです

どうも、この頃名字である羽山を使わなすぎて、「あれ？俺って何 潤だったっけ？」ってなり始めてる羽山 潤です。

さてさて、前はセレンと街を出て終わりました…では今、俺たちはどんな状況にいるでしょう？

答えは簡単。ちっこいドラゴンだかてっかいトカゲだか10匹くらいと戦闘中（初めての共同作業中）です。おつかしくな～。前回の後書きで作者の意図を見破って戦闘フラグを回避したと思ったのに…

「ジュン！何突っ立ってんの！？戦うわよ」

だそうです。もう剣抜いてあるよ…やる気Maxだなセレン。

「へーい。じゃ、後衛で大人しく応援してるよ」

「分かった。って、ちゃんと支援しなさいよ！」

思わず後ろを振り返り俺を睨みつけるセレン。のりツッコミも出来るのか…優秀だな。

ってかトカゲ来てるぞ？前見ないと危ないんじゃない？しかしあのツンデレ剣士（略してつんけんなんてどうだろう？どうでもいい？さいますか）は背後に迫ったトカゲを

「邪魔っ」

と言って振り返りもせずには斬り伏せた。

ってか普通に強くない？俺いらなくね？

「俺は今『いのちだいじに』って命令が下ってるから攻撃の行動がとれなくて」

と、某ゲームの作戦名を出して動こうとしない俺。

「何意味わかんないこと言ってるの？早く戦いなさいよっ！」

トカゲを斬っては捨て、斬っては捨てを繰り返して残りを3匹にしたセレンが言う。もう戦闘にすらなっていない。

「分かったよ」

って言った瞬間、空気を読んでかトカゲが1匹俺に向かってきた。そういうことで俺も戦闘に強制参加。

じゃ、折角だし魔法使ってみるか。まずは詠唱してイメージを高めるんだっけ？

「えゝ、雷、電気、電池…」

と詠唱だか連想ゲームだかを始める俺。5くらい言ってもういいかと思ひ、

「サンダー！」

って唱える。すると次の瞬間、天から敵に雷が…なんて都合のいい展開は待っておらず、俺とトカゲの間にビリッと静電気くらいの電気が流れた。

…よ、弱えゝ。想像力が足りないっばいな。

でも今の静電気でトカゲは苛立ったようで、真っ直ぐ俺に突っ込んできた。それを俺は大上段に構えたロッドをトカゲの首目掛けて振り下ろし、首の骨を折って絶命させた。うん。結果オーライ。

さて、俺が1匹倒す間にセレンは残りの2匹を倒していて、初めての共同作業は無事終了した。

「ジュン、後衛なのに魔法が出来ないって…もしかして弱い？」

まあ、魔法使ったのも初めてだし元々前衛タイプだからな。とは言わずに、

「はい、こつちの世界に来て日が浅いもんで」

と言っておく。嘘ではないからな。とにかく非常時以外は後衛でのんびりしてたいし。

「ジュンの世界は平和だったのね。まあいいわ。しょうがないからジュンも私が守ってあげる」

ニヤニヤしながらそう言ってきた。セレンにしては珍しい表情だなとおもいつつ、断る理由もないってかむしろ大歓迎なので、

「よろしく願います」

とだけ言っておいた。

ちなみに今俺たちはカラコルから南東に2時間ほど進んだ所にい

る。つまりあと1時間ほど進むと村に着くのだ。今までに魔物はさつきの集団以外見かけていないので、この辺りに魔物は少ないのかセレンに聞いたところ、「そうね。街道が整備されてるから遭遇することはめったにないわ」らしい。

本題はここからだ。残りの道のりは街道の整備されていない森を行かなくてはならないらしい。当然魔物もうつじゃうつじゃ…今から気が重いぜ。

「じゃ、行きましょ」

という言葉が「じゃ、逝きましょ」に脳内変換されたのはしょうがない事だろう。うん。

「魔物に会わないように祈ってくださいか」

そう言い、俺たちは森の中へと入っていった。

10 なんか、相方が凄いです（後書き）

次回予告

潤「うわゝ次回は・・・森とか憂鬱だゝ。どう考えても戦闘があるでしょ。森林浴で終わるわけないもんね。何の嫌がらせだ作者。あと電車の中だからってコソコソとスマホ使って打つの止めろよ。次からは堂々と打つように！」

11 なんか、地面から出てきました（前書き）

魔法使っちゃいます。

11 なんか、地面から出てきました

やってきました。森の中。まだ日が出ているはずなのに中は薄暗い。虫もいつぱいいる。しかもジメジメしてる。うん、最悪だね。

「まゝだゝ？」

セレンに聞く。

「まだよっ！うっさいわね！！」

大分厳しい言い方！もつと優しくしてくれてもいいじゃん。ツンツンめっ。

「すぐに怒るなんてカルシウムが足りないんじゃないかい？」

牛乳嫌いな俺が言えたことじゃないけど。

「森に入ってから5分おき位に言われてれば誰だって苛立つわよ！ジュンの方が我慢が出来ないなんてカルシウムが足りないんじゃない？い？」

言い返されてしまった…読者の皆さんだって俺の方が正しいと思うでしょ？え、お前が悪いから謝れって？俺が間違ってたの？そうだったのか？

「セレン。脳内会議の結果、俺が悪いと分かったよ。悪かった」

そう言くとセレンは顔を赤く染めて、

「わ、分かればいいのよ。変なジュンね！……私も言い過ぎた、ごめん」

と返した。最後の方はよく聞こえなかったが、俺の情報（もちろんラノベですが？）によると聞き直さない方がいいとなっているので無難に、

「お、おう。今度からは気を付ける」

と言っておいた。

こんなやりとりをしていたら森を抜けていた。うん、太陽って素晴らしい。あれ？そういえば1回も戦闘がなかったな。俺の予想の常に正反対を貫きやがって、作者の天の邪鬼め。

あとは平原を5分ほど歩けば、歩けば…

「何て村だっけ？」

誰にでもど忘れはあるよね。あくまでも忘れです。忘れているわけではありません。大切な事なので2回言いました。

「キルファ村よ。300人位の人が住んでる小さな村。周囲を大きな川と森で囲まれているから基本的に自給自足で成り立っているわ」
だそうです。

「ありがとう。助かったよ」

するとセレンは顔をさつき以上に

真っ赤に染めて、

「ふ、ふん、常識よっ！ジュンも早く覚えてよね！」

と言って早足で前に進んでしまった。可愛いヤツめ。

俺は「善処する」と言って歩みを進めようとした。そう、進めよう（・・・）とな。

（地面の下に何か居る！？）

咄嗟に気付いた俺はセレンにも声を掛けた。

「セレン！下から何か出てくるぞ！！」

俺の言葉にセレンは、え？と反応をし、ヤツに気付いたのか走り出すが、ダメだヤツの方が速い。

（ヤバイ、このままだと間に合わねえ）

何故か知らんが地面の下ヤツの狙いはセレンだ。しょうがねえ。

「安定する体勢になつて剣の腹をこっちに向ける！」

セレンは有り難いことにすぐに行動に移してくれた。間に合うか…

「凍りやがれ！グランドアイスッ！吹き荒れる！テクノウィンド！！」

中級氷魔法を詠唱してセレンの足下やその周囲50メートルの地面を凍り漬けにする。その後に詠唱したテクノウィンドという中級風魔法を、セレンの剣の腹に1点集中させることで瞬間的に遠くまで滑らせる。

セレンが滑っていった直後、さっきまでセレンがいた場所の地面から氷を突き破って直径2メートル位のやたらでかい緑のワームがでてきた。

（なんとか間に合ったな。正直魔法に頼るのは賭けだったけど）

ちなみにさっき使った魔法。グランドアイスはアイスの1こ上の魔法で、地面を凍らせる範囲魔法。テクノウィンドはウィンドの1こ上の魔法で、対象に鎌鼬をぶつける技だ。今頃セレンの剣はボロボロだろう。後で謝れないと。ちよつと飛ばす方向間違えちゃってセレンが木にぶつかって気絶したのは俺と読者の皆さんとの秘密だ。くれぐれも作者にはれないようにな？

「デカブツめ。よくもセレンを吹っ飛ばしたな！覚悟しろよ？」

皆さん、頼むからそんな目で俺を見ないで。・・・新しい境地に目覚めちゃう。

グオオオオア！！

ワームが待ちかねて吠え出しちゃったよ。じゃ、冗談はここら辺にして、

「俺がセレンを気絶させたのをお前は見てたからな。悪いが口を滑らせないように殺させてもらうぜ」

え？悪役になってるって？バカ言っちゃいけませんよ。俺は善良な一般ピーポウ（ネイティヴっぽく）ですよ。

って、また冗談始まっちゃったよ。俺の意志は生卵よりも柔らかいな…ま、いっか、俺らしいし。

グオオオとワームがこっちに向かって突進してくる。ハッキリ言っ
てめちやくちゃキモいつすワームの兄さん…

さて、あれだけでかいと物理攻撃は効きそうにないな。魔力もまだ余裕があるから魔法で戦うか

あ、そうそう、気づいてる人も多いと思うけど、今回はここまで。後書きに俺が習得した魔法を載せとくから、それでも読んで予習しつつ次の投稿をお楽しみに！

どうした作者？え？魔法の説明に文字数使いそうだからここで次回予告しとけて？ハイハイ、了解。

潤「次回予告なんて誰得なコーナーだよ、と最近思い始めている潤君です。次回は皆さんの想像通り、ワームとの戦いです。一刻も早く倒して俺の心の安寧を取り戻せ！」

11 なんか、地面から出てきました（後書き）

魔法一覧

《下級魔法》

・サンダー 対象に雷を落とす魔法、のほず。本編じゃ残念な結果に…

・ファイヤー 対象を燃やす魔法。外で料理するときに便利。

・アイス 対象を凍り漬けにする魔法。風邪を引いたときにも使えるぞ

・ウィンド 対象を細かい風で切り刻む魔法。キャベツの千切りにもってこい。

《中級魔法》

・サンダージャッジメント 10～20個の雷球を対象の周りに浮かべ、任意のタイミングで一斉に雷球から雷が対象目掛けて飛んでくる。

・サンダーボイル スーザン・ボイルとは関係ない。サンダージャッジメントの派生系。10～20個の雷球を1つ圧縮し、対象にぶつける魔法。

・ファイヤーウォール 別に何かのシステムの名前じゃない。炎の壁を作り出し、任意のタイミングで倒して対象を焼き尽くす。防御としても使える。

・ダークネスファイヤー ファイヤーウォールの派生系。炎自身をも焦がす温度の黒い炎を対象の地面から柱状に発生させる魔法。

・グラントアイス 対象の足下を中心に半径50メートルの地面を凍り漬けにする。

・ピアシングアイス グラントアイスの派生系。対象の足下を中心に半径30メートルの地面からドデカイ氷柱を出現させる魔法。

・テクノウィンド 対象を鎌鼬で四方八方から切り刻む魔法。潤

君は頑張って1点集中させました。

・ウィンドバースト テクノウィンドの派生系。自分を中心に半径10メートルに鎌鼬を起こす。これも防御にも使える。

・ディザスタスクエイク 対象の地面をひっくり返す魔法。農業に使えるかも。

12 なんか、シリアスです（前書き）

何か最終回みたいになりました。

12 なんか、シリアスです

さて、前回は微妙なところで終わったから、ワームが突進している途中という気持ち悪い画からスタートする。

ってか早いとこどうにかしないと喰われそうだ…

「燃やし尽くせ！ファイヤーウォール」

俺の目の前に高さ10メートル横5メートルくらいの炎の壁が出来上がる。熱く感じないな。術者に対する安心設計か？

俺気付いたんだけどさ、下手に長い詠唱するよりもささと詠唱した方が上手くいくんだよね。たぶん俺の場合、ラノベとかゲームとかでこういうイメージは身近に有ったから、変に意識するとかえってイメージが霞んじやうんだろうね。

さて、そろそろ間合いに入ったな。

そう思い、俺は心の中で倒れろって念じた。

すると、炎の壁は俺の思い通り倒れ始めた。

・・・こっち側に…って、ええええッ！？こっち側！？何でこんな時にギャグ発動してんだよ！ちよ、まっ、や、やべえ！

と、俺はどうすることも出来ず、あたふたと慌てる。

どうするどうする、と考えに考えて、俺はもう1つの防御にも使える魔法『ウィンドバースト』を唱えることにした。

「我を守りし聖なる風よ！マジで頼みます！ウィンドバースト」

ゴウツという音と共に俺の周りで風がうねった次の瞬間、凶悪なまでの風が周囲の草花とファイヤーウォールの炎を刈り取った。ワームも例外ではなく、動けはするものの、身体から体液が漏れ出してグロさ当社比2倍である。

・・・この魔法強過ぎだろ

そんなことを考えていたら、ワームがこっちに口を向けて何かそこそと行動していた。無傷で。

って、無傷ウウウ！？こっちの生物はミドリムシといいワームといい何でこんなに生命力が有り余ってんだよ！1発で倒せってか？いいぜ、やってやろうじゃないか。

と言っても使える魔法はあと2回が魔力の限界だな。

どうするか？と考えていると、こそこそしてたワームの口から変な液体が俺に向かって飛んできた。

テンプレだな。この手の攻撃は酸か毒で、触れるのはもちろん発生した気体を吸ってもアウトってパターンだろ？

「見え見えだぜ！」

と、軽く飛んできた液体を避ける。・・・移動した先に地面から出したワームの尻尾があると気付かずに。

俺はヤツのめちやくちや重い一撃を食らってしまった。チクシヨウ、こそこそしてたあの時か？

その後もヤツは俺で遊ぶかのように尻尾で俺を木に叩きつけたり、空中に放り投げて尻尾で叩き落したりしていた。

「やつべ、身体が動かねえ…」

恐らくあばらが何本かいつてしまっただろう。内臓ももうボロボロだ。思えばこっちの世界に来て初めて怪我したな…

はあ、もうすぐ俺は死ぬのか。思ったよりあっけなかったな…いや、まだあと1つやり残したことがあった。

「俺にはな…まだ死ぬわけにはいかねえ理由^{わけ}があんだよ！！」

恐らくこの言葉はワームに対してじゃなくて自分自身に言いたいことだろう。

俺が死んだら誰がセレンをワームから、いやこの世界から守るってんだよ！

そう考え俺は自分の身体に鞭打って無理やり立ち上がる。

「デカブツ、今から俺の最大の一撃を叩き込んでやる。・・・かか

「つてきな」

その言葉を理解したのかは分からないがワームは俺に向かって突進してきた。ヤツも決着を付ける気だろう。

俺は口の中に溜まっていた血を吐き出して、全身に魔力を巡らせ
身体強化を図る。

そして残った魔力を右手に集めて刀のような形状をとる。魔力つて黒かったんだな。見たこと無かったから知らなかった。

さあ、決戦の時間だ。

ワームが俺の目の前にまで迫ってきて、俺の身体の呑み込まんと
して、何重にも重なった歯を持つ口を大きく開く。

俺はワームの頭と思われる辺りまでジャンプした。身体強化した俺のジャンプはワームから見れば瞬間移動にも見えただろう。

ワームは一瞬混乱したが、すぐに俺の場所に気付いた。しかし、俺にはその僅かな隙だけで充分だった。

「食らいやがれえええッ!!!!!!」

グチャツという擬音語がぴったりだろう。そんな音を立てて俺の魔力でできた黒い刀はワームの脳天から突き刺さった。

もう動かないし殺せたらんたろう。

・ ・ ・ ダメだ。意識が、遠のく。

「ごめん、な、セレン。お前の、事、世界から、守ってや、れぞ、うに、な、」

12 なんか、シリアスです（後書き）

次回予告

転生の女神「どうもどうも、久しぶりね」。最近出れてなかったけど主人公が生死不明って事で今日は私が次回予告をします。つかやバかったね。潤君大丈夫かなあ？最終回にならなきゃいけないけど、とりあえず今回は潤君が生きてた場合は潤君視点で何かするんじゃない？とにかく、次回を見てみないと分かんないわ」

13 なんか、生きてました（前書き）

潤は爆発すれば世の中平和になると思う

13 なんか、生きてました

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見当たらないから真っ白い空間か？

・・・あれ？この文章。それにこの空間。何か俺は知ってる気がするぞ？

「あつ、起きた〜？」

そこには、セレンではない見知った顔がいた。

「お前はKY女神！そうか、ここは転生する直前の空間だ〜」
でも何でここに居るんだ？

「転生の女神だけだね…あなたはワームと戦って死にかけてたから私が空間転移で運んで復活させたの」

ワーム、ワーム・・・はっ！

「セレンは？セレンは大丈夫だったのか？」

「復活して早々に彼女の心配とは、ニクいねコノコノ〜」

「そ、そんなんじゃないやねえよ！で、どうなんだよ？」

こんな時に顔を赤くするのはセレンのはずなのに何故か今俺は顔が熱い。きつと顔が赤くなってるんだろう。

「彼女なら無事だよ〜。誰かさんがいなくて泣いてたけどね〜」

KY女神がニヤニヤしながら言ってくる。

そうか、俺がいなくなっただことに泣いてくれたのか…申し訳ない気持ちもあるけど何か嬉しいな。

「で、そろそろ戻りたいんだけど」

「どっちの世界に？」

はい？どゆこと？

「今なら元の世界と異世界、どっちか好きな方に戻してあげ…」

「異世界だな。考えるまでもない」

俺がそう言くとKY女神は意地の悪い笑みを浮かべて、

「異世界には未練をたつぷり残してきたんだね」

とか言いやがった。まあ、ホントのことなんだけど。

「う、うるさいな、早く転移してくれよ」

「ハイハイ、あ、あとこれはアドバイスね。もっと強く、仲間を守るくらい強くなったら古の神々の神殿って所に行くといいよ。あなたの為になる何かが置いてあるから」

「おう、サンキューな。お前は今まで会った女神の中で1番の女神だ」

「ホント？ありがとう。困ったら何時でも呼んでね」

女神なんてお前以外見たこともないが、嘘は吐いてない。嘘は。

「って、お前呼んでもほとんど居ないだらっ！？」

転移が始まったのか俺の身体が薄くなってきた。

「嘘は吐いてない。嘘は」

コイツ…俺の考えまで読んでやがった。プライバシーの侵害で訴えてやるうかな。

そんなことを考えていたらいつの間にか異世界に着いていた。

「ここは…ワームと戦った場所か」

そこにワームの死体はもう無く、俺がウィンドバーストを使った痕だけがぼっかりと残っていた。

（（着いた？））

この声はKY女神か。

（（おう、着いたぞ。セレンはキルファ村に居るのか？））

今は一刻も早くセレンに会って安心させたい。

（（うん。村に居るよ））

（（分かった。じゃ切るぞ。・・・覗き見るじゃね））

くぎを差しとかなないとやりかねないからな。

（（ソ、ソンナノアタリマエジャナイ））

分かり易っ！！女神酷く分かり易っ！！

キルファ村に入ったとはいいが、セレンがどこにいるのか分からん…
片っ端から行きますか。

村自体は広くないので1人目に尋ねてセレンがどこに居るかすぐに分かった。どうやら宿屋に居るらしい。

宿屋2階のセレンの部屋の前まで来た。第一声はどうしようか、セレンは怒ってないだろうか。そんな余計なことばかり頭に浮かぶ（しっかりしろ！羽山 潤！何を怖がってるんだ）

自分を叱咤激励して部屋へと入る。中にはイスに座ってどこか暗い表情で床を見つめていた。

「セ、セレンさん？セレン？セレン？」

なかなか気付かずにいな…

「セレンってば」

少し強めに言ってみる。

「？、！！」

あ、気付いた。セレンはまるで幽霊でも見たかのように口をパクパクさせている。いや、金魚にも似ているな…いやいや、よく考えてみれば口をパクパクさせるのはなにも金魚に限ったことじゃない魚であればあの行動はみんなやっている。だとすれば魚のようにと言うべきか？いや、それは抽象的過ぎだろう…

おっと、セレンの心理戦で危うく思考の深みにはまるところだった。セレン、恐ろしい娘っ！

「ジ、ジュン？」

あ、あれ？もしかして忘れられてる？いやいや、まだ数日しか経っていないはずだぞ？

「俺のこと、ご存知ですよ…ほら、数日前まで一緒に…」

「ジュン〜！！」

そう言っ（叫んで？）セレンは俺に抱きついてきた。俺はビツクリしておもわず、

「は、はい。確かに潤は俺ですよ」

という変なことをいつてしまった…本当は「潤は俺の名前ですよ」
って言うはずだったのに。

「今まで何処行つてたのよ！バカッ！」

グハアッ、涙目＋上目遣いは反則！審判、早く反則とつてよ。このままじゃ俺の心臓に良くない！

「と、とりあえず一旦離れて、お、落ち着こうじゃ、じゃないか」

まず俺が落ち着け！と思わず自分に突っ込んでしまったのは秘密だ。

「っ！…ご、ごめんなさい。つい」

いいって、と言つて一回落ち着く。すーはー、すーはー。よし。

「今まで何処行つてたかだけど、友達に拉致られて、しばらく療養してた。おかげですっかり元気になっちゃって」

ハハハ、と笑つて誤魔化す。それに対してセレンは「ふん。無事ならいいわ」と言っていた。

その後、俺たちは気絶した後どうなったかそれぞれ話し、その日は宿で寝た。か、勘違いしないでよね！ちゃんとお金は払ったんだからね！

うん、俺にツンデレの才能は無さそうだな…

13 なんか、生きてました（後書き）

次回予告

潤「次回予告に復帰したぜ〜！あと誰だ前書きにあんな事書いたの！？どうせ作者だろうけどな…さてさて、次回からは、またいつもの日常にもどります。俺はこれからキルファ村でなにをしてくのかな〜」

14 なんか、違法な気がします（前書き）

説明回です

14 なんか、違法な気がします

「さて、今日は何をしようか」

金が無くなってきたから働かなきゃいけないし、セレンの剣も買わなくちゃいけない。あと魔法の研究もしたいし…やるべきことに事欠かない。

「そう言うことはまずベッドから起きてきてから言いなさい」

セレンに一蹴されてしまった。だってベッド気持ちえゝやん。

「俺はベッドから起きようとしてるんだ。けどベッドが俺を離したくないってきかなくて…」

「……………」

「……………」

「…………ハッ」

なんかあざ笑われたアツ！

「しょうがない、起きるか」

そう言って掛け布団を持って起き上が、ろうとして止まる。

「ど、どうしたの？」

体調でも悪いのかと、セレンが心配そうに言う。

「ベッドじゃない！」

「え、え？どうしたの？」

突然変なことを言い出した俺にセレンが一層混乱してる。

「だから、ベッドじゃなかったんだよ。セレン」

「何がよ？」

俺の真剣な表情を見てセレンも真剣な表情で聞き返す。

「本当に俺を離したくないのは・・・掛けぶ…」

スコーンツという音を伴って頭を叩かれる。まだ最後まで言っていなかったのに。

「私の心配を返しなさいよー！さっさと起きなさい！」

「分かったよ、お母さん」

「私はお母さんじゃないわよ！バツカじゃないの？」

そう言ってセレンは部屋を出て行ってしまった。

「・・・起きるか」

1人でやることもないので起きようとする。が、今度は本気で起きれない。この感覚、覚えがあるぞ。確かその時は周囲の風景が動かなかったんだが... ってことは

「作者アアツ！お前か！面倒くさい事しやがって」

このままじゃ俺がまたふざけてるようにしか見えないじゃねえか！いや、マジで、次はマジでヤバいから。ちゃんと異世界旅しますから！

作者様お願いします。

おつ、動けるようになった。さて、今後の方針も旅をするってことになっちゃったな。セレンに言ってくるか。

「ってことでまた旅に出ることになりました」

正直に話しました。作者からお告げがあったと、

「へー、作者がねー。って、作者って何のことよ！ふざけてないでちゃんと方針考えて！」

だろうね。こんな反応だって分かってたさ。

「ホントなんだってー。とりあえず適当に旅しようぜ。世界1周すれば作者も満足だろうしさ」

「世界1周って、どんだけ長い旅する気なのよ。まったく、まあ、いいわ。付き合ってあげる」

なんとか了承してもらえた。

「でもその前に私の剣をどうにかしてね」

・・・そうでした。今セレンは武器持っていないだった。

「じゃ、そのための金をサッと稼ぎますか」

ってことでやってきました。ギルドです。

セレンは外ではローブを着てフードを深く被っている。大変なんだな…

ギルドに加入するために、前回の俺の失敗を生かして今回は秘密兵器を持ってきたぜ。

「すいませ〜ん、ギルドに加入したいんですけど〜」

この村のギルドの受付は可愛い女の子だったので、俺のモチベーションは上がりっぱなしなのはセレンには絶対に秘密だぞ。

「ではこちらに身分証明書と経歴を提出して下さい」

前回はここで失敗した訳だが、今回の俺は一味違うぜ！

「これですね。どうぞ」

そう言っただけ俺は2人分の身分証明書と経歴を出す。・・・偽物のな。

本来この世界では身分証明書は国から発行してもらうのだが、俺はカラコルの街のギルドで身分証明書の形状、デザインをこっそり覚えた。それなりに時間は掛かったがバレないようなものが出来たと思う。違法な気がするのは気のせいだろう。

「確か承りました。兄妹でのご登録ですね？お兄さんはウエル・カラーさん。妹さんがセラフィ・カラーさんでよろしいですか？」

セレンの了承も得ているのでなんら問題はない。

ちなみに俺の偽名ウエルは潤っているという意味のウエルシーからとり、セレンは天使のような美しさと気高さを持っているということセラフィックからとった。

「はい。間違いありません」
偽名だけどね。

「ではギルド加入を承認します。ギルドの説明は必要ですか？」

俺はもちろんセレンもギルドには入っていなかったので知らないだろう。

「お願いします」

「了解しました。まずギルドについてですが、ご存知の通りギルド

はほとんどの街や村に存在しています。そしてこの…」

と言って受付の女の子は机の中からクレジットカード大のプラスチックっぽいカードを出した。

「このギルドカードがあれば、どのギルドでも依頼が受けられます。逆に無くしてしまうと作り直しとなってしまうますから無くさないようにご注意下さい。これはあなた方のギルドカードです」

そう言うのと、彼女は俺たちにギルドカードなるものを渡した。

「次に依頼についてです。依頼にはE、Sランクまであり、D、Eが初級冒険者向け、Cが中級冒険者向け、A、Bが上級冒険者向けとなっています。あくまでもこれは目安ですので、初級冒険者が上級冒険者向けの依頼を受けることも出来ます。しかし依頼は失敗してしまうと違約金を払わなければなりません、下手すると命を落としかねないので、自分の身の丈に合った依頼を受けるようにしてください。あとSランクについてですが、Sランクの依頼はプロミネントギルダという、冒険者のトップ10に入らないと受けられません。プロミネントギルダになるには現在プロミネントギルダである人をギルド立ち会いの下で倒すことが条件です。ですがプロミネントギルダは実質世界最強の10人なので年老いるまでは無理だと言われています」

途中からそのなんちゃらギルダの話になっていますよお姉さん…とりあえず俺はD、Eランクの依頼をやって稼げばいいんだな。

「最後に冒険者同士の共闘、パーティーについてですが、これは特にギルドに申請する必要はありません。パーティーに入るか入らないかは自由ですが、依頼達成時の報酬は変わらないので人数を多くするとその分1人あたりの報酬は少なくなります。以上がギルドについてですが、何か質問はありますか？」

パーティーはセレンと2人で組めば充分だろう。あとは…

「依頼の達成はどこで報告すればいいの？」

と、セレンが質問する。確かに、どうすればいいんだ？

「依頼を完遂したら、私たち受付の者に報告すれば依頼達成となり

ます。その時に魔物なら特定の部位、採集なら採集した物、配達なら領収書を提出していただきます」

なるほど、インチキは出来ないと。

「他に質問がないようでしたらこれにて説明を終了させていただきます」

セレンは？と顔を見るが、質問は無いのか首を横に振った。俺も特にないな。

「大丈夫そうです。ありがとうございました」

「はい。ご活躍をお祈りしています」

そうして俺たちは受付から離れた。

「さて、依頼を受けますか」

14 なんか、違法な気がします（後書き）

次回予告

潤「せっかくのんびりいこうと思ってたのに：作者の奴め、怨んでやる。さて、ギルドで説明も終わって次はいよいよ依頼を受けるぜ！って言っても簡単なのしか受ける気はないけどな」

15 なんか、反則的です（前書き）

殺すとは、そういうこと

15 なんか、反則的です

「依頼、依頼」と

俺たちは今、依頼が提示されている。掲示板の前で依頼を探している。

「これなんか良さそうじゃない？」

と、セレンが俺に依頼用紙を見せる。

《Dランク配達依頼》

キルファ村のギルドに預けてある小包をカラコルの街まで運んでほしい。

報酬：3000ワロ

注意：中身は割れ物なので、慎重に運んでほしい。中身が割れてしまったり傷ついてしまった場合報酬は減額。

「ん、確かにカラコルは1度行ってるから分かるけど…セレンは剣がないから戦えないし、この前みたいに魔物に襲われたら危ないんじゃない？」

「つてか久しぶりにワロって聞いたな…」

「それもそうね…じゃあこれは？」

《Eランク雑務依頼》

キルファ村の宿屋で模様替えをする。その手伝いをする。

報酬：1000ワロ

注意：おおきな物も動かすので力のある人をお願いします。人数は1人のみ。

「人数が1人までかあ、いい依頼だけだな」

まあ、あの宿屋小さかったし、人数が居ても邪魔なんだろう。

「ならお互い別々の依頼を受けない？その方が効率もいいし」

「そうだな。じゃあ俺は自宅警備員として部屋に…」

「ちゃんと働きなさい！」

言われてしまった。ちゃんとした仕事だと思うぞ？自宅警備員。

給料はもらえないけどな。

「へーい。じゃ、どの依頼を受けようかな」

「私はこの模様替えの依頼を受けるから、ジュンもちゃんと働きなさいよ！」

そう言い残してセレンは行ってしまった。

「さて、真面目に決めますか」

そう自分に言い聞かせて、改めて依頼を見る。

（そう言えば、ワームを倒したときのあの戦い方、あれが実用的かどうかやってみるか）

そう思って魔物の討伐依頼を見た。

《Dランク討伐依頼》

キルファ村の南西でビッグリザードを確認。これを討伐してほしい。

報酬：ビッグリザード1体につき500フロ

証明部位：牙（2本1組とする）

注意：群れで行動するので周囲を警戒する。

写真があつたので見てみると、キルファ村に来る途中に出会った

小さいドラゴンみたいなヤツだった。

ビッグリザードってことはトカゲだったのか…

何にせよ、そんなに強くない魔物だったので、この依頼を受けることにする。

「この依頼受けたいんですけど…」

受付まで依頼用紙を持っていく。

「ビッグリザード討伐ですね。お1人で行くんですか？」

「はい、そのつもりですけど…」

「相手は群れで行動する魔物です。よければ1人くらい一緒に行く仲間を探しましょうか？」

今回は自分の力を確かめるためでもあるので1人で行きたいところだなあ。

「今回はいいです。ご親切にどうも」

そう言つと、受付のお姉さんは心配そうな顔になるが、

「分かりました。頑張ってください」

と言ってくれた。

「じゃ、行つてきます」

と俺が言つと、

「はい。逝つて…行つてらっしゃい」

と、言い直しながらも返してくれた。みんな、誤字には気を付けようね！

「あいつらか…」

そう言つた俺の視線の先には件のトカゲがいた。30匹位…

多くねッ！？前回セレンと戦った時は10匹位だったのに。予定変更。最初はある黒い刀と身体能力強化だけで戦う予定だったけど、魔法で一旦数を減らそう。べ、別に自分の接近戦の力に自信がない

訳じゃないんだからね！うざい？ごめんなさい。

「さてと、出来るか分かんねえけど…俺の魅力に痺れなっ！！サンダージャッジメント！」

普段じゃ恥ずかしくて言えないようなセリフを1人なので恥ずかしくなく言える。

ちなみにこのサンダージャッジメントは普通のとはちょっと違う。普通は20個位の雷球を1体に集中させるのだが、今回は1個1個をビッグリザード1体毎に集中させた。おかげで制御が物凄い大変だ。

ビッグリザードも俺のことに気付いてこっちに向かってくる。

「さあ、いくぜ！」

と気合いを入れて、パチンと指を弾く。

バリバリツと音を立てて20個の雷球がそれぞれの標的に雷を放つ。初めて戦った時のような静電気ではないので、その一撃で20匹が絶命する。

「残り10匹！」

そう言っただけ魔力を身体に巡らせて身体能力強化をする。さらに右手に魔力を集中させて刀の形状をとらせる。

「さあ、いくぜ！」

と気合いを入れて…え？さっきと同じこと言ってる？そう堅いこと言わず。読んでやってんだから文章を工夫しろって？いやいや、咄嗟に出ちゃったんだからしょうがないでしょ！？そんな無茶振りされ…

グギャーッと、目の前にビッグリザードの牙が迫る。

「危ねっ…！」

間一髪のところまで避けて、後ろに跳んで距離をとる。

ほら、皆さんが邪魔するから危なかったじゃん。次からは気をつけるように。

「ふっ…！」

と、脚に力を入れて強化された脚力でビッグリザードに迫り、刀

を一閃。その一撃でビッグリザードは胴体が2つにさよならした。
身体が風のように軽い。俺は今、千でも何でもない風になっている
ようだフハハハハ。

そんな事を考えていると、残りのビッグリザードが全て俺に向か
ってくる。

「っはあっ!!」

と、魔力を刀に込めて薙ぐ。すると、魔力が刃となってビッグリ
ザードたちに襲いかかり一瞬でその命を刈り取る。

・・・人に向けては使えないな。

何はともあれ、依頼は完了したので牙を取って帰ることにした。
戦ってる時はそれどころではなかったけど、可哀想なことをした
な、と今更ながらに思う。俺もいつかはこんな感じで人を殺めてし
まうのだろうか、と少しブルーになりながらビッグリザードたちに
手を合わせ、その場を後にする。

15 なんか、反則的です（後書き）

次回予告

潤「殺したものの分まで生きるのが俺の責任、か…ま、頑張りますか。さて、次回も引き続きギルドでお仕事だ。次はどんな依頼を受けようかな？。ん？何か新たな出会いの予感」

16 なんか、巻き込まれました（前書き）

ギャグ成分が…足りない

16 なんか、巻き込まれました

「依頼達成ですね。では証明部位を提出して下さい」

あの後俺は身体能力強化を掛けたまま村まで軽く走って帰った。1キロくらい離れた場所だったが、それを10秒程で帰れた。軽く走って時速360キロかよ…半端じゃないな。

つてか最近真面目な冒険っぽくなってるな…作者もギャグ成分が足りなくて萎びてきてるぜ。お前は植物かつ！

「あのお、どうされたんですか？」

作者のせいで、心配されちゃったじゃないか。え？責任転嫁だつて？ごめんなさい。

「すいません。これが証明部位の牙です」

そう言ってビッグリザードの牙を60本出す。

「これ全部1人でやったんですか！？」

お姉さんが信じられないような顔でこちらを見ってくる。俺ってそんなに弱そうに見えんのかな…

「そうですけど…何か問題でもありましたか？」

まさか、殺し過ぎで動物、いや今回は魔物か…魔物愛護団体に訴えられるとか？自分で言っていてなんだが、魔物愛護団体って良い人なんだか悪い人なんだか分からない団体だな。

「いえ、凄いな〜と思ひまして…魔物愛護団体が見たら発狂しそうですね」

居るんだっ！！魔物愛護団体ホントに居るんだっ！！

「ハハハハハ」

と、乾いた笑いしか出てこない。

「では依頼を達成しましたので報酬です。ビッグリザードの牙60本なので30匹分、15000ワロです」

どうぞ、とお姉さんがお金の入った袋を渡してくる。

ありがとうございます。と俺は言っ て受付を離れた。今はちょうど1時だ。あ、午後の1時な。当たり前？さいですか。

「あと1つくらい依頼は受けられそうだな」

さっきの依頼も2時間くらいで終わっ たし。

というわけで掲示板前へ行きま…

「てめえ、何のつもりだ！！」

厄介事の香りが…でも野次馬根性が抑えられねえ。止まれっ、俺の両足！

「だからわたしは他人と共闘なんて無理っ て言っ たの、もう付き纏わないで」

結局見に来ちまっ た…それにしてもどうしたんだ？

ああ、読者の皆さんを置いていっ てしまっ たな。今俺の目の前ではゴツい男2人と、俺と同じ年くらいの灰色の髪をもっ 少女（ロツド）を持っているから魔術師だろう）が言い争っ ていた。

「てめえが仲間を敵ご と魔法で怪我させたんじゃねえか！何だその口のききかたは！！」

ふざけんじゃねえ！と、男は少女を殴ろうとする。

っ て冷静に実況してる場合じゃねえ！

「止めるよ。大の大人が暴力振り回してんじゃねえよ」

と、男と少女の間に入っ て男の拳を止める。

はあ、結局厄介事に首突っ 込んだじゃっ たよ。

「てめえには関係ねえだろ！？引っ 込んでろ！」

と、男は俺の肩を強く押す。いや、押そうとする。しかし努力の結果虚しく俺はびくとも動かない。

これがこの男の本気だとしたら見かけ倒しもいいところだ。

「目の前で女の子が殴られそうなのに黙っ て見ていられる程腐っ ちやいないんでね」

決まっ た！俺の言いたい言葉ランキング第3位の言葉を言えた
！

表面上は何て事ない顔してるけど、内心はしゃぎまくりである。

「てめえ、表へ出る！」

えゝ、俺これから依頼受けようと思ってたのにゝ。時間無くなっちゃうじゃん。何で動いちゃったんだよ俺の足！

ってか最近厄介事に巻き込まれる率が半端じゃないんですけど：1回お被いしてもらおうかな、作者が俺に取り憑いてますって。危ない人だと思われること請け合いな。

「どうした？早く来い。今更謝ったところでもう遅いからな」

おっと、男が待ちくたびれて言ってくる。最近のすぐキレる若者って恐いつ。っていうか俺の行動の中に謝るような要素あったか？いや、無いはずだ。（反語）

そんな事を考えつつ男の後ろを歩いていく。

ギルドの中にいる者が騒ぎ立てる中、件の少女だけがどこか冷めた目でこれを見ていた。

16 なんか、巻き込まれました（後書き）

次回予告

潤「はあ、面倒くさいな」ホントに。今から次回が憂鬱だ。俺の運命の管理人（作者）は早いとこどうにかしないと。さて、サッサと男倒して冷めた少女の攻略といきますか」

17 なんか、冷たいです（前書き）

ジュン は ふたまた を しよう と している
ゆるします か？

・ はい

・ いいえ

・ 爆発しろ

17 なんか、冷たいです

俺は男に連れられて外に出た。

「さあ、死にたくなきゃ全力で来な！」

こんな所で全力なんて出せるわけねえだろ。　ってか全力出したら本当に殺しちゃうかもしれないだろ。

「ハイハイ。じゃ、いくぞ」

と言つて俺は全身に魔力を巡らせる。もうお馴染みの身体能力強化だ。

「いい気迫だ。てめえ名前は何て言う？」

自己紹介してるような暇は無いんだけどな。まあ、いいや。

「じゅ、いやウエルだ。ウエル、ウエル、、ウエル・カリィ？いや、ウエル・カーラーだ」

やっちまったアアア！！本名言いそうになった上に偽名間違えたア！！何だよカリィってネイティヴなカレーかつ！！？

「？変な奴だな。カリィは俺だ。アレン・カリィだ」

カリィ居たアアア！！どんな偶然だツ！

「そ、そんな事よりサツサと終わらそう」

マジでお願い。これ以上ボロだす前に早く始めよ？

「生意気言いやがって。いくぜ！」

と、アレン、いや、カリィが俺目掛けて突っ込んできた。

身体能力強化をした俺の目には止まって、は見えないけど。かなり遅く見える。じゃ、サクツと

「はい、終わりと」

俺はカリィに一瞬で間合いを詰め、鳩尾に軽く一発叩き込んで意識を刈り取った。

カリィと一緒にいた男は、カリィが倒されたのを見るや否や逃げ

出してしまった。薄情な奴だ。

「さて」

ギルドに戻って少女の心を開かせるとしますか。

「よう」

ギルドには彼女と受付のお姉さんしか居なかったのですぐに見つけられた。

「なんですか？」

おおうつ、随分冷たい…こりやセレンの時より難しそうだな。

「変な奴に絡まれて大変だったな」

「今もあまり変わっていません」

え？それって俺の事？どうやら彼女の認識では今も変な奴（俺）に絡まれて大変な状況らしい。ああ、目から汗が出てきた。今日そんなに暑くないのに。

「そりやども。ところで君の名前って何て言うの？」

とりあえず話題変更。

「何であなたに教えなくてはならないのですか？」

「君に興味があるってだけじゃだめか…」

「ダメです」

俺の恥ずかしさを堪えて出したキザなセリフがバツサリ切り捨てられたア！まだ言い切ってなかったのに…

「じゃ、俺の名前でも…」

「興味ありません」

そう言い残して彼女はギルドを出て行った。

まあ、今日1日で心開いてくれるとは思ってなかったけどね。

「ナンパに失敗してしまいましたね」

受付のお姉さんがニヤニヤしながら見てくる。

ヤメテッ！何か恥ずかしくなってきた！

その後何だかんだで夜の10時頃に俺は宿の部屋へと戻った。何してたかって？何だかんだだよ、何だかんだ。そこには既にセレンが帰ってきていた。

「遅かったわね」

そう言って俺を迎えてくれる。ちゃんと喋ってくれる女の子が居るっていいなあ。さっきとは別の種類の涙が：

「セレン〜！やっぱりお前が1番だ〜。俺にはお前しかない」

そう言ってセレンに抱き付く。

「え、ちょ、な、何！？は、離れなさいよ。バカッ！」

顔を真っ赤にして言ってくる。

嫌そうな顔をしてないところから察するに：うん。久しぶりのツンデレだな。

「ゴメンゴメン。今日さ〜魔術師の女の子に声掛けたんだけど、冷たくあしらわれちゃってさ〜」

俺がそう言っているとセレンは目に見えて不機嫌になって、

「バカッ！ジュンのバカ！バカジュン！もう知らない！」

と言って自分の部屋に戻ってしまった。

やっぱり女の子の前で別の女の子の話題はタブーだったかな？

謝りに行こうかとも思ったが、もう時間も遅いので明日謝ることにして今日はもう寝ることにした。

17 なんか、冷たいです（後書き）

次回予告

潤「さあ、明日はやることはいっぱいだぞ！セレンに謝って、あの娘の心を開いて、ギルドでお金稼いで…まあ、頑張りますか」

18 なんか、再戦するみたいです（前書き）

遅くなりました。

言い訳をするなら、他の作者さんの作品を読みました。

そうだ、私は悪くない。悪いのはあんな面白い作品を書く作者さんがいけな…すみませんでした。

18 なんか、再戦するみたいです

・・・朝になってしまった。昨日は明日の朝にでも考えればいいや、と思っていたのだが、どう謝っていいか分からぬ。

例えるならそう、テスト前日に明日の朝勉強すればいいや。と思つてその日の夜をゲームに費やしてしまい、次の日の朝に後悔するあの気持ちと相似である。ちなみにこれは作者談であり、俺も元の世界で何回かやらかした事でもある。

おっと、こんな事言つてる場合じゃないな…

案としては、早いとこ謝る。謝罪の意思表示の為に、謝ると共に贈り物をする。この2つが有力候補だな。紙に書いとくか。

うーん、早いとこ謝るを選ぶなら昨日の夜に謝るべきだったな。そう思い早いとこ謝るにバツをする。

だとすると贈り物か…セレンには悪いけどこの件は俺が贈り物を買うまで先延ばしにしてみよう。

そうして贈り物と書いた方にマルをして机の上に置いておく。

「さて」

謝らないのにセレンと会うのは気まずいな…今はまだ6時だけどギルドに行きますか。

『用があるから先に行つてる』という書き置きをドアに貼っておく。これで気付くだろう。

そうして俺は眠い身体を動かしてギルドへ向かった。

ギルドには朝だというのに人が結構いた。みんな仕事熱心だな、なんて感心してしまつたが、後で聞くと今ギルドにいる連中は家がなく、ギルドに入り浸つて1晩中酒を飲み続けているらしい。だからこんなに酒臭いのか。

「今日はどんな依頼を受けようかな」

昨日の昼まではギルドにあまり乗り気じゃなかったくせに何で今はノリノリなのかって？そりゃ贈り物をするっていう目的があるからでしょ。昨日も剣を買って目的はあったけどほら、モチベーションの違いが、ね。

さて、依頼依頼

《Aランク討伐依頼》

キルファ村の東にあるシグト山にジーニアスワームが確認された。村に被害を及ぼす前にこれを討伐せよ。

報酬：30000フロ

証明部位：ジーニアスワームの触角

注意：見た目通りの凶悪なまでのパワーと見た目からは想像出来ない頭脳戦も使える魔物。パーティーを組まねば初級冒険者はもちろん上級冒険者も返り討ちに遭うだろう。

そこに載せてある写真は以前俺が死にかけた件のワームだった。あのデカブツ、そんなに強かったんだな。確かに俺も死にかけたけど。

この依頼はそこら辺の冒険者が受けると死者が出るかもしれないな。俺は昨日のカレーとの、違った、カレーとの戦いで冒険者がどのくらいの強さか分かったが（今朝酔っぱらいから聞いたがカレーはこの村では腕の立つ方らしい）、あの程度では戦いにすらならないだろう。

「俺がやるか」

という一種の責任感の下、この依頼を受けることにした。

「おはようございます。この依頼を受けたいんですけど」

受付まで依頼用紙を持って行った。

「おはようございます。依頼の受注ですね……この依頼を受けるんですか！？いくらビッグリザード30体を1人で殲滅したからって、この依頼は冒険者になったばかりのあなたには無謀かと…あなたがやらなくてもこの村の中級冒険者がやってくれますよ。最近この近くに現れたジーニアスワームを倒した凄腕の持ち主も来てくれるかもしれませんし…」

その声はどこか絶望が混じっているように感じた。
「ってかそのジーニアスワーム倒したの多分俺っす。」

「来てくれなかった場合はどうなるんですか？」

「中級冒険者では多分無理でしょうし、国はこんな辺鄙な所にある村なんて放っておくでしょうから軍にも期待出来ません。村にジーニアスワームがやってきたらあきらめるしか無いでしょうね」

国の軍ってのはそんなもんなのか…

だからさっき受付のお姉さんはどこか絶望したような感じだったんだな。しかしそんな事言っと、

「やっぱり俺が受けます。この村にはお世話になりましたし」

より一層この変な責任感が暴れ出しちゃうじゃないか。

「これ以上何か言っても聞いてくれなさそうですね。分かりました。依頼の受注、確かに承りました。お気をつけ下さい」

その声は不安に満ち溢れていたが、逝ってらっしゃいっていわれないだけいいか。もうこの作品の中じゃお約束のネタになってくるからな…

「じゃ、逝ってきます！」

お約束なら俺もやらないとな！

「洒落になってませんからヤメテ下さい！」

言われてしまった。そんなに頼りなく見えるだろうか…

へーイと、返事をして出て行く。

「え！？1人で行くんで…」

何か言っていたが聞こえない。

そう言えば今日はあの娘居なかったな…まあ朝早いからな。

さて準備を整えてワーム倒しに行きますか！

待ってるよセレン。良いもんプレゼントしてやっからな！

18 なんか、再戦するみたいです（後書き）

次回予告

潤「さあ、セレンには何をプレゼントしようかな。さつさとワーム倒してセレンの笑顔を取り戻してやるぜ！え？元はと言えばお前が悪い？まあそう言わずに…」

19 なんか、科学的です（前書き）

作者が初登場を果たします。

19 なんか、科学的です

さて問題です。俺は今何処にいるでしょうか？

- 1 山の中
- 2 焼け野原
- 3 ワームの前

正解は…全部で…す！

そうなった経緯は至極簡単。回想をするまでもないね！

山登り ワームを見つけ 焼け野原

ほら、五七五に収まった。え？説明になってない？

そのまんま何だけどな。準備整えて山に登ったら、運良くワームを見つけて、森が邪魔だったから魔法で焼き払った。魔物愛護団体の次は自然愛護団体に怒られそうだけどな。

さて、さっきも言ったが俺の目の前には討伐対象のワームがいる。前回戦ったワームより一回り小さいが、大きいことには変わりがない。それに何か黒い。真っ黒だ。・・・日焼けしたのかな？そんなわけではないか。

「お前に恨みはないが、コッチも仕事なんでね…死んでもらうぞ」悪役になってる？いやいや、人聞きの悪いこと言わないで下さいよ。前も言ったけど俺は善良な一般市民だから。

そんな事を思いながら俺は身体能力強化をかける。

「そろそろ技の名前でも付けるか、いちいち長ったらしいし」

そして既にテンプレになってきてる魔力の黒刀を生成する。

「準備も出来たし、いくぜっ！」

そう言っっていっしゅ…刹那のうちにワームまで間合いを詰める。・

・別に一瞬を刹那と言ったことに深い意味はない。

「ハアアッ！」

と気合いを入れて10太刀くらいワームに浴びせる。しかし、

キキキキンツ！と、金属質な音がして、ワームの身体に傷つけることは出来なかった。

「情報通りだな。山で育ったようなワームは硬い鉱物を食物としていて、身体がダイヤモンドのように硬くなってるらしい」

はて、誰に向けての説明口調だったんだろう。

「ならっ、黒鴉っ！」

またまた説明しよう。黒鴉とは以前のビッグリザード戦の時、刀に魔力を溜めて放った技の名前だ。形状が翼を広げた鴉が敵に突っ込んで行くように見えるから、今名付けた。

ギンツ！というさつきとは違う音が響いた。ワームの表面に刀傷みたいな痕があるところを見るに、少しは効いたようだ。

さて、次は…と考えていると、ヤツは口を開けて俺に岩を吐き出してきた。

（この攻撃はっ！）

何か見覚えのある攻撃方法だ。みんなも気づいただろ？俺を瀕死に追いやった原因となったワームの連続技だ。

飛んでくる岩の配置は俺が右へ逃げるようにそこだけ岩が飛んできて

いなかった。

（同じ攻撃は食らわねえよ！）

と、俺は避けることはせず、

「黒鴉！」

で自分に当たる岩だけを砕き即座に

「貫け天雷！サンダーボイル！続いてっ、切り裂きの風刃！テクノ

ウィンド！」

と、2つの魔法を放った。サンダーボイルは真っ直ぐにワームに向かい、テクノウィンドは対象をサンダーボイルに設定し、雷の弾丸に風の刃を纏わせた。

流石にこれだけの魔法には耐えられなかったが、ワームの身体を貫通する。

・・・ヤツは中也黒い石みたいなので出来ているのか。よし、実験の時間だ。

「狂気に乱舞しな！テクノウィンド！まだまだ！テクノウィンド！テクノウィンド！テクノウィンド！」

詠唱が毎回変わるのは気にしないでほしい！なんせその時に思いついた言葉を言ってるだけなんだから！大事なのはイメージなんです。イメージ。大切な事なので2回言いました。

ああ、俺が何したかなんだけど、ワームの体内をテクノウィンドで粉々にしています。粉々にアンダーライン、ここ重要。

そんな事出来んのかって？さっきワームに穴あけた時の傷痕から掘り進んでるから出来ちゃうんだな。

・・・さて、そろそろかな。

「仕上げのファイヤー！」

と、ワームの体内にファイヤーを唱える。最早詠唱してないって？馬鹿言っちゃいけませんよ。ちゃんと仕上げのって詠唱したじゃないですか。

ドガンッ！！！！！！

という音と共にワームの身体はバラバラになった。

何をしたのかって？じゃあ科学の授業をしてあげましょう。え？そこまで聞きたくない？え、ちょ、お願いですから聞いて下さい。

『炭塵爆発』って知ってる？まあ、粉塵爆発の一種なんだけど、炭の粒が舞い上がっているとところに種火を注ぐと大爆発が起こる現象のこと。比表面積、つまり体積に対する表面積の・・・（長くなりそうなので暫くお待ち下さい）・・・っていう事。みんなも粉塵爆発には気を付けような？

後は何故あのワームの身体が炭で出来ているか気付いたかだけでもヤツの身体が黒かったことが一点。事前に調べた情報にダイヤモンドのように、って書いてあったからな。もしかしたら炭素を多量に含んでいて、炭素の結合が頑丈だったからじゃないか？って思ってるね。そもそも炭素っていう物質は・・・（長くなります。度々申し訳ありません）・・・という訳。

おっと、話し込みすぎて暗くなり始めちゃったな…

って、俺は10時間くらい話し続けてたのか！やべっ、セレンに謝んなきゃいけないのに。

という事で、吹っ飛んでしまったワームの触角を探すのに更に1時間かかって、15秒で下山し、村へと戻った。

潤が下山した後の焼け野原にて、

「はい。あの力は我が国に多大な利益をもたらすかと…はい。では引き続き羽山 潤という異世界人を監視します」

という何者かの無線での通信を知る者は、恐らく私（作者）だけだろう。

19 なんか、科学的です（後書き）

次回予告

潤「よし、セレンにプレゼントする分のお金が稼げたぞ！あとは報告してお金貰って品を買っただけだ！どんな物を贈れば喜ぶだろうか」

20 なんか、不穏な空気が（前書き）

短いです。

勉強が調子良くいったらもう1話投稿するかもしれません。

20 なんか、不穏な空気が

ジーニアスワームの触角を持つてギルドの中にはいると、信じられないというような顔でギルド内に居る者全員が見てきた。

・・・止めてくれよ。そんな目で見られると、興奮しちゃうだろ！え？お前のキャラじゃない？じゃ、やめます。

「はい、ジーニアスワーム、倒して来ましたよ」

そう言つて触角を受付の机の上に置く。

「え！？ほ、本当にあなた1人で倒したんですか！？」

失礼な、とは思わない。初級冒険者が、それもこの村に来てまだ日の浅い新人があんなデカブツを倒せたなんて夢にも思わないだろうからな。

「はい、1人で倒しました。それと…今日は疲れたのでもう帰ろうと思うので報酬の方を…」

帰るというのは嘘だが、この後に買い物をしなければならぬので早いと報酬を貰いたいのは本当だ。

それにしても、自分から報酬の要求なんて、悪いことしてるわけじゃないんだけど気が引けるな…

「す、すみませんでした。これが依頼の報酬、30000ワロになります」

そう言つて、お金の入った袋を俺に渡す。

お金も受け取ったし、早いとこ退散するとしますか。

「ありがとうございます。では、」

そうして俺はそそくさとギルドを後にした。

さて、今俺は露天商の前にいる。本当は宝石店でセレンに何か買おうと思ったのだが、ここを通った時に何か心揺さぶれるものがあった。

「よう兄ちゃん。何かめばしい物はあつたかい？」

と露天商が言う。

何に俺は心揺さぶれたのだろうか…このブレスレットか？違うな。このネックレスか？いや、これも違う。ウーン…

と悩んでいると、ふと宝石の付いていないタイプの指輪が目に残った。あれだな…

「この指輪が気になるんですけど、いくらですか？」

見た目はシンプルなのに安っぽくなく、宝石も付いていないので戦いやすいだろう。

「この指輪は掘り出し物でな、何でも古代の遺跡から発掘されたらしい。魔法も付加されているんだが、生憎魔法の知識はさっぱりでな。良いもんには間違いないって事で15000ワロでどうだ？」

15000ワロか、日本円で15万円か。安くはないが今はワームを倒したお金があるからな。買いだろう。

「分かりました。15000ワロですね。どうぞ」

と言つて袋から15000ワロを出す。

「はいよ。毎度あり！また頼むよ！」

と言われ、指輪を渡された。

さて、帰るかな。

ということで、宿屋の二階、セレンの部屋の前へとやってきた。

今日はセレンを見ていないが、この時間ならギルドで依頼を受けても帰って来てるだろう。

「セレン？潤だけど。セレ

ン？居ないのかな…」

そう思いつつ、何気なくドアノブを捻った。するとドアは開いた。いや、開いてしまったと言うべきか…セレンは用心深くて鍵のかけ忘れなど見たこと無い。そんなセレンが鍵を開けっ放しで中に居ないとなると、

「部屋が荒れてるな…」

別に部屋がきたないとかって意味ではない。誰かと争った形跡が

あるという事だ。何かいやな予感がする。

読者の皆さんには申し訳ないが暫く俺が俺らしくないかもしれないが、嫌わなくてくれよ？

つまりはスーパーシリアスタイムに突入だ。シリアルじゃないぞ？え？分かってる？さいですか。

そこで俺は机の上に紙が置いてあることに気付いた。

「どれどれ？」

《登城願》

手紙での願い出となってしまうことを失礼する。この手紙を読んでいるのは羽山 潤殿とお見受けする。

用件を率直に言おう。貴殿の力にユリナント国国王は大変興味をお持ちになられた。ぜひその力を我が国のために使ってほしいと思われている。

貴殿には1度国王に会って戴きたい。尚、貴殿の連れには先に登城してもらっている。貴殿の賢明な判断を期待する。

らしい。ふざけやがって、セレンは人質ってか？俺は仲間が危険にさらされるのが一番嫌いだっていうのに…国王はよっぽど俺の気分を害したらしいなあ。

ああ、行ってやるさ城に。きつちり落とし前つけるためにも、何故俺のフルネーム、しかも本名を知ってるのか気になるしな。そして何より、セレンを取り戻しに…

そして俺はいつの間にか燃えて灰になった登城願という名の脅迫状をゴミ箱に入れて部屋を出て行った。

20 なんか、不穏な空気が（後書き）

次回予告

潤「ああ、腹立たしいな。国王に対しては勿論だが、それ以上に仲間1人守れやしない俺自身に何より腹が立つ。次回はギャグは一切無いので悪しからず。今の内に1回やつとくか。・・・ふ、布団が吹つとんだ。

・・・悪かったな！寒いオヤジギャグで！」

21 なんか、悪魔らしいです（前書き）

何とか2話目投稿

21 なんか、悪魔らしいです

「ここが王都ユリナントか…」

俺は村の人に王都の方角を教えてもらい、身体能力強化を使って1時間程走って王都に着いた。

石造りの街は、王都だけあってかなり活気があった。

「んでもってあれが城と」

街の中心には一際大きく、豪華な建造物がある。

「早速乗り込みたいところだけど、顔は見られない方が良いな…」
という事で近くの店で翁の能面のような面を買い、早速着けた。
顔が知られているという可能性があるが、念の為というヤツだ。
「さて、行くか」

「ここはユリナント城であるぞ。怪しい面を着けおって、何者だ！」
あの後、俺は城へ向かって今門番に足止めを食らっている。

「俺は羽山 潤だ。話は聞いているだろう？」

「貴様が羽山 潤か。確かにその珍しい黒髪も一致するな。よし、
通れ。城の中に案内がいる」

しまった！黒髪はこっちじゃ珍しいんだった。これじゃ後で染めない駄目だな。

「了解した」

そう言って、俺は城の中へと入っていった。

「あなたが羽山様ですね。それでは謁見の間へと案内させていただきます。それと、王にお会いになるのですから、その面はお外下さい」

「悪いが外せない理由があつてな、外す事は出来ない」
そう案内役の爺さんに言われたが俺は拒否した。髪の毛くらいで

計画を変更するわけにはいかない。

「絶対に失礼をはたらないと誓うというのなら許可しましょう」
爺さんがため息をつきながら言ってきたので、

「分かった」

と返した。

「この先が謁見の間です。くれぐれも王に失礼の無いように」

再度俺に釘を差して、爺さんは扉の奥へと消えていった。

それにしても無駄に豪華な扉だ。この扉を売るだけで何人の人が救われることが…

「こんな事考えてても時間の無駄だな」

そして俺は扉を開けて謁見の間とやらに入ってしまった。

「面を上げよ」

60歳を越えたくらいの外見の王にそう言われて俺は顔を王に向ける。今俺は片膝をつき右手を左胸に当てるといふ相手に敬意を表す格好をしている。形だけだな。

「大臣から話は聞いた。やむを得ない事情があるそうじゃから面を着けての謁見を許そう」

「ありがとうございます」

ホントはこれっぽっちも感謝してないがな

「今日そなたを登城させたのは、他でもない。ワシがそなたの…」

「そんな事よりセレ…連れはどこですか？」

王のお言葉を妨げるなんて！というような声が聞こえるが無視する。

すると王は、よいよいと取り巻きを落ち着かせ、

「そなたの連れは無事じゃ、ほれ」

そう言つて王は兵士に顎で指示した。すると兵士はセレンを連れてきた。首に剣を突き付けながら。その光景は俺の理性を吹き飛ばすには十分過ぎた。

「てめえ、どういっつもりだ？」

「さて、やっと本題じゃ。今日そなたを登城させた理由。それはそなたをこの国のために利用することじゃ。断るとは言わせんぞ。この娘が死ぬことになるからの」

王がとやかく言っている間に俺はセレンとアイコンタクトをする。良かった、面をしていたが通じてるようだ。

んじゃ、俺も行動を起こしますか。

「断る。そんな役立たず、俺の手で殺してやる。闇針っ！」

そう言っただけ俺は技を繰り出す。新技闇針は、俺の魔力を針状にして対象を貫く技だ。今回俺は闇針を2本使い、1本目を俺の手からセレンの腹の直前、2本目をセレンの背中から発動させることによってセレンに貫通させたように見せかけた。

セレンも口の中を歯で切って血を出し、如何にも吐血しましたって感じで倒れた。良い演技だ。

「な！？貴様、気でも狂ったか！？仲間を殺すとは！」

王や謁見の間に居る者全員が驚きを隠せずにいた。

「これで足を引っ張る奴もいなくなった。思いつ切りいくぜ！」

「ク、クソ！お前たち、何をしておる！サッサとこの化け物を殺さんか！」

王がそう指示すると兵士が王を守るように俺の前に立ちほだかった。

そんなに固まってる、

「黒鴉！」

の格好の獲物だぜ？

俺の黒刀から出る黒い魔力の波動が兵士たちの命を残さず刈り取る。

後は王だけだな。

「な！？闇魔術じゃと！？そなた、悪魔か！？」

「何の事やらさっぱりだな。お前に聞きたいことがある」

「な、何じゃ？答えるから命だけはたす…」

「何で俺の本名をしってる？」

これが一番の疑問点だ。セレン以外に俺の本名を知ってる人間は居ない。セレンもそうペラペラとは喋らないだろうしな。

「ウイスニルという旅をしておる呪術師がそう予言したのじゃ」

「そいつは何て言った？」

「羽山 潤という異世界人がこの国に現れ、圧倒的な力を以てこの国を大きく変えるだろう。と言っておった」

「そうか。じゃ、次の質問だ。さっき俺の事を悪魔と言ったな？それはどういうことだ？」

「その魔力の事じゃよ。闇魔術を使える者は悪魔の血を引いている。今はもう世界に数人居るか居ないかじゃがな」

「そうか、分かった」

「じよ、情報を渡したのだから見逃してくれ！」

「そうしても良かったんだがな、お前は俺の仲間を人質にとった。これは俺の中じゃ万死に値する」

「な、何をぬけぬけと！仲間は貴様が殺したのではないか！」

「まだ分からないか。セレン」

そう呼びかけるとセレンが起き上がった。

「何よ。私を置いて依頼に行っちゃった悪魔さん」

・・・大分ご機嫌斜めだ。

「そう拗ねるなよ。ちゃんと助けにも来ただろ？」

「遅いのよ！全く」

そんなやりとりを王は信じられないといった顔で見ている。

「セレン、こいつに何かされたか？」

「私の身体をペタペタと触ってきたわ。殴り返したけど」

セレンの容姿は上の上だからな。

「そいつは良くないな。何かセレンが男に触られたってだけで腹が立ってきた。やっぱり許せないわ。じゃあな」

俺はそう言つて黒刀を王に振り下ろした。

「さて、行くか。セレン？」

俺はセレンが真つ赤な顔で立ち尽くしている。何か言つたわけ？
「私がジユン以外の男に触られるとジユンは腹立たしい？」

う、そこか…何だか俺まで顔が赤くなってきた気がする。

「ま、まあな。さ、サッサと行くぞ」

俺すんげしどもどろ。

いつもと態度が逆転してるな。これは良くない。

「フフッ」

そう言つて小悪魔的な笑みを浮かべるセレン。お前だつてある意味悪魔じゃねえか。

そんな事を思いながら帰路につこうとしている俺たちであった。

21 なんか、悪魔らしいです（後書き）

次回予告

潤「最近セレンがツンデレじゃなくなってきたる…まあ、素直になつてくれるのは嬉しいんだけど。さて、次回は城を出てどっか行きます。そうだ！指輪わたさねえと！」

22 なんか、恐いです（前書き）

スカイツリーは634メートル。
すみません。意味はありません。

22 なんか、恐いです

何か前回いい感じで終わってしまつて、まだ城に居たことをすっかり失念してしまつていた羽山 潤です。あ、そうそう、失念つて108個ある煩惱の1つなんだよ？やつたね。コンプリートまであと107個だ。え？別に興味ない？さいですか。

それにしても、

「今日初めて人を殺しちゃったけど…不思議と平気なもんだな」

「ジュンの世界では、人は死ななかつたの？」

「少なくとも俺の周りではな」

「そう…誰かを守る為だったりする時は人を殺す事も仕方のない事だと思うわ」

「そうだな」

そうは言うものの、あまり慣れない方が良いに決まつてる。気を付けないとな。

「さて、城を出るか」

兵士がゾロゾロと出てこられても面倒だからな。

「出るつて、どうやって出んのよ」

「そりゃ、正面から？」

そう言つとセレンはあからさまに溜め息をついて、

「あんたバカ？そんな血まみれな格好で出してもらえるわけないでしょ」

と返してきた。今俺は王の返り血で服が赤黒くなっている。

じゃあ、どうするかな。魔法使つて壁突き破つて行くか？いや、音で兵士たちが寄つてきそうだしな。

音？うゝん、やってみるか。

「セレン、倒れてる兵士の剣を3本抜いて2を詠唱の間の入口に刺して、1本は護身用にセレンが持つ」といて」

セレンは今戦う手段がないからな。

「分かったけど、何をするつもり？」

「ちよつと科学の実験をな」

後ろで科学？何それ。という声が聞こえるが気にしない。魔法中心のこの世界では、科学なんて栄えてこなかったのだろう。

「まず、氷塊よ！アイス！」

そう詠唱して、剣を刺した場所辺りに氷塊を作る。

「続けて、炎球よ！ファイヤー！」

続けて詠唱し、氷塊を溶かして水にする。

「そして、雷光よ！サンダー！」

最後に剣に向かってサンダーを打つ。何をしようとしてるか分かった人も居ると思うが、今俺は水を電気分解して水素と酸素を作り出した。水素つてのは可燃性で爆発を起こす。酸素も助燃性で火には相性が良いからな。

「仕上げのゝ、燃えちまえ！ファイヤー！」

バーンツと大音響をさせて火に触れた水素が爆発をする。出来るもんだな。

「よし、直ぐに兵士たちが来るだろ。セレン、逃げるぞ」

「な、何で急に爆発したの？」

と、謁見の間の入口を呆然と見ている。ダメだ。完全に惚けてる。

「ちよつと失礼」

そう言つて俺はセレンを片手で抱き上げる。もう片方はまだ役目が残ってるからな。

「ちょ、あんた何してるによよ！」

真つ赤な顔をこちらに向けて言ってきた。

・・・噛んだことはスルーすべきなんだろうか。まあいいや。脱出するんでちよつと大人しくしてくれよ？」

返答を待たずに強化しっぱなしの脚で思いつ切りジャンプする。

そろそろ1階に兵士たちが集まってくる頃だからな。2階は人が少なくなってるハズ。

そう思いつつ、迫ってきた天井を右手に持った黒刀で切り裂き穴をあける。気分は斬鉄剣を持った某怪盗の仲間である。

そのまま2階、3階、4階・・・11階、12階の天井を……って、何階まであんだよ!!

と思っていたら15階の天井で最後だったらしく、屋根に出る。下を見ると兵士が王のもとに集まっている。

前を見ると、この国を一望できるくらいの高さらしく、カラコルの街のどでかいギルドと見える。あ、そうそう、実は俺って・・・高所恐怖症なんだよおお！めっさ恐れ！脚がガクガクするー！

「セ、セ、セ、セレンさん？じ、実は俺、恐所高怖症、じゃねえや、高所恐怖症なんですよよ。ちょっと一旦しばしの間、お、降りて戴いてもよ、よろしいですませんか？」

「あんた、何言ってるか分かんないわよ。いいから早く降りなさいよ」

セレンが言ってくる。わ、わりゆかったな。何言ってるか分かんなくゆて。めちゃくちや噛みまくったが、き、気にしないでくれ。

「い、いや、だからセレンが一旦降りて下さい。お願いします」

そこでセレンは何かに気付いたような顔をした。

「ああ、もしかしてジユン高い所こわ……」

「言わないでえ！お願いだからそれ以上言わないでえ！」

と、恥も外聞もなく叫んだ。（潤の口調がウザいので、ここからは普通の口調に吹き替えさせていただきます）

誰にだって言われたくないことの7つや8つあるんだよ！大分多い？俺はこれでも足りないがな！

まあ、とりあえずセレンが降りてくれた。

「で、どうやって降りる気なの？」

セレンが聞いてくる。

「そりゃ勿論、城での騒ぎが収まって俺たちの事が忘れ去られた頃

に……」

「そんなの何年掛かるか分からないじゃない！」

良いじゃないか別に。せっかちな奴だな。

「じゃあセレンは何か意見ある？」

「そうねえ、こんなのどう？」

そう言っただけでセレンが俺に近づいて来る。

なんだ、その笑みは。ま、まさかお前……

「逝ってらっしゃい」

俺を突き落とすやがった……！しかもこの小説で初の音符をあんなのに使っちゃがった……。後お馴染み過ぎて忘れるところだったけど誤字……！しつけ……よ、そのネタ！

「この悪魔……！！」

と、俺はだんだんと遠ざかるセレンに向かって叫んだ。

悪魔はあんたなんですよ？と、声が聞こえた気がしたが、それは気のせいだったら気のせい。

22 なんか、恐いです（後書き）

次回予告

潤「あああゝ……！！！！落ちてる！俺落ちてるゝ！！次回予告どころじゃないよ！落ちてるよ今！うわうわうわゝ……！！」

23 なんか、何事もありません？（前書き）

何とか2回目の投稿

ちよつと急ぎ足です

23 なんか、何事もありますん？

落ちる。墮ちる。墜ちる。空間的に、また精神的に上にあったものが突然下に位置が変わることを言う。なら上という概念を無くせばいいんじゃないか？俺はそう思う。上を無くせば下も無くなる。みんなハッピーじゃないか。

つまり俺が何を言いたいかというと、

「誰だこんな高い城建てた奴〜！！」

うん。高い建物良くない。高所恐怖症に対するイジメかつ！イジメ、カッコワルイ。

にしても、落下しすぎじゃね？かれこれ20秒位落ちてるぞ！そんなに俺を恐怖のどん底に突き落としたいの！？いや、実際落ちてるけどさ、2通りの意味で…

城の高さが100メートル位だったから…約4.5秒か。随分長い4.5秒だなあ作者さんよ。お前のせいだって事は分かってんだよ！元に戻しやが…うぐ。

作者の野郎、急に戻しやがって…舌嚙んじやつたじゃねえか。

ん？そっぴや俺の脚の下に地面がある。いや、さっきからあったけど、触れてるって意味でな。今回は作者に感謝すべきだな。助かったぜ。全く、毎回こっぴやって助けてくれれば俺だって作者に…

「ジュン！ちゃんと受け止めなさいよ〜！」

ん？何処からか声が聞こえるが…って上か！？

上から誰か…ってあれはセレンか！？もう魔法も間に合わねえ！こっぴやたら…気合いだ！とりあえず邪魔だから面を外そう。今は誰も見てないしな…

4.5秒のフライトを終え、セレンが俺のもとへ飛んでくる。俺の計算が正しければ、セレンは44キロのスピードで落ちてきている。

うん。無理だ。．．いやいや、諦めるな、俺。誰もが1度は憧れるお姫様キヤツチのチャンスだぞ！やってやる、やってやるうじやねえか。

「よっこらせつと！」

結果を言つと、普通に成功しました。

「つてかセレン。お前思つた以上に軽いな」

するとセレンから殺意が…つて何で？俺褒めたよね！？タブーつて重いつて単語だけじゃないの！？

「悪かつたわね。“思つた以上に”軽くて、そんなに重く見えるのかしら？」

見たこともないような素敵な笑顔でこちらを見てくる。ま、魔王だ…悪魔なんてもんじゃねえ、魔王がいらつしやる。

「い、いや、そんなつもりは無かつたんだ。落ちてきたときの衝撃があまりにも軽かつたから…40キロ位しか無いんじゃないか？ハハハハ」

笑つて誤魔化そうとする俺。対して、

「私は…私は38キロよー！！」

涙目になり、今にも泣き出しそうになつてゐるセレン。

つてかセレン。38キロつてどういう事だ？160センチ位身長もあつて、胸だつて一応はあるのに…うゝん、人体の神秘だ。

つて、こんな事考えてゐる場合じゃなかった！

「セ、セレン？お前にプレゼントがあるんだけど」

とりあえず話題変更。指輪もわたせて一石二鳥つてな。

「にやによ」

涙目&上目遣いは反則だつて前にも言つただろ！審判！ちゃんと反則とれよ！

「この前セレンを置いてギルドに行った日さ、実はセレンにプレゼントをしようと思つてたんだ」

「．．．．．」

無言、か。拒否らないつてことは興味があるのかな？

「目、瞑っててくれるか？」

「は、速くしてよね！」

そう言うのとセレンは大人しく目を閉じた。

さて、どの指に指輪をはめるか。セレンは右手に滑り止めの革手袋（指先が出るタイプ）をしているので無理だな。指輪に合いそうな指は…薬指か。テンプレな展開になりそうだが致し方あるまい。

「いいぞ、目を開けて」

セレンは目を開けて自分の左薬指を見て顔を真っ赤に染めた。あの反応は、やっぱりそういう意味があるのか。

「ジュ、ジュン！これ本気？」

？ よくは分からないがここはとりあえず、

「ああ、本気だ。セレン、左薬指に指輪をはめる意味分かってるか？」

自分は如何にも知ってます。って感じでセレンに聞く。

「『あなた以外の女性には興味がありません。もし私が他の女性を一瞬でも見たならあなたは私を罰して下さい』って意味よね？」

重おおおいつ！！俺が思った100倍は重いわ！この世界はどれだけ浮気が嫌いなんだよ！

「え？あ、いや…俺の世界では、『あなたとずっと一緒に居たいです』みたいな意味なんだが」

するとセレンは湯気が出そうなほど更に顔を赤くして、

「ずっと一緒について…ば、ばかっ！何言ってるのよ！」

と言つて先に歩いていつてしまった。

村に帰るまで左手をチラチラと見ていたので、一応気に入ってくれたんだろうか…

「そういえば、結局あの指輪に掛かっている魔法は何だったんだろう？」

そんなことを考えながら俺は帰路についた。

23 なんか、何事もありますん？（後書き）

次回予告

潤「いいんじゃないか？偶には平和な回があっても。俺が落下して
るシーンは命懸けだったがな…え？そうでもない？まあ、作者がな
んかしたからな。さて、次回はとりあえず村に戻るぜ！ま、直ぐに
俺たちはお尋ね者になるだろうけどな」

24 なんか、国を出ます（計画編）（前書き）

なんとか1話投稿
遅くなりました

24 なんか、国を出ます（計画編）

って事で、帰ってきましたキルファ村。といつてもすぐに出るつもりだけだね。

「セレン、分かっているとは思うが俺たちはもうこの村、いや、この国を出るからな。準備とかは早いとこしといてね」

「分かった。出発は何時なの？」

「そうだな。早い方が良いけど、お互い準備があるからな…明日の朝10時に村入り口でどう？」

ちなみに今は夜の10時頃だ。セレンを助けに行つたのも6時頃だったからな。

「分かったわ。それまでは自由行動って事でいいの？」

「ああ。そのつもりだ」

俺も調べたい事があるからな…

じゃまた明日。と、俺とセレンは別れた。

さて、まずはギルドに行くか。

「すみませ〜ん」

俺はギルドで受付のお姉さんと呼ぶ。

「はい、どうしました？」

奥からお姉さんが出て来た。俺がギルドに来た理由、それは

「あの〜、この前カリーに付き纏われてた女の子ですけど…」

「ああ、あなたがナンパしてたあの方ですね？」

あの方？随分丁寧だな。

「ナンパじゃないけど…今あの娘何処にいるか知ってます？」

「あの方は今朝、どこかに旅に出ると仰っていました」

あれ？仲間になるフラグじゃなかったの？まあ、いいや。それにしても、

「さつきからあの方って言ってますけど、偉い人なんですか？」

「え！？あの方を知らないんですか！？まあ、ならナンパしてたのも頷けるか……」

だから誰なんだよ。

「で、誰なんです？」

俺がそう急かすと、

「あの方はウイスニル様です。呪術師であり、プロミネントギルダ―でもある、未来視のウイスニルです」

こんな所で意外な名前が出たな。王を唆した奴か。あれは仲間フラグじゃなく、何か別のフラグだったのか。何かガツクリだな。

って、あの娘プロミネントギルダ―だったのかよ！俺がジーニアスワーム倒さなくても良かったじゃん！

「へへ、有名人だったんだな」

と言って俺は受付から離れた。

俺はあの後、今後の安全の為にプロミネントギルダ―について調べる事にした。敵対したときは逃げなきゃならないからな……

「プロミネントギルダ―、プロミネントギルダ―っと」

そう思い、俺はギルドの資料を物色しだした。

「おっ、あったあった。これだな」

《最新版 プロミネントギルダ―》

プロミネントギルダ―とは数いるギルダ―の中でも、その名の通り突出した実力を持つ10人のギルダ―を指す。プロミネントギルダ―はいずれも国に所属しているが、国内を旅しているため所在地不明。現在のプロミネントギルダ―は、

- | | | | |
|------|-------|-------|-----|
| ・最聖賢 | アレス | ・守砦壁 | ヘクト |
| ・未来視 | ウイスニル | ・悪魔殺し | テナ |
| ・時操師 | クラン | ・大気使い | シニフ |
| ・瞬息剣 | シリチナ | ・魔天剣 | クラウ |

・邪神王 サナトス ・獣懷狼 ノルティ
の10人で構成されている。

ここまで読んで感想を1つ…厨二かつ！何で二つ名が付いてんだよ！

「俺は悪魔殺しって奴だけは会っちゃだめだな」

俺悪魔らしいし。出来れば邪神王なんてヤバそうな奴にも会いたくない。ってかプロミネントギルダーには誰にも会いたくない。あれ？これフラグ立っちゃった？

「まあ、プロミネントギルダーについてはこんなもんでいいだろ」

ギルドを出た俺は不意に立ち止まり、

（おい、KY女神、久しぶりの出番だぞ〜）

（まったくだよ！11話ぶりの登場のヒロインなんて普通じゃないよ！）

11話ぶりの登場か…

・・・もういらなくなか？作者に頼んで今度消して…

（そこっ！！不穏な事考えない！！）

見透かされてたか。ってか、

（KY女神、お前はヒロインだったのか！？）

（何で今知りましたみたいな顔してんのよ！最初に出会った女の子じゃない！）

（いや、それだけでヒロインにはなれないと思うぞ？ってか読者の皆さんもヒロインはセレンだけだと思ってるだろうし）

（フッフ、そうか、あの娘が全部いけないんだね。あの娘さえいなければ、あの娘さえいなければ…）

（今更ヤンデレは無理があるぞ〜）

（やだやだ〜！ヒロインがいい、ヒロインがいい！）

（駄々をこねるな！お前女神とか名乗ってるけどただの中学生だ

る！）

（（ううん。今年で6753歳だよ？））

（（だいぶいつてる！！その割に精神年齢低っ！！））

（（失礼ね、人間に換算するとまだ15歳だよ））

（（余裕で1万歳を超える予感っ！！って、こんな話話すために呼んだんじゃないだよ。俺たちはこの国を出ようと思うんだけど、どの国がいいと思う？））

（（あのセレンって娘と相談すればいいじゃない））

（（セレンはこの国から出たこと無さそうだったからな））

（（うゝん、私個人としてはレーテルンへ行っってほしいところだけど、運命の女神はハリンテへ行けっって言ってる））

（（どんな国なんだ？））

（（レーテルンは冥府の国って呼ばれてて、アンデットたちが…））

（（よし、ハリンテへ行こう））

（（まだ最後まで言ってないのに）。ハリンテは大らかな国柄からか人種差別が無く、獣人たちも多く住んでる良い所だよ？それでもいいの？））

（（いいよ！むしろ大歓迎だよ！））

（（面白いと思うんだけどな、レーテルン。・・・あつ、仕事入っちゃったから今回はこれで））

（（おう。俺も聞きたいことは聞いたからな））

（（んじゃ、また呼んでね））

そう言っであっちから切ってしまった。さて、つぎは何時になることやら。

「よし、行き先は決まったな。じゃ、旅の準備するか」

といった感じで食料や装備を整え、明日に備えて寝る事にした。

24 なんか、国を出ます（計画編）（後書き）

次回予告

潤「新しい国か…どんな所かワクワクするな！前は俺が待ち合わせに遅く来たから、次は俺が先に行くようにしないとな」

25 なんか、国を出ます（出発編）（前書き）

期末テストが山場だったもので…更新遅れて申し訳ありません。

25 なんか、国を出ます（出発編）

「さて、そろそろ行くか。待ち合わせは村入り口だったよな」

今は午前9時過ぎ。村入り口までは5分掛からない。ちよつと早
い気がしないでもないが、俺は前遅れたからな。

そう思いつつ俺は村入り口へと歩いていった。

「セ、セレンっ！？何でいんの！？」

そこには例の黒いローブにフードを被ったセレンが居た。現在9
時10分。どういう事？

「あんたが此処に集合って言ったから居るに決まってんでしょ？何
わけ分かんないこと言ってるの？」

「いや、そうじゃなくて…もしかして待った？」

「いいえ、5分前に来たばかりよ」

良かった。どうやらそれ程待たせていないらしい。

「そうか、待たせて悪かったな」

「い、いいのよ別に、まだ集合時間まで50分もあるから」

と言って顔を赤らめるセレン。何故赤らめる？ま、いいや。

「えーっと、今回の旅はこの国を出ようと思うってのは前に言った
よな？」

「ええ、聞いたわ」

「そこで目的地の国だけど、ハリンテへ行こうと思うけど何か意見
ある？」

「いいえ、人種差別がないような国だしこの国よりも過ごしやすい
と思うわ」

セレンはフードから出ている前髪を弄りながら言った。あ、髪染
めなきや。

「じゃ、問題も無いようだし、出発しますか」

「出発って、ハリンテが何処にあるか分かってんの？」

「……ちょっと待ってて」

（おいKY女神、2話連続で出番だぞ）

（（出番？いよいよ私もヒロイン入りが認められたかな））

（（そんな事、何で人が生きてるのか考える位どうでもいい。ハリンテはどっちにある？））

（（とても突っ込みづらい！重要な？どうでもいいの？））

（（どうでもいい））

（（あっさり切り捨てられた！））

（（つてか早く教えるよ、セレンが待つてるだろうが））

（（何で不機嫌！？原因あなただよ！？ま、いいや。ハリンテはキルファ村から西へ馬車で10日行った所に国境があるよ））

（（そうか、分かった。次に出番があるか分からないけど、じゃあな））

（（嫌な終わり方っ！絶対出るからね））

「西へ馬車で10日行った所だつて」

「だつてつて、あんた誰にも聞いて無いじゃない」

「やべっ、なんて言い訳しよう。」

「……ちよつと脳内会議してた」

「その間は何なのか知りたいけど……まあ、いいわ。じゃカラコルの街に行きましょう」

「セレンと会ったあの街か。つて、

「キルファには無いのか？」

「キルファにあつたらカラコルから歩いてこないわよ」

「ごもつとも。」

「んじゃ、カラコルに戻りますか」

カラコルまでの道のりではこれといった事も無く着いた。強いて

言うなら、巨大なもやしと戦ったり隠された遺跡見つけたり…え？
詳しく話せて？いやいや、大したことじゃないから。

「さて、カラコルに着いたわけだが、馬車は何処で乗れるんだ？」

前回来たときはギルドと図書館、武器屋しか行かなかったからな
あ、武器屋で買ったロッド、キルファの宿屋に忘れてきた！まあ今
は黒剣が使えるからいいんだけど…

「馬車は街の北側にある馬車小屋で乗れるわ」

今俺たちは街の南門って所にいるから正反対だな、めんどくさ。
「そっぴやセレン、プロミネントギルダって知ってる？」

街の中を歩きながら何となく聞いてみる。

「当たり前でしょ。この世界に居て知らない人はいないわよ。1人
1人が一国の軍隊より強大な力を持っているらしいわ」

あのウイスニルって娘もそんなに強いのか？ソロで行動するのも
頷けるな。

「そりゃ恐ろしい、出会いたくも無いな」

「一部のプロミネントギルダーを除いて、国の召集がかかって戦争
をする時以外は人とは戦わないらしいから大丈夫よ」

一部は好戦的なのか？出会ったら人生終了のお知らせだな。

「誰がどの国に属してるかって分かるの？」

出来れば悪魔殺しがハリンテに居ないことを祈る。割とマジで。

「この世界には5つの国があって、中央国家ユリナントには未来視、
冥府レーテルンには邪神王と魔天剣、商業国家マナトには最聖賢と
大気使い、バーラン共和国には守壁と時操師、そして自由国家ハ
リンテには悪魔殺しと瞬息剣と獣懷狼が所属しているわ」

はい。気まぐれセカンドライフ、バッドエンド決定です。ってか
俺が悪魔殺しに殺されてデッドエンドです。

「セレン、今までありがとう」

「何バカなこと言ってるの？プロミネントギルダーなんてそうそう
会わないから大丈夫よ。私だってまだ会ったこと無いわ」

じゃあ神にでも祈つときますか。あ、KY女神にじゃないからそこ勘違いしないように。

「ところで、さっきからこの格好で普通に街中歩いてるけど、俺たちって指名手配とかされてないのかな？」

別に兵士を呼ばれたりもしないしな。

「多分それはこの国の政府が国民に支持されていなかったからだと思っわ」

「なるほど、反乱でも起こされちゃたまらないって事か」

「そういうこと・・・着いたわよ。その家の中で受付を済まして、馬車に乗れるわ」

セレンが指差した先には馬車小屋とは言えないくらい大きく、立派な家があった。

「じゃ、受付を済ましてきますか」

と言って俺たちは馬車小屋に入ってしまった。

「あの、ハリンテまで行きたいんですけど・・・」

俺は受付のおじさんに声をかけた。

「受付はあっちだ小僧」

と言って奥のお爺さんを指差した。この人受付じゃなかったのね……ってか間違いのくだりいらなくね？作者さんよお。どうせ同じ事言っただから。

「あの、ハリンテまで行きたいんですけど・・・」

ほら、一言違わず変わんねえよ。

「ハリンテのどこじゃ？」

それは考えてなかった。

「とりあえず国の中心の街で」

とりあえずって……というセレンの声が聞こえるがスルー。

「ハリンガルでいいののかの？」

「はい。そこをお願いします」

合ってんのか間違ってるのか知らんがな。

「それなら1人3000ワロじゃ」

2人なんで、と言って6000ワロを渡す。だいぶ高いな…

「確かに受け取った。2番馬車があと15分で出るからそれに乗りなさい」

分かりました、と俺たちは言つて、早速2番馬車に乗り込んだ。

15分後、馬車が出る時間になり、俺たちの乗った馬車は出発した。それから…え？もう終わりの時間？分かったよ。じゃ、続きはまたの時間にな。

25 なんか、国を出ます（出発編）（後書き）

次回予告

潤「今回は馬車に乗ってハリンガルに向かうぜ！盗賊に襲われたりしないか今からガクガクブルブルだ。それと作者、あんまし読者の皆さんを待たせんじゃねえぞ？」

26 なんか、出会っちゃいました（前書き）

久しぶりの2話投稿（予定）

26 なんか、出会っちゃいました

・・・え？もう始まってんの？早く言ってくれよ作者ア、気付かなかつたじゃん。

さてさて、現在俺たちは馬車に乗って移動中です。因みに既に旅は6日目に突入。前回出発したばかりじゃないかって？そりや昨日までの5日間は何もなかったから作者がカットしたんじゃない？ひたすら街道を走り続けてて魔物に襲われる事も無かつたし…

だが俺は1つ言ってやりたい。今日何かが起こると。じゃなきゃ今日もカットされてるはずだもんな。

どうせそのうち御者が盗賊だゝなんて言っ…

「盗賊だゝ！盗賊が来たぞ！」
ほらな。

外を見てみると、俺たちの馬車の周りを取り囲むように、馬に乗った連中10人ばかりが迫ってきた。

「盗賊を追い払う手段みたいなのってあるんですか？」

俺は窓を開けて外で馬を操っている御者に聞いた。

「い、いや、ない。普段ここは治安が良くて魔物や盗賊の類が出ない街道だからな」

んじゃ、やるしかないのか…俺としてもサッサとハリンガルに到着したいからなゝ

「そうですね。俺とそこにいるセレンって女の子は冒険者なんで、戦いますよ。ただ、危険ですので馬車の荷台に入って、窓から外を見ないようにして下さい」

実際の所は俺の悪魔の力とやらを見られたくないからなんだけだな…

「あれだけの人数を2人で大丈夫かい？」

そこには心配というより、下手に怒らせてこちらに被害が及んで

も困るといった表情があつた。

「はい、ご心配無く。さ、早く荷台に入って下さい」

苦笑いを浮かべて返す俺。そんなに頼りなく見えるかな…

「分かった。頼むよ」

そう言うのと、しぶしぶといった感じで御者は馬を止め、荷台へと入って来た。それと入れ替わりで俺たちは荷台から出て屋根の上に立った。

「さて、セレン、準備はいいか？」

「いつでも大丈夫よ」

そう言いセレンは剣（城で奪ったヤツ）を構えた。

「じゃとりあえず、俺は右の5人を倒すからセレンは左の5人を」
「分かったわ」

そう言いセレンは屋根から飛び降り、左の敵へと走り出した。

「じゃ、やりますか」

とりあえず身体能力強化をかけて、黒刀を創り出す。

「んじゃ、黒鴉っ！」

俺は目の前に迫ってきた盗賊3人を殺さない程度の魔力で薙払った。

「続いて、闇針っ！」

俺の黒い魔力を見て呆然としている盗賊の1人の四肢を闇針で貫いて無力化する。あと1人か…

今俺の前には盗賊の頭と思われる2メートルを超えようかというゴツいおっさんが斧を肩に担いでいる。

この雰囲気、出来る！

・・・言ってみたかっただけなんでお気になさらず。

「俺の仲間を倒すたア、なかなか強いみたいだなア」

あ、意外に声が幼い。

「なら素直に退いてくれないか？」

「そいつは無理なお願いだ。このままじゃ俺等のメンツが保てねえ」
でしょうね。斧担いでやる気満々だもん。

セレンは・・・まだあつちで戦ってるか…援護は期待できないな。
「何ボ…ッとしてやがんだアアア!!」

盗賊の頭は隙を見せた俺に向かって斧を振り下ろした。

「危ねッ!」

と、ギリギリでかわす俺。攻撃が速い!

「おらぁ、まだまだ!」

いずれも急所を狙って連続で振り下ろしてくる。

なんつゝ速さだ。身体能力強化した身体で避けるのが精一杯だ…

「避けてばっかじゃ俺に当たんねえぞ!」

「分かつ、てる!」

チクシヨウ、反撃しようにも隙が…

「終わりだアア!!」

盗賊の頭が頭上から斧を振り下ろす。ヤバッ!これは避けらんねえ!

「爆散っ!」

どこからか声がして俺と盗賊の頭は吹っ飛んだ。た、助かった。
にしても誰が…

声のした方を見ると、騎士の鎧に身を包んだ人間がいた。声
からして多分男だろう。

「間に合ったか…その少年、手荒な真似をして済まなかった」

騎士は俺に向かってそう言った。どうやら俺の敵ではないようだ
な…

「てめえ、なにもんだ!」

盗賊の頭が騎士に言い放った。

「ハリンテ国宮廷騎士団長といえは分かるかな?」

「ハリンテだど!?てめえ、追っ手か!」

「そういうことだ。大人しく投降してくればこちらとしても助か

るのだが」

「ふ、ふざけるなアア!!」

顔を怒りで赤くして宮廷騎士団長さんとやらに突っ込んでいく。
「つてか俺蚊帳の外って感じだな…主人公なのに。」

「聞いてはくれないか…」

そう言つと、宮廷騎士団長は腰に差した剣を抜いた。

「ウオオオオオツ!!」

盗賊の頭が間合いに入つた宮廷騎士団長を斬り殺さんと、大上段から振り下ろす。

「安心しろ、殺す程オレは下手ではない」

何のこと?と俺が思った瞬間、盗賊の頭がズタズタに切り裂かれて吹き飛んだ。

俺には剣を振つたようには見えなかったな…どういう事だ?

「ジュン!大丈夫?」

セレンの方も戦闘が終わつたようで、俺に駆け寄ってきた。

「あ、ああ、危なかったがその宮廷騎士団長さんに助けてもらった」

未だに何したのか分からないが…

「君たち、盗賊団の逮捕に協力してくれてありがとう」

宮廷騎士団長が俺たちに礼を言ってきた。

「いえ、ハリンテに行く途中に襲われただけなんでお気になさらず」

「おお、君たちはハリンテに行くのか!オレはハリンテの宮廷騎士団長でギルダーでもあるシリチナっていうんだ。この先に馬を停めてあるんだが、よければ国まで一緒に行かないかい?」

シリチナ?どつかで聞いた名前だな…うん、思い出せん。セレンは…何か固まつてるし…

「あ、はい。是非お願いします」

これから行く国の宮廷騎士団長様の顔に泥を塗るわけにはいかな
いからな。

「そうか、来てくれるか！では行くでしょう！」

そう言って宮廷騎士団長は歩いていった。俺たちも乗ってきた馬車に断りを入れて、宮廷騎士団長について行った。

それにしても、シリチナ、シリチナ…

だいぶ復活したセレンに聞くか。

「セレン、シリチナって名前に聞き覚えない？」

するとセレンは、信じられない！という顔をして、

「兜をして顔が分からないけど、ギルダーでシリチナっていえば、プロミネントギルダーの1人、瞬息剣のシリチナでしょ！」

・・・ハハッ冗談きついで！プロミネントギルダーなんてそうそう会わないってセレン言ってたじゃん。こりゃ悪魔殺しと出会った日も遠くないな。ハハハハハッ……………はあ。

とりあえずハリンテに逝きますか…

いつもの3000分の1のテンションで歩いていく俺がそこにはいた。

26 なんか、出会っちゃいました（後書き）

次回予告

潤「次回？とりあえずハリンテ着いて城に行くんだろ？な。今から憂鬱でたまらないぜ」

27 なんか、女王居ますけど…（前書き）

予告通り2話目投稿

27 なんか、女王居ますけど…

憂鬱、それは精神的な苦勞により気持ちさがちになる事。

それが今の俺の状態である。決して城での食事は豪華なんだろうな、なんて思っではいない、断じて。

「オムライスがいいな…」

断じて食事の事は考えていない。大切な事なので2回言いました。

「何か言っただ？」

おっと、口に出していたのか。

「いや、特に何も？」

「そう、ならいいわ」

ふ、何とかやり過ごせた。

「ときにジュン君、もうすぐハリンテの中央に位置するハリンガルに着くわけだが、ハリンガルにつく前に聞いておきたい事はあるかい？」

盗賊に襲われてから4日経った今日12時50分、シリチナが聞いてきた。間3日間についてはスルーの方向で。

ってかいつの間にかハリンテ国には入ってたんだね…

「そうですね：ハリンテはどういった国ですか？」

「ハリンテは王女、いや、女王が国を治めていてね、セレン君のような異端者と呼ばれるような人でも受け入れるような国さ。悪魔の血を継ぐ者には会ったことはないけどね」

そう言っってチラッと俺を見る。

「あ、悪魔だからって殺されたりしませんよね」

ここでハイと言ってくれなかったらレーテルンに行こう。背に腹は代えられん。

「それは女王次第だね」

と、シリチナは意地の悪い笑みを浮かべていそうな声（兜してる

からよく分からない」で言った。うわゝ、行きたくねえ。

「ではこちらからも質問だ。君たちはハリンテに留まる気かい？」

「はい、一応は…」

ユリナント国みたいながあつたら出て行くつもりだけだな。

「ならギルドで移籍届を出すと良い。それでギルドも国籍もハリンテに出来るからね」

なんで俺たちがギルドに加入してるって知ってたんだ？まあ、いいか。

「ご親切にどうも」

「さて、ハリンガルに着いたぞ」

今俺たちの前には10メートル近い門が聳え立っている。

「大きな門だなあ…」

思わず溜め息が出るな。

「このあたりには魔物もいるからね。防御を厚くして損はないさ。

さあ、入ろう、オレと一緒に顔パスで通れるはずだからな」

ハッハッハと笑いながら歩を進めるシリチナ。しかし

「シリチナ様、後ろの奴は誰ですか？怪しい奴を王都に入れるわけにはいきません」

と、見事に顔パスで通れなかった。俺たちの事を言われてるにも関わらず、つい笑いが…

その後、シリチナが10分くらい説明をして、やっと通してもらった。

「ほお、これが王都ハリンガルか」

ユリナント城のあつた都市もかなり活気があつたが、こっちはそれと比較にならない程大きく、活気があつた。

「ボクっとしてると置いていくわよ」

とセレンに言われてやっと我に返った。

それにしてもホントに色んな人種がいるな。猫耳付けた獣人に何か骸骨みたいな人に耳の尖ったエルフみたいな人までいる。俺たちみたいな人間でも、ユリナントじゃ見ることのなかった髪の色の人がいる。

「着いたぞ、ここがハリンテ城だ」

あっちこっちを見ている間に城に着いたらしい。やっぱり城もでつかいな。ユリナント城の2倍位ある。この国はかなり潤ってるようだな。

同じ失敗はしたくないのか、シリチナは門番に話をつけている。

「セレンはハリンテに来たことはある？」

「いえ、無いわよ？どうして？」

「なんで初めて来たのにあんまり驚かないのかなって思って」

「驚いてはいるわ。ただ1度テレビで見たことがあったからそこまで驚かないのわ」

テレビイイッ！！！！久しぶりに異世界の気分壊されたアア！！！！

「そつえばジュンって携帯持つてないわよね。買わないの？」

携帯イイッ！！！！！！わずか10秒の間に2回も夢壊されたアア！！便利だけでも！確かに便利だけでもっ！

「何泣いてんのよ、変なジュンね。ほら、許可降りたようだし行くわよ」

セレンに引っぱられて俺は城へと入っていった。

「シリチナの話は分かった。じゃが何故ジュンとやらは泣いておるのじゃ？」

ひつく、俺たちは今謁見の間で女王と向かい合ってる。

女王は肩書きにもその口調にも似合わず、年の頃は15といったところか…ひつく、髪は白髪で瞳は赤く、八重歯が特徴の可愛らしい娘、いやお方だ。

「どうぞお気になさらずに、陛下」

うう、セレンが冷たい…

「そうか、なら自己紹介といこう。妾はハリンテ国女王、テナ・セリナーデ・ハリンテじゃ。冒険者時代には悪魔殺しと呼ばれておった。そなたらは…」

「うわあああん！もうだめだ、終わりだ！うわあああん」

「な、なんじゃこやつは、妾の名を聞いたとたん更に泣きおった！プロミネントギルダって何人居んだよ！なんで会う人のほとんどがプロミネントギルダなんだよ！絶対3人1人はプロミネントギルダ混じってるよ！運命の女神は俺の事嫌いだよ！

（いや、運命の女神はあなたの事気に入ってるよ？）

（いきなり出てくんないKY女神。ビックリするだろ）

（ごめんごめん。でも本当に運命の女神はあなたがお気に入りなんだよ？）

（いつそのこと嫌いになってくれ）

（そんな事言ってる。ほら、運命の女神が涙目になってるよ？）

（だああ、もう！俺が悪かった。俺は運命の女神の事好きだから、泣き止んでくれ）

（じゃあ付き合おう、だって）

（極端っ！！運命の女神酷く極端っ！！）

（冗談だってさ）

（安心した。じゃあなKY女神、女王様がお待ちだ）

（あ、最後に運命の女神が今度遊びに行くってさ。じゃね）

（あ、ちょ、）

切れちゃった…遊びに来るってどういう事？

「……………だからジュンは陛下を見て泣いたのです。どうぞご無

礼をお許し下さい」

セレンが頭を下げて謝っている。脳内会議をしている間に話が進んでいたっばいな。

「そうか。安心せいジュンとやら。妾はそなたを殺す気はない」

「あ、ありがとうございます！」

そう言っただけは思わず女王の手を握る。

「な、な、何するのじゃ！」

そう言っただけ顔を真っ赤にして俯いてしまった。やべえ、失礼だったか？

「すみません、つい」

「よ、よい。コホン。さて本題じゃ、ジュン、セレン、お主等この国で、いやこの城で働く気はないかの？」

え？働く？何それ。どういう事？

働く働く働く…っで、ええ！？

「「こ、この城ですか？」」

おおー！思わずセレンとセリフが被っちゃった。

「そうだと言っただであらう。2人共変な反応じゃの」

俺とセレンは顔を見合わせ、とりあえず

「考えさせて下さい」

と、言っておいた。

「そうか、なら明日に返答してくれ。今夜はこの城に泊まると良い。夕食も一緒に食そうではないか」

という女王からの申し出に

「はい、お願いします」

としか答えられない俺であった…

さて、今日は家族（？）会議だな。

27 なんか、女王居ますけど…（後書き）

次回予告

潤「今回はセレンと家族（？）会議をして、夕食食べて・・・と、とても忙しい回になりそうだ」。まあ頑張りますか」

28 なんか、お食事みたいです（前書き）

テストが終わりました

28 なんか、お食事みたいです

俺たちは謁見の後、夕食の時間になるまで休むようにと部屋に案内された。・・・もちろん部屋は別々だからな。

一通り荷解きが終わり、一息吐いた頃、セレンの方も終わったのか俺の部屋にやってきた。

「何で来たかは分かってるわよね？」

「ああ。じゃ、始めますか」

そこで俺はコホンと咳払いを1つして、

「第1回、国に仕えちゃおうかどうか、緊急家族(?)会議
」!

「な、何であんたなんかと家族じゃなきゃいけないわけ!? まったく」

セレンは顔を真っ赤に染める。

おおー! 久しぶりのツンデレ。 てつきりもうデレてんのかと思っ
てた。

「だからちゃんと」(?) “を付けただろ?”

これほど分かり易く表示したのに…

「括弧書きは口に出してないでしょ!!!・・・ちよっと嬉しくなっ
ちやっただじゃない…」

最後の方に何か言ったようだが小さすぎてよく聞こえなかった。

・・・なんていうラノベの主人公みたいなこと俺がすると思っ
たか? ふつ、甘い読書の皆さんよ。 バツチリ聞いてたぜ!

まあ、聞いてたからってどうって事はないんだけど…

「はいはい、悪かったね。 じゃ本題だ。 正直セレンはどっちの方が
良いと思う?」

「そうね…その仕事内容がどんなのかにもよると思う。 メリットは
確かに多いけど、デメリットの方が大きいんじゃないわ」

「そりゃごもつともだ。つて事だ、部屋の前に居る誰かさん。少なくとも夕食が終わってからじゃないと結論はだせねえや」

俺がそう言くと、扉が開いて1人のメイド服の女性が部屋に入ってきた。

「盗み聞きというご無礼、どうぞお許し下さい。わたくしはこの城でメイドをしております者です」

姿を現したメイドさんは躑躅^{ツツジ}色の髪で表情はほとんど見られない美人だった。テンプレだな。

年の頃は……俺より少し高いか同じかってくらいか？表情が薄いと年齢って分からないもんだな。

「……全然気配を感じなかったわ。あなた何者？」

セレンが尋ねる。確かに俺も見逃すほど気配が分かりづらかったからな……ただのメイドさんじゃないだろう。

「ハリンテ城に仕えるただのメイドと言ったはずですが。それとジョン様、女性の年齢を探るのはあまり感心できませんよ？」

「ハハハハハ、すみません」

どういう事だ？確かに声には出していなかったはず。それにこの人とは思えない雰囲気……

「それ以上は詮索しない方がよろしいかと」

その言葉を聞いた途端、俺は鳥肌が立ち、戦ってもいないのに死がイメージされた。これが殺気なのか？とにかくこの人は絶対に敵に回しちゃダメだ。

「は、はい……分かりました」

この雰囲気はセレンには向けられていないのか、

「ち、ちよっと、2人してどうしたのよ。会話も成り立ってないし」と言っていた。

「お気になさらず、ちよっとした話し合いですので」「そう言つと微かに表情を和らげた。

「で？何をしに来たんです？まさか盗み聞きしに来たってわけじゃないですよね？」

これ以上この話題を引つ張ると俺に危険が及びそうだから話題をエンジで。

「そうでした。ジュン様と下らない話話をしている場合ではありませんでした。夕食の準備が出来ましたので、どうぞお2人とも広間へお越しください」

下らないって…まあいいけど。

「分かりました。といっても私たちは広間の場所が分からないので案内していただけますか？」

セレン、お前敬語使えたのか！

「承りました。では早速行ってもよろしいでしょうか？」

セレンと俺は顔を見合わせ、

「お願いします」

と言った。

広間には既に女王が居た。

「遅かったの、さあ席に着くが良い」

「すみませんでした。じゃ、失礼して」

と、俺たちは席に着いた。

「では、いただくとするかの」

そう女王が言うと、料理が運ばれてきた。前菜に始まり、スープ、肉料理と続いてきた。

・・・気まずい。ってか空気が重い…

「そう堅くならんでよい。食事は楽しむものじゃぞ」

とは言ってもね

「じゃあ…」

と俺は神妙な顔をした。

「うむ。何でも聞くとよい」

と女王。

「何歳で…」

「ジユン様、先程言ったことをお忘れでしょうか？」

メイドさんが俺に無表情で言ってくる。やべっ、めっちゃ怖い。

「よい。歳くらいいくらでも教えてやるわ。16じゃぞ？して、何故歳を聞く？」

なんとなく、なんて言ったらまたメイドさん怒るだろうな。

「いや、女王って名前の割には若く見えるな〜って思ったので」

「うむ、先代女王、つまり妾の母上がの…」

おっと、まずいこと聞いちゃったか？

「母上が面倒くさいと言って旅に出て行ってしまったの。昨年から妾が女王になったのじゃ」

ひどく個人的な理由だったあああ！

「ハハハ…そうでしたか。ではどうしてそんな言葉遣いを？」

続けて俺は質問した。だって気になるじゃん！

「これかの？これは妾に言葉を教えたのがお婆様での、つい移ってしまった。大臣たちも対外交渉をする時になめられなくていいだろうという事で、直されもしなかったからの」

「へ〜、そうだったんですか」

てつきりキャラを立てる為かと…

「ジユン様？」

メイドさんが圧力を…ごめんなさい。

「じ、じゃあ最後に、許婚とかって居るんですか？」

なんかセレンがこっちを睨んでるが気にしない。これは今後この女王がどのポジションにつくか考えるのに必要な事だからな。下心は4割くらいしかない！

「ほう、直球じゃな。許婚は居らんぞ？ジユンがなるかの？」

そう言つと女王はククククと笑いを漏らした。

ここは俺も冗談で返すべきだろうか？

「じゃあ立候補させていただきますでしょうか？」

と笑いながら返しといた。セレンは俺が冗談で言っていると伝わったのか、特に怒らなかつた。

「ふ、益々面白い。今夜妾の部屋に来るとよい」

「・・・・・・・・え？どゆこと？みんなも顔を赤くして俯いてしまった。え？そゆこと？

「・・・・・・・・勘違いしておるようじゃから言っておくが、ただ話がしたいだけじゃぞ？」

ほつ。女王のその言葉を聞くやいなやみんな胸をなで下ろした。

その後は堅い感じもなく、みんな（メイドさんを除く）で談笑しながら食事を終えた。

「おっと、ジュン様、今回はここまでのようです」

「ん？あ、ああそうみたいですな」

何で小説の事情を知ってた？まあいい、じゃ、メイドさんの言ったとおり今回はここまで。

28 なんか、お食事みたいです（後書き）

次回予告

潤「さて、読者の皆さんは分かっていると思うけど、次回は女王の部屋でお話だ。果たして女王は何を聞きたいんだか……」

29 なんか、決めたみたいです（前書き）

冬休みっ！冬休みっ！テストも終わって冬休みっ！

29 なんか、決めたみたいです

さて、女王の部屋に行くんだっけか？

夕食も終えて自分の部屋に戻って一息吐いた頃、俺は女王との約束を思い出した。

「……女王の部屋ってどこだ？」

ちゃんと聞いとくんだった……まあ、廊下に出れば誰か居るでしょ。

「おお、ジュン君じゃないか。どうしたんだい？」

廊下に出た俺はプロミネントギルダの1人、シリチナに出会った？

“？”を付けたのは兜を被っていなかったからだ。声がシリチナだが……そこに立っていたのはそこら辺に居る会社員みたいな顔をしたオッサンだった。

爽やかな口調だったからもっと若いかと……なんか予想と違ったな。「いえ、女王様に話したいから部屋に来いって言われたんですけど、部屋がどこにあるか分からなくて……」

「それで城の人間に聞こうと外に出たって事か」

「はい」

この人なら知ってるだろうし、別に隠しておく必要もないので正直に話した。

「じゃ、案内をしよう」

ついてくると良い、と言ってシリチナは歩いていった。

「シリチナさんは何で城に仕えてるんですか？」

俺はシリチナに質問をした。

「んー、自分より強い人の下で働きたかったからかなあ
えっ？じゃあ……」

「女王様ってシリチナさんより強いんですか!？」

「プロミネントギルダー（最強の10人）の中でも強弱はあるからね…手合わせしていただいた時には1分と保たなかったよ」

あの目に見えない攻撃を凌いだ上に勝ったのか…次元が違うな。

「へへ、あの姿でそんなに強いんですか」

あんな可愛らしい姿なのに…まあ、悪魔殺しだもんな。

「オレも最初は我が目を疑ったけど…それ以来オレはこの城で仕えてるってわけさ」

「凄いですね」

女王は勿論、それと戦って生きてたシリチナも。

「オレなんかまだまだただけどね。さあ、着いたよ。ここが女王の部屋だ」

俺たちの前には豪華であるが、上品な雰囲気のある扉がある。ユリナント城の扉より趣味がいい。

「ありがとうございます」

じゃ、とシリチナは軽く手を振って廊下の奥へと消えた。

とりあえずノックするべきだよな？

「じよ、女王様へ、潤です」

ノックをしながら呼びかける。

「うむ、入ってよいぞ」

許可をもらったので、扉を引く…

…開かない。

「あれ？」

と、今度は押してみる。

…開かない。

「な、何で!？」

何でこんなコントみたいな事が、と今度は横にスライドしてみる。

…開かねえ!!

えっ!?!何で!?!ちよ、女王が待ってるのに…俺が悪いのか?これ俺が悪いのか?

カチャッ

俺がパニックになっている時に不意に音がした。

えっ？まさかこれって…

「すまぬ、鍵を閉めておった」

女王オオオ！！返せえ！俺のパニックでビビりまくってた心を返せえ！

「い、いえ。お気になさらず」

と、めちやくちやぎこちない笑顔で返す俺。

「さあ、入るがよい」

「じゃ、失礼します」

と部屋へと入った。

内装は扉と同じく、上品な類の豪華さで満ちていた。流石女王というべきか、ベッドは屋根がついたやつ。何だっけ？ああ、天蓋だ。天蓋付きベッドだった。

「さてジュン、早速じゃが、妾に仕える気にはなったかの？」

話ってそれが

「俺たちが何をして、どういったメリットがあるのかをまずは聞きたいです」

決めるのは聞いてからでも遅くはないはずだ。

「分かった。まず仕事内容についてじゃが、特に何もなくてよい」

「兵士として戦いに駆り出されたりもですか？」

これは重要な事だからな。

「うむ。基本的にこの国で兵役は無い。兵士になりたい者が自分で兵士になるのじゃ」

「そうですか、他に事務的、政治的な仕事ありませんか？」

これは重要というより面倒なだけだが…

「そっというのは大臣たちの仕事じゃからの。せんでよい」

「どうやら仕事は本当にないみたいだな。」

「あとは俺たちのメリットですが…」

「生活に困りはしないじやろう。それに国に雇われていた方が動きやすいこともあるう。後は、外の国へ行ったときに妾が後ろにいるとなれば悪魔や異端者であつても無碍に扱われることはないじやろう」

確かに、外国に行つたときは動きやすくなるな。

だが、

「この国にメリットが無い気がしますが…」

「元々は居なかつたただの人間がこの国に引越してくるだけじゃあ？メリットもデメリットも必要ないわ」

ただの人間、か。

ふん、面白い。

「俺は食費が掛かりますよ？育ち盛りですから」

「食糧がなくなった日には雑草でも食べとれ」

そう互いに冗談を言い合い握手を交わした。

「つてな感じでこの国に仕える事にした」

「ここはセレンの部屋。今俺はセレンに女王の部屋での出来事を話した。」

「ふん、いいんじゃない？こつちにメリットはあるんだし」

「だな」

セレンも納得してくれたので一旦自分の部屋に戻つた。

扉を開けると、

「おかえり」

「おかえりなさうい」

と、2人の少女が出迎えてくれた。……って誰！？片方はKY女神だけでもう1人は…

「運命の女神」

と初めて見る少女が答えた。碧い髪に碧い目、どこかつまらなそうな顔をした少女だ。

「へー、よろしく。ってか何で2人ともこの世界に!？」

「運命の女神の運命干渉能力だよ。そのおかげで私たちはこの世界に来られるんだー、一時的だけどね」

そういうことか…そういうばこの前こっちに来るって言ってたっけ。

「今回は挨拶に来た」

と運命の女神が言った。ってかいちいち運命の女神とかKY女神とか言うの面倒くさいな…

「じゃ、友達の印としてニックネームでも付けていい？」

と俺が言つと

「是非」

と運命の女神

「私にも付けてー」

とKY女神

「KY女神じゃダメなのか？」

「嫌よそんなの!ちゃんと付けてよー」

じゃ、どうするか…

「んー、運命の女神は…運命って意味のフォーチュンから取ってフォーってのはどうだ？」

「素敵」

これは気に入ったって事でいいのかな。

「KY女神はKYの元である…」

「私は転生の女神よ!KY女神の方が定着しちやっってるけど本名は転生の女神!」

「な、なんだって!?それは本当なのか？」

「あからさまに驚くな!本当よ」

「しょうがないなー、じゃ転生の女神は転生って意味の…あ、

今回はここまでのようだ。残念だったな」

「させるか！延長よ延長」

「まったく、じゃ、転生って意味のレインカーネーションからレインでどうだ？」

「えゝ、何かジメジメしてそう」

ちっ、注文が多い奴だ。

「じゃあ縮めてレイカ、いやレイネの方がシックリくるか？」

「うんうん、じゃ、レイネで」

「じゃ今度こそ締めちゃっていいよな？」

「いいよ」

「どうぞゝ」

「って言ったって特に締めの言葉とか無いんだけどな」

「えっ」「」

29 なんか、決めたみたいです（後書き）

次回予告

潤「え〜っと、次回は特に予定がありません。ギルドに行くかもしれないし、ノンビリ過ごすかもしれないし…まあ、次回を見れば分かるって」

30 なんか、良い手触りです（前書き）

いつの間にか30話

30 なんか、良い手触りです

あの後女神2人組は帰って、俺は部屋に1人になった。うーん、暇だ。

「風呂でも入るか…」

って事でやってきました大浴場（脱衣場）。ちゃんと男湯だから心配すんなよ？

「さて入りますか」

と服を脱ぎ扉を開けると…

「メ、メイドさん！？何で風呂入ってんの！？」

普通にタオル1枚のメイドさんが入浴しておりました。

「失礼なジュン様ですね。わたくしだって入浴ぐらいます」

「いや、そうじゃなくって、ここ男湯ですよ？何で居るんですか？」

「掃除をしております」

即答された。

「え？どう見てもただの入浴じゃ…」

「たった今、掃除が終わりましたので、入浴した次第ですが何か？」

「そんなに堂々と言われても…男が入ってきたらどうするんですか？」

「現に入ってきました」

「ごもつとも。って、そうじゃなくって！

「いや、俺は…」

「ところでジュン様、そのような所に立っておりますと風邪を引いてしまいます。入ってはいかがですか？」

「え？いや、それは…」

「ヤバイ、完全にメイドさんのペースだ。」

「わたくしが居ると入りづらいですか。では出て行くとしましよう」

そう言つてメイドさんは出ていった。

後に残された俺は、

「え？何これ…」

と立ち尽くしていた。

何とも言えない気持ちで入浴を終えた俺は自分の部屋へと戻った。

「もう9時か…」

寝るには少し早いかな。

「ちよつと外の空気を吸つてくるか」

「ほう、これはなかなか」

このハリンガルは大都市にもかかわらず、この城の庭の空には満天の星が輝いていた。

やっぱり科学の世の中じゃないからかな。

「おにいさんもこの星空、綺麗だと思う？」

「ああ、俺が生まれた所じゃこんな星空見えなかったからな」

「ふゝん、星空が見えないって事はレーテルン辺りかな？」

「いや、もつと遠くの…って誰っ!？」

自然な流れで会話しちまった！

今俺の隣には血のように紅い髪を尻尾のように頭の後ろでまとめ、中学生くらいの顔立ちの少女が無邪気な笑顔でこちらを見ていた。

「遠い所？…ふゝん、なるほどね。この世界の人はね、他の世界の人と違つてこの星空が当たり前になっているからね。もつとよく見れば新しい発見もあるかもしれないのにね」

この世界？それに他の世界って、まさか俺の事を知ってる？

「何故その事を…」

「今時星空の見えない所なんてレーテルンの障気に満ちた溪谷ぐらだからだね。そんな所に人は住めないし」

なるほど。墓穴を掘ったってわけか。まあ、バレてそこまで困る事じゃないんだけど。

「俺の事は分かっただろ？君は誰なんだ？」

「あたし？あたしは人狼族の……えっと、ヴェル。そう、人狼族のヴェルだよ」

何故名前で詰まった？何か裏がありそうだな…いや、今はそんなことより、

「人狼族！？って事は、み、耳とかあるんですか！？」

「何で急に敬語になったの？う、うん。耳は普通に付いてるよ？」
ほら、と言つて頭を見せてきた。

あ、あつた！頭の上には犬のような耳がちょこんと。

「さ、触ってみてもよかとですか？」

「今度は変な訛りがついた！？いいよ、触って」

「し、失礼します」

そう言つてゆっくり、ゆっくりと手を耳に近づける俺。

フアサツ

そんな感じの手触りだった。

……狼サイコ！！この前（第3話参照）はキツネの方が良いなんて言つてごめんなさい！キツネ？ハッ、そんなのは時代遅れさ！狼こそ最も可愛い生物だ！

「ああ、ああ、可愛いなあ。癒される」

そんなことを言いながらヴェルを抱き寄せて頭を撫でる。危ない人になつてゐる？この際そんな事どうでもいいさ！

「ちょ、おにいさん？流石にちょっと恥ずかしいというか、その…」

「ああ、すまん。つい夢中になっちゃつてな」

そう言つて少女を解放する。見ると、顔を真っ赤にして俯いている。女の子にあればマズかったかな…

「いや、気持ちよかつたから良いよ」

ヴェルは赤い顔のまま俺を上目遣いで見ながら言った。

「やべえ、めっちゃドキドキする。もしかして俺って上目遣いに弱いのか？」

「あ、もう行かなくちゃ。またね、おにいさん。あたしは毎日此処に来てるからたまにはおにいさんも来てね。あとあたしの事は誰にも言わないでね」

「ああ、分かった。またな」

そう言っているとヴェルは微笑んで、消えた。

えっ！？消えた？どういう事？実は全部俺の妄想でした。ってオチじゃないよね？

「ジュン様でしたか」

俺がそんな事を考えていると不意に後ろから声がした。

「メイドさん、どうしたんですか？」

そこには表情のほとんど無い、いつものメイドさんが立っていた。「いえ、庭から話し声がしたので謁見の間から来ましたが…どうやらジュン様お一人のようですね」

謁見の間から聞こえたって、ここから謁見の間までかなり離れてるぞ？本当にこのメイドさん何者だ？

「ハリンテ城に仕えるただのメイドです」

また心の中を読んだし…

「さっきからずっと1人でしたよ？何かの聞き間違えじゃないですか？」

「そうですね。ではわたくしはこれで。ジュン様もお身体が冷える前に部屋にお戻り下さい」

一瞬目を細めて、メイドさんは踵を返して城の中へと戻っていった。

「ばれたかな…秘密にしてくれって言われたから一応言わなかったけど。」

「寒っ！もう戻るか」

特にもう用はないので部屋へと向かう。

部屋へと戻った俺は、メイドさんから温かい紅茶を1杯もらって床についた。

明日は何をするかな。ギルド行って移籍届出して、戸籍移して…

30 なんか、良い手触りです（後書き）

次回予告

潤「一体あの娘は……俺の妄想じゃないと思うが……まあ、いいか。
さて、次回は予定通りギルドに行くぜ！最近戦闘がないな。うん、
平和って素晴らしい」

3 1 なんか、久しぶりのギルドです（前書き）

あらかじめ書いておいたものが消えていてショックを受けた今日の頃

31 なんか、久しぶりのギルドです

「さて、今日はギルドに移籍届を出しに行こうと思う」

朝食を終え、俺はセレンに今日の事について提案する。

「そうね。この国で働く事が決まった以上、届けは出さないとけないわね」

「じゃ、早速行きますか」

基本的に仕事をしないで良い俺たちは城の出入りが自由なので気軽に外に出れる。

「引越したんで移籍の手続きをしたいんですけど」

って事でやってきましたハリンガルギルド。大都市だけあってギルドの大きさも働く人の数も相当なものだ。事前にギルドの位置を調べたのだが、その建物の大きさから迷うことなく辿り着いた。つた。

「移籍ですね。ギルドカードを提出して下さい」

俺とセレンはポケットからそれぞれギルドカードを出し、職員に渡した。

「はい、ウエル・カラーさんとセラフィ・カラーさんのお2人がキルファギルドからハリンガルギルドに移籍ということでしょうかいでしうか」

久しぶりに偽名の方の名前を聞いたな……すっかり忘れてたぜ。

「はい、ついでに国籍の方もユリナントからハリンテに変えてもらえますか？」

「承知いたしました。しばらくお待ち下さい……………はい、これが新しいギルドカードになります。ユリナントでの活動も消えずに残っているのご安心下さい」

そう言つと、職員は俺たちに銀色のカードを渡した。

「前回のカードはプラスチックみたいなカードだったんですけど…」
「依頼でジーニアスワームを討伐された時に初級冒険者から中級冒険者にランクアップしたみたいですね。本当なら報告したときにランクアップされるはずなんです…」

ランクアップなんてシステムがあったのか…

ジーニアスワームを倒したときは…
「ああ、その時は急いでいてすぐにギルドから出ました。だからじゃないかと」

「そうでしたか…はい、こちらの方でも登録が完了致しました。何時でもギルドをご利用になれます」

「ありがとうございます」

そう言っただけで俺たちは受付から離れた。

「ジーニアスワームなんていつの間にか討伐したのね」

セレンが聞いてくる。そっか、セレンは知らないんだっけ。

「ちよつとな。緊急で依頼が出たから受けてみた」

嘘は言っていない。

「そんな気軽に受けられるような敵じゃない気がするけど…まあいいわ。で？この後はどうするの？」

「しばらく戦ってなかったから久しぶりに討伐系の依頼でも受けようと思うけど、どう？」

勘が鈍っても困るしな。

「良いと思うわ。じゃあ掲示板を見てみましょう」

そうして俺たちは掲示板へと向かった。

「いや、流石に都会なだけあって依頼も多いな！」

キルファ村の10倍くらいありそうだ。

「討伐系の依頼はこの掲示板ね」

セレンが1枚の掲示板を指す。どれどれ、とふと目に留まった依頼を読んでみる。

《Aランク討伐依頼》

東の砂漠「クレイド砂漠」にグランアスヤが現れた。冒険者はクレイド砂漠へ向かい、これを討伐せよ。

報酬：8000ワロ

証明部位：毒の牙

注意事項：牙には即効性の毒があり、人間は10秒と保たないので注意。また、今回のグランアスヤは大型種なので、魔術師を随伴する事を勧める。

写真を見ると、50メートルはあろうかという大蛇が写っていた。確かに鱗が硬そうだ。魔法の方が攻撃が通るかな。

「俺たち2人じゃ攻撃力不足、か」

「こりゃ無理だ、と諦め他の依頼を…」

「やあ、おにいさん。昨日ぶりだね」

ん？この声は、

「おう、ヴェルか。ギルダーだったんだな」

真紅の髪の上に獣耳がちょこんと乗った少女がそこには居た。

「ジュン、その娘だね？」

と、セレンが聞いてくる。そうか、セレンはヴェルの事知らないんだっけ。ってかギルドであっさり和本名出すなよ…まあ、ヴェルなら大丈夫だろうけど。

「この娘はヴェル。ええっと、この前道で知り合っただ」

ちよつと無理があるか…

「？、よく分からない出会いね。まあいいわ。私はセレン、よろしくね」

「よろしく。ところでさあ、セレンさんはおにいさんの彼女？」

「か、か、彼女！？な、何いってんのよ！私はこんなバカの彼女なんじゃ……」

セレンは顔を真っ赤にして反論している。
バカって……俺何か悪い事したっけ

「違うのか、つまんないの」

何がだよ。ってか

「俺たちに用があるわけじゃないのか？」

「そうだった！おにいさん今グランアスヤ討伐の依頼見てたでしょ。でも火力不足で諦めようと」

何時から見てたんだ？

「あ、ああ。そうだけど」

「じゃあ、一緒に討伐しに行かない？」

「ヴェルは魔術師なのか？」

「いや、違うけど。でもグランアスヤは5回討伐したことがあるから大丈夫だよ」

「ん、でも今回は大型種らしいぞ」

「大丈夫。大型種も何回か討伐したから」

ヴェルは見かけによらず強いんだな……

「分かった。そういうことなら一緒に行こう。いいか？セレン」

「ええ私はいいわよ」

「じゃ決まりだね！あたし依頼を申請して来る」

「じゃ、俺たちも行くか」

「ええ、……あの娘どこかで」

そんな事を呟いたセレンだった。

クレイド砂漠はハリンガルから東に1時間ほど歩いた所にあった。
「この砂漠はね、端から端まで歩いて100日かかるとっても広い砂漠なんだよ」。迷ったら生きて出てこれないから気を付けてね」

そんな事を明るく言うヴエル。

こ、怖え〜！帰って〜

「そんな顔しなくても大丈夫だよ、おにいさん。あたしはこの砂漠に慣れてるから」

え？顔に出てた？

「静かに！2人と。グランアスヤがいたわよ」

見てみると、100メートルほど先に巨大な蛇が蜷局とくろを巻いて寝ていた。

「あれか、デカいな」

「グランアスヤはね、ファイヤー系とアイス系に弱い魔物だよ」

「如何にも変温動物ってかんじだな」

「私はファイヤー系の魔法ならある程度出来るけど、アイス系はさっぱりね」

セレンって魔法使えたんだ…

「俺はアイス系とファイヤー系がそれぞれ中級レベルまでだ」

「あたしは上級レベルの魔法が1発なら撃てるよ。中級レベルの魔法なら10発ってところかな〜」

「ヴエルは上級レベルも使えたのか、凄いんだな」

「1発で魔力が尽きちゃうけどね…」

「んじゃ今回は互いの実力がよく分からないから各自の行動に任すって事で、作戦は特になし」

「分かったわ」

「りよ〜かい」

「じゃ…行くぞ！」

31 なんか、久しぶりのギルドです（後書き）

次回予告

潤「次回、ヴェルの実力が明らかに！？俺も黒い魔力は使わないようにするからな〜大丈夫かな…」

32 なんか、大きな蛇がいます（前書き）

久しぶりの1日に2話投稿

32 なんか、大きな蛇がいます

「じゃ…行くぞ！」

俺は身体能力強化を使い、グランアスヤに突っ込んでいく。身体能力強化は魔力を身体中に巡らすだけだから目には見えないはず、だから問題なし！

「援護は任せた！いくぜ、燃え尽きろ！ダークネスファイヤー」俺がそう詠唱すると、グランアスヤの下の地面から黒い炎の柱が形成される。

蛇の表面を焦がすには至ったがそれまでだ。蛇にこっちの存在を知らせるだけだ。

ギシャーツ

と蛇は牙を剥いてこちらを威嚇してきた。

「…ファイヤーウォール！」

今度はセレンの魔法が発動し、俺の前に炎の壁ができる。魔法は敵味方の区分ができるので俺は熱さを感じない。

パチンとセレンが指を弾くと炎の壁が蛇目掛けて倒れていく。

「もう一工夫だ！ささやかな風よ！ウィンド」

俺がファイヤーウォールに少し風を送り、より強力な炎にする。

流石に危ないと思ったのか蛇は尻尾で自らの頭部を守った。

頭部を守った尻尾は焼けただれていたが、動かすには問題なさそうだ。

ギシャーツ！！

再び蛇が威嚇し、焼けただれた尻尾を俺に振り下ろしてきた。「当たってやるかよ！」

俺は尻尾を避け、地面を打った尻尾を強化した脚で思いつ切り踏みつけた。焼けただれているおかげで物理的な攻撃にも効果が見られた。

ギャーッと悲鳴のような咆哮を上げてのたうち回った。
うんうん、火傷の傷に触ると痛いよね。

そんな事を思っていたら蛇が何かしだした。

「長くなってる!？」

セレンがそんな驚きの声を漏らす。

「いや、あれは脱皮だ！新しい皮膚と交換してやがる」

俺がそう言い終わった瞬間、蛇が無傷で皮から出てきた。

厄介だな…やっぱり火力不足か。

「仕方ねえ！ヴェル、今から見ることは誰にも言っんじゃねえぞ！」

「ん？分かったよ、おにいさん」

と、今まで空気だったヴェルが答える。

「んじゃ遠慮なく、閻針・捕縛！」

そう言っ蛇の上から閻針を出して蛇を地面に縫い付ける。やっ

ぱり魔力を介した攻撃は効くみたいだな。

「新技だ、食らいな！黒桜」

俺がそう言っ、蛇の周りに桜の花びら位の大きさの黒い魔力が大量に吹き荒れた。この花びらの1つ1つは鋭く、刃のようにしてあるので、今回のような巨大な敵には有効な手段だ。

幾千、幾万の刃が蛇に襲いかかり、その皮膚を削っていく。だが、やはり決定打にはならない。

しかし、今脱皮した蛇はもう出来ないらしく、傷だらけのままセレンたちに突っ込んでいった。

あの蛇、いつの間に閻針を解いたんだ！

「そっちにはいかせねえぞっと！黒刀・黒鴉！」

魔力の波は蛇の頭目掛けて飛んでいった。

蛇の顔面に直撃する直前、蛇は口を開いて魔力を食った。

って食った！？いやいやいや、反則だろ！ってそんな事考えてる場合じゃない。

「させるか！ファイヤーウォール！」

無駄かもしれないが、試しだ。

そう思い蛇の前に炎の壁を出現させる。

すると今度は食うことはなく、尻尾で薙払った。

（よく見れば黒桜の傷も顔だけついてないな。純粹な魔力は食えるが、属性が付与された現象としての魔法は食えないのか？）

1つの仮説を立てた俺はもう一度魔法を使ってみる。

「まずは魔力から、闇針！」

俺の手から蛇の口に向けて闇針を飛ばす。

その攻撃は蛇に突き刺さる事はなく吸収された。

「じゃ、次。燃え盛れ！ダークネスファイヤー！」

次は魔法であるダークネスファイヤーを蛇の口に向けて撃つ。

この攻撃は吸収せず、炎の柱を避けた。

（やっぱりそういう事か。これじゃこの黒い魔力は使えないな）

とりあえずさっきのファイヤーウォールでセレンたちから気を逸

らし再び俺を目標にしたので結果オーライだ。

「魔力も残り少ねえか…これで最後だ！黒桜」

さっきと同じように顔以外を切り裂いていく。

これだけ傷だらけになれば大丈夫かな…

「セレン！グランアスヤの四方にファイヤーウォールを！ヴェル、

後は頼む！」

「分かったわ」

「オッケー」

2人がそう返し、後俺に出来るのは見守るだけだ。

「邪なるものを聖なる炎縛の壁にて焼き尽くさん！ファイヤーウォール」

あれが本当の詠唱らしいです。

詠唱が終わった瞬間、蛇は四方が炎の壁で覆われ、一瞬動けなく

なった。

「じゃあいくよ、エクспロード・フレア！」

む、無詠唱オオオ！？俺だって中級レベルを短縮詠唱しか出来ないのに、上級レベルを無詠唱だって！？

ヴェルが魔法の名前を言った途端、蛇の頭上に巨大な魔法陣が現れ、そこから燃え滾る隕石のようなものが降ってきた。

隕石が蛇にぶつかると急激に収縮を始め…

「あちゃ、やりすぎた。2人とも伏せて！」

ヴェルのそんな声が聞こえ、伏せるやいなや、

ドオオオオオン！！！！

という地響きを伴った大爆発を起こした。

熱風が俺たちの上を通り抜ける。

うわ、背中がめっちゃくちゃ熱い。

一通り地響きも収まったので辺りを見てみると、

「なんだよ、これ」

蛇が居た場所はクレーターができていて、蛇は骨まで溶けたのか姿はなかった。

一面砂しかない砂漠なので目に見える影響はこれだけだが、街や草原で発動したら、その破壊力は計り知れない…

「2人とも大丈夫だった？」

「ええ、私もジュンも大丈夫よ」

セレンが答える。

「上級魔法って凄いな、中級魔法とはレベルが違いすぎるよ」
これは俺の感想だ。

「上級魔法は発動が大変だからね」

嘘付け、お前無詠唱だったじゃねえか。

「制御も難しいからセレンさんやおにいさんにも被害が及んじゃっ

たしね」

そういえばそうだな。って、

「討伐対象が消え去ったわけだが、証明部位が無いってことは依頼失敗って事になるのか？」

「本来はね、でもあたしのちょっとしたコネで何とかしてあげる」
「ちょっとしたコネって、ギルドにコネ持ってるって相当すごいと思うぞ。まあ、とりあえずは

「サンキューな。じゃ、戻るか」

と言って俺たちはハリンガルに帰って行った。

帰り道なんて覚えてないのでヴェルについて行って、だが。

32 なんか、大きな蛇がいます（後書き）

次回予告

潤「今回はゆつくりしたいな。ギルドで仕事してきたから休んでもバチは当たらないだろ。ヴェルって娘が何者が分かんないけど、敵じゃなさそうだし、ヴェルってプロミネントギルダーもいなかったし、まあいいか」

33 なんか、英雄みたいです（前書き）

1日に3話投稿。

計画性なんてありません。

33 なんか、英雄みたいです

ギルドで報告をして報酬（本当に証明部位を渡さなくても貰えた）を分けた後、俺とセレンはハリンテ城に戻った。ヴェルは用事があるとかでギルドで別れた。

「今は3時か：何しようかな」

「依頼完了したばかりなんだから休めばいいじゃない」

今俺たちはそれぞれの部屋に戻る途中の廊下で歩きながら話をしている。

「ん、そうだな」

「私も今日はもう休むわ、っと私の部屋着いたから、じゃあね」

おう、と返事をするセレンは自分の部屋に消えていった。

「俺も戻るかな、ってメイドさん！？部屋の前でどうしたんですか？」

メイドさんは俺の部屋の前でぼくと立っていた。

「ジウン様、お待ちしております。女王様が部屋にてお待ちです」俺に用件だけ伝え、では、と言ってメイドさんはどこかに行ってしまった。

相変わらず謎だらけな人だなあ。

「部屋に来い、だっけか？早速行きますか」

そう言う俺は女王の部屋へ歩いていった。

「女王様、潤です」

ノックをしながら呼び掛ける。

「おお、やっと来おったか。入ってよいぞ」

許可を貰ったので中に入る。

良かった、今回はふつうに入れた。って何当たり前なことだ安心してんだ俺。

「どうも、それで何の用でしょうか？」

「用というほどのものではないんだがの、ジュン、お主ユリナントで何をした？」

「ああ、もうバレちゃいましたか。まあ、ギルドを介せばすぐに分かることですけどね」

「ということは、真実なのか」

「はい、俺はユリナントで王を…」

「お主は英雄であつたか」

「え！？いやいや、俺は王を殺してハリンテに逃げてきたんですよ！？英雄つてのは何かの間違いじゃないかと」

「ほう、ジュンはまだ知らないのか」

「何をですか？」

さっぱり意味が分からない。犯罪者の間違いじゃないか？

「ユリナントはあの後反乱を起こしてな、国王軍と市民軍が衝突したのじゃが、頭を失っている国王軍が負けての、国王軍は処刑され市民が政治を執り行うようになったんじゃ。そこでこの反乱のきっかけとなり、勝利をもたらす要因となったジュン、いや、ウェルが英雄となったのじゃ」

長文ご苦労様です。……ってそうじゃなくて！

「英雄って呼ばれるような事してないんですけどね」

「まあ、人の好意は受け取っておくとよい。あと1つ気になることがあるのじゃが、今はいいか」

何だ？気になるじゃないか。

「今じゃダメなんですか？」

「うむ。今聞いて逃げられても困るしの」
逃げられる？何のことだ？

「あまり気にせず生活すればよい」

その後、俺と女王は他愛もない無駄話をして、夕食に近い時間になったので、自分の部屋に戻ることにした。

「では俺はこれで」

「うむ。時間をとらせたな」

いえ、と言つて俺は部屋から出た。

もうすぐ9時かあ…え？夕食はどうしたかつて？普通に食べましたよ？特に書くこともないんでカットしました、はい。

「そういえば昨日はこの時間に庭に出てヴェルと出会ったんだっけ」
また耳を撫でさせてもらいに行きますか。
よっこらせ、と立ち上がり庭へと向かう。

「おお、今日も星がバツチリ見えるな」

俺が何とはなしに呟くと、

「この世界では夜はいつも晴れて星が見えるからね」
もうお馴染みになり始めている声。

「ヴェルか…今回も全く気配を感じなかったな…」

「あたしはかくれんぼのプロだからね」

なんだよプロって…

「ところでヴェルって何時からここにいるんだ？」

「あたしは毎日8時にこの庭に不法侵入してるよ」

ニシシッ、と悪戯に成功した子供のような笑いを浮かべていた。

「よし、衛兵を呼ぼうか」

俺が立ち上がると、

「ちょ、ちよつと待って！あたしの日課を奪わないでよ」

と、俺の足にしがみついてきた。

「冗談だって、俺もヴェルと会うの楽しみにしてるしな」

俺がそう言つと、ヴェルは顔を赤らめた。何故？

「そ、それって…」

「おう、ヴェルを撫でるのは俺の楽しみだからな」

「おにいさん、あたしで遊んで楽しい？」

「いや、俺は撫でることが楽しいんであって…」

「はあ、おにいさんって女の子の扱い上手いね。悪い意味で」

ヴェルがジト目でこちらを見ている。

「最後のは余計だけだな。そんな事より…俺の封印された右腕が
前を求めて暴れるんだが」

「なんかイタイ！おにいさんイタイ！」

俺からすればこの世界の詠唱も十分厨^{イタイ}二けどな。

「んゝ、ちよつとだけだよ」

そう言つて頭を差し出した。

「ああゝ、いいなゝ。飽きねえなゝ」

俺はヴェルを抱き寄せて頭を撫で回す。え？行動が犯罪者みたい？何とでも呼ぶが良い。モフモフは正義！

「そういえばヴェルって顔綺麗だけど、狼特有のヒゲみたいなのは無いの？」

頭に獣耳がついている以外は至つて普通の人間の女の子だ。

「獣人って言つても9割は人間の血が入ってるからね。あたしは耳と尻尾が人狼族特有のものなんだよ」

「し、尻尾まであるんですか！？」

「っ！このパターンは！」

「さ、触らせてもらつてもよか…」

「ダメゝ！尻尾はダメゝ、恥ずかしすぎるよゝ」

そう言つて俺を涙目で見てくる。そんなに恥ずかしいものなのか…

「ごめんごめん、まだしばらくは耳で我慢させてもらうよ」

「……本当は耳触らせるのも人狼族の中じゃ……」

人狼族の中じゃ、何なんだ？何か言つたみたいけど。

「あつ！誰か来る！じゃあね、あたしの事は誰にも言わないでね」

そう残してやっぱり消えた。
誰にも喋るな、かへいへい分かりました。

「またジュン様ですか、独り言は紛らわしいので控えていただけますか？」

メイドさんが現れた。

ジュンはどうする？

・ たたかう

・ にげる

・ 言い訳をする

・ 気になる事について聞く

なんか選択肢出てきた！ってかたたかうは論外。なんだよ気になる事について聞くって…選んでみるか。

・ 気になる事について聞く

「メイドさん、紛らわしいってどういう事ですか？まるで誰かが来ることを待っているかのような…」

「勘違いでしょう。さあ、部屋へお戻り下さい」
明らかに怪しいな…

「怪しくなんてございません」

そう言つとメイドさんは城内に戻っていった。
ってか、また俺の思考を読んだな！

「はあ、寝るか…」

33 なんか、英雄みたいです（後書き）

次回予告

潤「今回は城内を散策でもしてみるか。実はまだ知ってる所って俺とセレン、女王の部屋に謁見の間、大浴場到大広間、それと庭か…
って意外とたくさん知ってるな！散策必要ないんじゃないかね？」

34 なんか、案内してくれます（前書き）

まったくの気分で書いたものですが何か？

34 なんか、案内してくれます

《メイドさんの 教えてハリンテ城》

ドンドンパフパフッ！

「え？何これ」

出だしからよく分からないんですけど……ってか変な効果音流れたし。

「本日はハリンテ城の事を何も知らない、無知で無能で役立たずなジュン様にこの城をわたくし自ら案内してさしあげようという企画です」

「俺ってそんなダメ人間だっけ……どうして急にそんな事やり出したんですか？」

「前回のあとがきで仰っていたではありませんか。ご自分の発言に責任をもって下さい。だから無知で無能で役立たずと言われるのです」

「あとがきまで責任もてねえよ！？ってか無知で無能で役立たずなんて生まれてこのかたさつき言われた以外言われたことねえよ！」

「やれやれ、ジュン様はツッコミが多くてなかなか先に進められません。だから無知で……」

「もういい！無限ループするから！で、案内ってどこを案内してくれるんですか？」

「やっと進みましたか、本日はジュン様が今まで行ったことのない場所へ案内しようと思います」

「行ったことのない場所？ああそういう事ですか」

「納得をしていただけたようなので早速行きますよ？」

「お願いしまゝす」

「まずは屋内から案内いたします」

そう言われて俺は何かの部屋の前に連れてこられた。

「ここは何の部屋ですか？」

どう見ても普通の部屋だが…

「ここはわたくしの執務室です」

「ああ、メイドさんに会いに行くときはこの部屋にくらいいいんですね？」

「いえ、この部屋は入った途端死にます」

ええええっ！！死ぬの！？入ったら死ぬの！？

「はい、なのでお気を付け下さいということですよ」

「そういうことですか…ってか勝手に心を読まないで下さい」

「分かり易すぎるものでして、では次へ行きましょう」

「ここは…」

「はい、女湯でございます」

「いや、俺ご利用できないから」

「で、出来ないのですか！？」

「そこ、わざとらしく驚かない」

「いえ、ジュン様はそのうちここに来て…」

「いやいや！俺はそんな事しないから！」

「しないのですか！？」

「はあもういいです。次行きましょう」

「ここは書庫でございますが……ジュン様はご利用しませんね。次行きましょう」

「ちょ、待って下さい。少なくとも女湯よりは使いますよ！」

「そうなのですか！？」

「いや、その反応もういいから」

「そうですか。この書庫ですが、物語、伝説、魔法についてなど、様々な本が置いてあり、蔵書数は100万にも昇ります。ここにある本はいつでも閲覧することはできますが、特別魔法についての本は女王に許可をもらわねば閲覧できません」

「分かりました。ところで、特別魔法って何ですか？」

「チツ 特別魔法とは例えばジュン様の闇魔術のような一部の人のしか使えない魔法のことです」

舌打ちされたっ！？ってか俺の黒い魔力って闇魔術っていうんだ。ん？ちよつと待てよ？

「何でメイドさんは俺が闇魔術を使えることを知ってるんですか？」

メイドさんの前じゃ1度も見せていないんだが…

「黒髪には闇魔術を使える人がいます。またジュン様が悪魔である事は女王様から聞いておりますから。悪魔と呼ばれる人は皆闇魔術が使えます」

「そうでしたか」

「では時間もないので次に行かせていただきます」

「屋内最後は調理場となります」

「へー、でもやっぱり俺使いませんよね？」

「そんな事ありません。予め申し出ていればお菓子を作ることもし…すみません。ジュン様は料理が出来ませんでしたか」

「いや謝る必要はないよ！？俺料理しますし」

「そうなのですか！？」

「・・・その返し気に入ってますよね」

「はい」

「はあ、屋内はもういいので外へ行きましょう」

「ここは普段兵士が訓練する南の庭でございます」

「へー、そういえば木剣とか打ち込み人形とかが置いてありますね」
「今は訓練をしておりませんが昼になれば訓練が始まるはずですので、参加してみたいかがですか？」

「やってみ…」

「ああ、言い忘れていましたが、シリチナ様が今度手合わせしたいから訓練に来てほしいと仰られていました」

「…ようと思ったけど俺も忙しいからな、ああ残念だ」

「わざとらしいですよ？ ジュン様」

「さ、次行きましょう、次」

「……分かりました」

「ここは女王のお気に入り東の庭です」

そこは中央に噴水があり、周りを囲むように色とりどりの花が咲いていた。

「綺麗な庭ですね。1年中花が見られるように四季の花を取り揃えているようですし」

「ジュン様は花にお詳しいのですか？」

「少しなら分かるかな」

「なるほど、幼少期に遊ぶご友人の居なかったジュン様は花を見ることで孤独を癒していらつしゃったと。トラウマを掘り起こしてしまい申し訳ありません」

「いやいや！俺そんな寂しい幼少期送ってないから！何勝手に捏造してんですか！？」

「そうなのですか！？」

「………」

「……申し訳ございませんでした。次行きましょう」

「ここが城の皆様の憩いの場である北の庭です」

「東とか西の庭は来ないんですか？」

「東の庭は女王様の憩いの場ですし、西の庭は、ある理由があつて皆様はご利用になれません」

「え！？西の庭つて俺が夜に居た場所ですよ？まずかつたんですか？」

「いえ、ジュン様は特に問題ありません。どうぞお気になさらず」

「呪われた場所とかじゃないですよ？ね？」

「そんな事は・・・ありません」

「何その間！呪われてませんよね？」

「ちよつとした冗談です」

「俺は本気にしてました」

「これで城内の案内を終えたわけですが、どこか見ておきたい場所がありますか？」

「ついでですから西の庭も案内してほしいです」

「チツ では付いてきて下さい」

「また舌打ちされたっ！？メイドさんつて絶対俺の事嫌いですよ？」

「あいらぶゆーです。ジュン様」

「分かり易すぎる！メイドさん絶対俺の事嫌いだ！」

「そんな事より、早く行つて終わらせましょう」

「面倒くさいんですね？」

「ここが西の庭です。わけあつて今はジュン様以外使用禁止となつています」

「わけつてのが気になりますが・・・」

「やれやれ」

「何ですか、その察しろよつて雰囲気」

「おかしな事を言うジュン様ですね」

「俺が悪いのか、今の俺が悪かつたのか」

「さて、もう案内してほしい所はないですね？では、わたくしはこれです」

そう言つとメイドさんは屋内へと戻つてしまった。

「ええっと……何これ」

残つたものはすっかり置いていかれた俺の虚しい呟きだった。

34 なんか、案内してくれます（後書き）

次回予告

潤「皆さん聞いて下さいよ、作者はこの話書くのに30分掛けてないんですよ？もう少し丁寧に書いてほしいですよ。まあ、ここで愚痴を言ってもどうしようもないんですが。さて、次回は……何しよう」

35 なんか、冥土、いや冥府に行きます（前書き）

ゲームをしてました…

35 なんか、冥土、いや冥府に行きます

「ジュン、今日はお主に頼みたいことがある」

「嫌です」

「うむ。それはじゃな、ちよつと冥府レーテルンまで国書を届けて欲しいのじゃ」

「だから嫌ですつてば」

「うむ。快い返事、感謝するぞ。なにぶん、あの国の王がお主に興味があるらしくての」

「えっ！？俺の事無視？俺の意見は？」

「よいか？メイドよ」

「はい、問題ないかと」

「何でメイドさん！？俺の保護者！？」

「では頼んだぞ、ジュン。1人での旅路はつらいじゃろつがへこたれずにの」

「しかも1人で！？誰か連れて行っちゃダメですか？」

「城にいる者は皆忙しくての。セレンにも頼み事があるからダメじや。ギルドに仲間がいるならそやつを連れて行け」

「……セレンに危険な事はさせないで下さいよ？」

「分かつておる、引き受けてくれるかの？」

「はあ、分かりました。行つてきますよ」

「そうか、これが国書じゃ。これを1ヶ月以内に届けてくれ」

「へーい、じゃあ行つてきます」

そう言つて俺は謁見の間から出た。

「さて、準備するか」

まずはセレンにこの事言っておかないとな。

「セレンく、居るく？」

セレンの部屋をノックすると中からセレンが出てきた。当たり前か、これでセレン以外の人が出てきてもビックリだしな。

「どうしたのよジュン、部屋に来るなんて珍しいわね」

「いや、実はかくかくしかじかで」

そう言っているとセレンはジト目で俺を見てきた。

ん？もしかして、

「かくかくしかじかで通じるのは小説の中だけよ」

「え？だってこれ小せ…」

「ダメよジュン！そこから先は言っではいけない気がする」

「あ、ああ。作者を倒せばいつでもあっち（現実）に行けるんだけどな」

「そういうことも禁句よ！で、結局何の用なの？」

「そうだ俺、女王様に頼まれてレーテルンに国書を届けて来なきゃいけないってさ、しばらく会えないからそのつもりで」

「べ、別にあんたなんか居なくても何とも思わないわよ！」

久しぶりのツンデレだな。思わず微笑んじまうぜ。

「そっか、セレンにも頼み事があるそうだから頑張ってな。じゃ、行ってくる」

そう言っただけ俺は歩き出した。

「サッサと行ってきなさいよ」

ハイハイ、と俺は手を挙げて応える。

「仲間を連れて行きたいところだけど、誰か居たかなあ」

案外俺って人見知りだったのかも…

「この国で城に仕えてない奴……ヴェルか」

そうと決まればギルドへレッツゴー。

「ヴェルってギルダ―は居ますか？」

「ヴェルさんですね、少しお待ち下さい」

・
・
・

「申し訳ありませんが、ハリンテ国ギルドには所属しておりません」
「そんなはずは、赤髪で獣人の……」

「やあ、おにいさん。呼んだ？」

振り向くとそこにはヴェルが立っていた。

「お、おう。ちょっと頼み事があってな」

「あ、あなたはノル……」

「お、おにいさん！あっちで話そ！」

な、なんだ？ヴェルが慌てるなんて珍しいな。受付の人も何か言
つてたし。

ヴェルにギルドの端っここまで連れてこられた。

「どうしたんだ急に」

「い、いや、あそこで立ち話しても受付に用がある人に迷惑かな
って」

「ああ、そういうことか。気が利く奴だな」

そう言っつてヴェルの頭を撫でる。

「や、やめてよ、恥ずかしいよ」

ヴェルが顔を赤らめて言う。

可愛い奴めっ！

「ハイハイ、んで、ヴェルを呼んだ理由だけど、付き合っつて欲しい
んだ！」

俺がそう言っつとさっきよりも顔を真っ赤に染めた。

「そ、それは……」

「おう。ちょっとレーテルンに届け物があってな、一緒に来て欲しい
んだ」

「お・・・」

「お？」

「・・・おにさんのバカッ！！！！！！」

ヴェルが泣きながら俺を叩いてくる。

え！？俺が悪いの？

「ああ、え、ええつと、その、ご、ごめん！何か気に障ったのなら謝るよ」

ヴェルは依然泣きやまない。

うう、周囲の視線が痛い...

「ちよつと失礼するよ」

そう言つてヴェルを抱きかかえ、俺はギルドから逃げるように出て行つた。

俺は街の東側に位置する河原までヴェルを運び、降ろした。

「おにさんの鈍感！無神経！でくのぼう！」

早速すごい罵声が飛んできた。

「無神経とはよく言われるな」

鈍感でもでくのぼうでもない俺は思うが。

人からの好意にはよく気付くし、セレンやヴェルが俺に親しみを持ってくれてるのも分かつてるし。

「おにさんにあたしがどんな気持ちか分かってないでしょ！」

「ごめん」

「・・・はあ、いいよ。おにさん反省してるみたいだし、許してあげる」

「はい」

「で？あたしにレーテルンまで一緒に行つて欲しいんだって？」

ホッ、スーパー説教タイムは終了したか。少しは反省しろつて？

俺は無神経で有名だからな。そういうのは理解できないんだわ。

「おう。是非ヴェルに付いてきてもらいたい」

「そついう言動が勘違いをさせる元なんだけど...いいよ。一緒に行

「つてあげる」

「んじゃ、これから頼むな」

俺がそう言つて右手を差し出すと、ヴェルは俺に人差し指と中指を立てて、俺に見せてきた。

「あ、2つほど条件、つていうかお願いがあるんだけど…」

「俺に出来ることなら」

「1つは、もしも戦闘があつた場合はあたしに全部任せること、もう1つは……その、移動中はあたしを隠して」

「ん？どういう事？」

「1つ目は特に気にしないで、もしもの為だから。2つ目は、ちょっと今ある人たちに追われてるんだよね。だから」

「追われてる！？大丈夫なのか？」

「直接接触はしてこないからね。暴力を使うような人たちじゃないし。おにいさんのローブの中に入れてあたしを隠してよ」

ああ、言い忘れてたけど俺はローブを着ている状態だ。剣とかは必要ないから身に着けてない。

「そんなんで大丈夫ならいいけど」

「大丈夫、監視されてたらわかるし」

「そっか…俺は準備出来てるけどヴェルはどのくらい掛かりそう？」

「旅の準備はいつでも出来てるから今からでも大丈夫だよ」

「んじゃ、早速行きますか」

そうして俺たちはレーテルンへ向かうべく、ハリンテを出た。

「ところで、レーテルンってどっちだ？」

「しっかりしてよ、おにいさん。レーテルンはハリンテの北西だよ」

35 なんか、冥土、いや冥府に行きます（後書き）

次回予告

潤「今回はレーテルンまでの旅路だな。何かあるかは俺にも分からない。それが旅というものだ。・・・今の格好良くない！？え？そうでもない。さいですか」

36 なんか、俺が空気です（前書き）

何か気に入らない…

36 なんか、俺が空気です

是非ヴェルと一緒にいきたい、か。あっち（元の世界）に居た頃の俺だったら信じられない位の变化だな。まあ、それが良いことなのか悪いことなのかは別として…

「どうしたのにおにいさん？悲しそうな顔して」

俺そんな顔してたのか。やっぱり変わったな俺。

「なあ、ヴェル。過去の罪って許されるのか？」

「えっ！？どうしたの急に？おにいさん疲れてる？」

「そうだな、俺らしくないよな・・・疲れたのかもなあ、ここはヴェルを撫でて疲れをとるか！」

そう言っただけ俺は笑いながらヴェルの頭を撫でる。

俺らしくない、かあ、いつの俺の事をいつてんだか。

「な、なによ急に」。やゝめゝてゝよゝ」

「フハハハハ！ローブの中にいる貴様に我の魔の手から逃れる術はないわ！観念するがいい」

「キャラ違っ！それに自分で魔の手って言っちゃったよ！」

「つっこみレベルは3つてところだな。これから期待。つかつっこみレベルってなんだ？」

「ふう、疲れがとれたぜ。で、ヴェルはレーテルンに行ったことあるのか？」

「ちよつとした理由があつて、外国には行った事はないんだ。でもレーテルンの王様とは知り合いだよ？嫌な奴だけだね」

「へー、大変なんだな。で？レーテルンの王様って誰なんだ？」
嫌な予感しかないが…

「えつとね、ここ600年位はサナトスっていう王様が国を治めてるよ」

「サナトス？どっかで聞いた名前だな…」

「邪神王って言えば分かるかな？」

「……はあ、やっぱりプロミネントギルダーか。どんな人なんだ？」

「ハリンテのプロミネントギルダーはみんな温厚で平和主義なんだけど、レーテルンのプロミネントギルダーは2人とも好戦的なんだ」

「ヴェル、俺大切な用事思い出した。だからあとは頼ん…」

「ダメだよ！あたしだって行くの嫌なんだから」

「はあ、じゃあせめてもう1人のプロミネントギルダーに出くわさないようにしなきゃな」

「もうすぐハリンテとレーテルンの国境だよ」

「ご都合主義だな」

「なにそれ？」

「いやいや、こつちの話だから気にするな」

「ふん、……けて」

「え？何か言った？」

「避けて!!」

そう叫ぶとヴェルは俺を蹴って30メートルほど飛ばした。

直後、音もなく全長10メートルはあるつかという巨大な剣が、さつきまで俺たちが居た場所に突き刺さっていた。

「強者の気を感じると思っただらてめえだったか、獣懷狼」

声のした方を見ると、肌が黒く、充血なんてレベルじゃないくらい赤く染まった眼球。俗に言う魔族がそこには居た。

「何の事やら、獣懷狼なんてあたしは知らないけどね。そういうあんたは魔天剣かな？」

「クッククツ、てめえ変わったな。一昔前なら誰かと行動するなんて事はなかったのにな。なんせてめえは…」

「やめて!!それ以上言わないで!!」

魔天剣とかいうプロミネントギルダーがそこまで言ったところでヴェルが声を上げた。

どうしたっていうんだ？

「ホント変わったたよてめえは。恋でもしたか？」

「うるさい！黙って！」

何なんだ？そこまで聞かれたくないことがあるのか？

「力ずくで黙らせてみるよ」

「くっ！おにいさん、ちよっと待っててね。クローズ！」

ヴェルが何か詠唱すると、俺は五感全てを消された。

「魔法？それもかなり上位だな」

ヴェルは大丈夫なのか？あいつプロミネントギルダーだろ？確かにヴェルも強かったがプロミネントギルダーには適わないんじゃないか？
「チクシヨウ、待ってるしかねえのか」

ヴェル視点

「さあ、いくよ！」

あたしは魔天剣に向かって走り出す。スピードであたしを超える者は現在はいない。おにいさんも人の中じゃ速いけど、あたしには歩いているも同然のスピードだ。

「スピードは衰えていないようだな。・・・見えねえぜ」

一瞬で魔天剣に詰め寄り、殴り飛ばす。軽い一撃だから倒すにはまだ足りない。

「エクスプロード・フレア！ジェノサイド・アトミック！メテオ・ライトニング！」

上級複合魔法を連続して発動させる。今はおにいさんが見てないから自由に魔法が使える。

幾重にも魔法陣が重なって、物凄い光とともに衝撃が巻き起こる。
「岩に突き刺さりし覇者の聖剣、我が呼び声に応えよ！エクスカリバー！」

マジックキャンセルしたのか？

魔法が巻き起こった場所には傷一つ無い魔天剣が立っていた。

いきなり本気だねえ。それにエクスカリバーって・・・ちよっとまずいかな…

見ると、空から光り輝く巨大な剣が降ってきた。

おにいさんに使った攻撃と同じかな？なら、

「三頭一対！地、海、空の魔獣よ、ここに具現せよ！ベヒモス、レヴィアタン、ジズ！」

あたしは三頭の魔獣を呼び出した。ベヒモスは禍々しい角を持つ巨大な雄牛、レヴィアタンは鉄壁の身体を持つ巨大な海竜、ジズは銀色の羽を持つ巨大な鳥だ。

「ジズ！エクスカリバーを止めてきて」

ギヤアアオ！という鳴き声とともに、ジズはエクスカリバーの前で翼を広げた。

キンツ！という硬質な音が響き、エクスカリバーはジズの翼に弾かれ、勢いを失った。

「なに！？ペットの鳥如きに弾かれただと？おのれ、大蛇に守られし神の剣！天叢雲剣！」

魔天剣がそう叫ぶと、剣が1本出てきた。

「天叢雲剣、あなたの本気ってわけか」

「一振りで終わらせてやろう」

そう言つて、剣を拵んだ。

「ジズ、ベヒモス、レヴィアタンもういいよ。あとはあたし1人で大丈夫だから」

あたしは呼び出した三頭を戻す。

・・・ベヒモスとレヴィアタンに至っては何もしなかったんだけどね。

「ペットを戻すなんて、死ぬ覚悟でも出来たか？」

「いちいち五月蠅いなあ、集中しないと命を落とすかもよ」

「ほざけ、魔獣のいない獣懐狼なんて、ただの獣人同然。食らえ！

ジェットブラック・クロス！」

魔天剣は天叢雲剣を袈裟切りを2回し、軌跡でバツの形を描いた。
嫌な気配がする…

そんな事を思ってた直後、軌跡から黒い刃が飛んできた。

迫りくる刃をすんでのところで避け、刃の着地点を見てみると何か魔法陣が描かれていた。

「新技かな？」

「いいや、一撃必殺の奥の手さ。これを見て生き延びた奴はいないから情報が洩れてないんだろうな」

だとすると、短期決戦にしないとかなりヤバいと。

「突っ立てると奥の手の前に死んじまうぜ！ジェットブラック・クロス！」

いつの間にかあたしの横側にきた魔天剣が再び黒い刃を出現させ、着地点に魔法陣を刻む。

何なんだ？何をしようとしている？

「次いくぜ！ジェットブラック・クロス！」

今度はあたしの後ろ側にきた魔天剣が技を放ち、着地点に魔法陣を刻む。

今魔法陣はあたしを中心に一辺300メートルくらいの三角形を描いている。

「まさか！？」

「今更気付いたところで遅え！魔天・断罪！」
デモン・ジャッジメント

すると、三角形内部の空間に、黒い歪みが生まれ、漆黒の剣が現れ、その空間を無に帰した…

36 なんか、俺が空気です（後書き）

次回予告

潤「はいはい、何も感じない空間に独りぼっちの潤君がお送り致しまゝす。……何もわかりません！ヴェルにでも聞いてくれ。俺は寝る！」

37 なんか、怖いです（前書き）

最近スマートフォンが落ちやすくて文章が消える…

37 なんか、怖いです

「ハッハッハッ！俺より強いと言われた獣懐狼を倒したぞ！」

肌が黒く、目が真つ赤な魔族が、下には約30メートル、上には雲まで三角形に切り取られ、いや、消された風景を前に高笑いをしていた。

「ホント、おめでたい魔族だよ、魔天剣」

魔天剣は思わず冷や汗を浮かべる。

「ハハハッ、まだ奴の声が聞こえてきやがる」

「やれやれ、五感が封じられたおにいさんを移動させるのも大変だったよ」

「そんなバカな！てめえは確かに俺の魔天・断罪で空間ごと消し去ったはず」

「プロミネントギルダ―第3位が空間転移の1つも出来ないと思う？第7位の魔天剣さん」

「クソがアアア！！」

そう叫びながら魔天剣は天叢雲剣を振り上げる。

「そうやってすぐに頭に血が上るのが悪い癖だよ。せめて第5位に勝てるようになってから出直してきなよ。レポートと」

そう唱えると魔天剣の身体が光り出し、消えた。

「行き先は……よく分からないや」

そんな事を言いながら潤に掛かっているクロースを解く。

潤視点

寝ていたら急に明るくなって、目を開けると前にはヴェルが居た。

「お？おうヴェル大丈夫だったか？心配したぞ」

「ウソだ！今絶対寝てたでしょ！」

何でバレてるの！？完璧に隠せてたはず…

「ちよつと心眼使って戦闘の様子を窺ってた」

するとヴェルはジト目をして俺を見てきた。どういう事？

「おにいさん、涎」

そう言っただけ俺の口元を指でなぞった。

「うん、確かに涎だ。って、

「女の子がそんな事するんじゃないやありません！」

まったく、はしたない。不覚にもドキツとしちゃったじゃないか。

「お母さん！？あたしのお母さん！？」

「いや、おにいさんだ」

「急に冷静にならないでよ…しかも自分でおにいさんって」

「悪かったな」

「んじゃ、行きますか」

一通りじゃれ合ったんで本題に戻る。本題ってほどじゃないけどな。

「いいの？」

「ん？何が」

行っちゃ何かまずいのか？

「あたしの事、気にならないの？」

「え？そりゃあ女の子としては魅力的な方かと思うけど…」

「ありがと。って、そうじゃなくて！あいつが言ってたことの方！」

「あいつ？ああ、魔天剣とかいうプロミネントギルダの事か。ヴェルの事何か言ってたな。まあ、気にしないさ、ヴェルが言いたいときに言えばいいよ」

「……そう」

「じゃ、行こうぜ。あと1週間でレーテルンに着かなきゃいけないし」

「うん！じゃ、またロープにいれて」

「おう！ヴェルの耳は任せとけ」

「や、やっぱやめようかな…」

そう言っただけから離れようと後ずさる。

「フッフッフ、よいではないか」

俺はそんなヴェルを抱き寄せて撫で回す。

「あゝ、もう！おにいさんったら。。。ありがと」

聞こえないように言っただけもりなんだろうが、この至近距離じゃ丸聞こえだぞ。

「ハハッ、どういたしまして」

「き、聞こえてたの！？サ、サッサと行こ」

ヴェルはロープの中にいるから顔は見えないが、きつと顔を赤くしていることだろう。

「いつの間にか夜になっちゃったな」

俺たちは今レーテルンの森にいる。めっちゃ不気味なんですけど…

「しょうがない、野宿にしようか」

「ヴ、ヴェルさん？野宿ってこの森ですか？」

「そうだけど？夜に森を歩くのは遭難の危険があるからね」

「いや、遭難と同じくらい危ないものがここには居そうなんだが」

「獣は何故かこちら辺にはいないから大丈夫だよ？」

「何かいるからじゃね？獣は分かっているんじゃない？」

「もしかしておにいさん、怖い？」

「な、な、な、何の事やら」

「んじゃ、野宿しても大丈夫だね」

「お、おう、サッサと寝る場所探そうぜ？」

声が震えてる上に裏がえってしまった…恥ずかしい。

「ここでいいかな？」

俺たちは森の中でも比較的開けた場所で一晚過ごすことにした。

野宿なんてこの世界が飛ばされた時以来だな…

「じゃ、暖をとって夕食にするか」

枯れ木を拾ってファイヤーで焚き火をした。

「夕食は干し肉と野菜と缶詰めがあるけど何がいい？」

「あたしは干し肉だけでいいよ」

「ちゃんと野菜もとりなさい！栄養バランスが悪いわよ！」

「お母さん！？とてもいいよ、そのノリ…」

「だが実際に野菜はとった方がいいぞ？太るぞ」

「女の子にその言葉は禁句だよ！人狼族は肉食で野菜は食べないの。体重だつて軽いんだよ？」

肉食系女子と、え？意味が違う？

「ふーん、ならしょうがないな…じゃ、どうぞ、お姫さま」

「どうも、おにいさんは何食べるの？」

「俺は野菜でいいかな、そんなに肉は好きじゃないし」

「おにいさんだつてバランス悪いよ。お肉も食べなきゃ」

「へいへい、今度な。じゃ、夕食にしようぜ」

「うん。いつただきまゝす」

夕食なんて普通の風景はカットさせてもらうぞ？

夕食が終わって俺たちはすることも無いので寝ることにした。

「見張りは俺がしてるからヴェルは寝てていいぞ」

「この森に魔物の気配は無いし、おにいさんも寝て大丈夫だよ？」

「そうですか。じゃ、寝ましょ寝ましょ」

そう言つて俺たちは寝袋の中で寝ることにした。

いや、怖えなあ…ヴェルはもう寝息を立てている。って早！！目開けてんのも怖いけど閉じるのも怖いな…どうしろっていうんだ。

そんな事を考えてたら、ふと視界の端に緑色の光が見えた。

あゝ、嫌な予感しかしねえ…

「行かないわけには……いかなんだろうなあ。ヴェルは、寝てるか。一応魔法掛けとくか、闇玉っと」

そう呟いてヴェルを俺の魔力で包む。新技というほどのものではない。単に魔力の壁で防御力をあげるだけだ。

「行ってくるか…ちよつと待ってるよヴェル」

そう言って俺は緑色の光を辿って歩いていった。

「ん？これは？おにいさんの魔力？どこか行ったのかな？あゝ眠っ、寝よ寝よ」

37 なんか、怖いです（後書き）

次回予告

潤「怖え〜、行きたくねえ〜。何で緑色の光について行っちゃったんだよ俺！もうやだ。帰りたい…」

38 なんか、拾いました（前書き）

調べたりしたわけじゃないので間違った知識が書かれているかもしれないので悪しからず。

38 なんか、拾いました

緑色の光の後について行ってるんだけど、一体どこに連れて行こうっていうんだ？

「ってか何でついてきちゃったんだよ俺！知らない人について行っちゃダメって教わったでしょ！あ、光だからいいか、人じゃないもんね。」

「……いやいや！よけい怖いわ！俺は幽霊みたいなのが滅茶苦茶苦手なんだよ。」

そんな事を考えていたら、不意に緑色の光が強く光った。到着か？見ると、どうやら池に辿り着いたらしい。うん、心霊スポットだ。しかも目を凝らすと、池の岸辺で座り込む1人の女性が……よし、戻ろう。

しかし身体はそれを許してくれず、だんだん女性に近づいていく。別に相手が女性だからとかではないと思うぞ？

女性の横に強制的に（ここ重要）座らされると、身体も自由になった。

「君が私が2174年の間捜し求めてた主ね？」

キラキラした目でハツラツと言われた。あれ？幽霊ってこんなに元気だっけ？

「いえ、人違いです」

俺はこの人知らないしな。ってか何年捜し続けてるんだよ。

「そんなはずはないよ、君、異質な魔力を持ってるでしょ」

「長い間洗濯しなかったから黒ずんだだけです」

「いや、黒い魔力の中でも異質って言ってるの」

俺のボケが中途半端にスルーされた：

「俺にはよく分かりませんがね。それで？俺があなたの捜し求めた人だったとして、何がしたいんですか？」

すると、幽霊はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりに…

「よくぞ聞いてくれた！」

俺が今言っただから被せるな！

「君は私を使つてた魔王の魔力に性質が似てんだよね、だから私をあげちゃおうかなって思ったわけ」

魔王に使われてただって！？使うつてどういう意味？それに私をあげちゃおうって…女の子がそんな事言うんじゃない！

「え、えゝっと、頭の整理がつかないんだが…ちよっと待っててくれ」

「どうぞ、でもなるべく早くね。私もこのままじゃつらいから」

（（おい、KY女神！））

（（何？まだ夜中なんだけど））

（（なんか俺の前に幽霊出ただけど））

（（えっ！？やめてよ、私怖い話とか苦手なんだから）。じゃ、おやすみ）

（（おい、ちよ、待てよKY女神！））

（（ZZZ））

今時珍しい寝息！ゼットゼットゼットなんて初めて聞いたわ…つて、え！？マジで寝やがった！使えなさすぎる。こりゃ降板決定だな。

「うん。なんか、整理はつかなかったけど、どうぞ進めて」

「え、いいの？まあ、こつちも時間無いから助かるけど……でね、単刀直入に言つと、魔王と同じ魔力を持つ君に私をあげようと思うの」

「それはさつきも聞いた。その、あげるっていうのはどういう意味なんだ？」

「うゝん、今の姿じゃ信じてもらえないだろうけど、実は私、魔王に使われてた武器なんだ」

「うん。信じられない。証拠は？」

武器に変身してくれば本当だって認めてやろう。

「いや、契約してもらわないと武器の姿になれないんだよね」

「契約しなきゃ見せられないって、もしかしてお前……」

「あ、やつと分かってくれた？」

「詐欺師だな！契約して俺から大金を巻き上げようって魂胆か。だが残念だったな、俺はそんな大金持ってない」

「違うわっ！私は見返りを求めないから、サッサと契約しちゃってよ」

「冗談だったんだけどな、っていうか契約っていつでもどうやってするんだ？」

「ん、契約するって言わなきゃこっちも言えないなあ」

「とつてもブラックな香り！ホントに危なくないんだろっな？」

「危なくないって、で？契約する？」

「お前の利益は？」

「使ってもらえる事かなあ」

「そもそも使うつて何なんだよ」

「あ、もう！面倒くさいな！」

そう言つと、コイツは俺に飛び込んだ。いや、隠さずに言つとキスしてきた。

咄嗟のことで何も抵抗の出来なかった俺は倒れた。

・・・倒れた拍子に舌噛んじゃったじゃねえか。

「ふう、ご馳走様。契約完了だよ？」

「うう、ファーストキスだったのに」

ニヤリと笑うコイツに涙を流す俺。

「女の子みたいな事すな！鳥肌立つわ！」

鳥肌立つつて……そこまで言わんでも。まあ、嘔泣きだからいいけど。いいのか？

「で？契約したら何が起こるんだ？」

見た感じ何も変わっていない。

「あと10秒くらい待ってて。そうすれば分かるから」
そう言った途端、コイツの身体が光り出した。

「あ、もうすぐ私の感情が無くなるけど、絶対売らないでね。って
か持ち主が君じゃなくなつた瞬間、私はこの姿に戻るからそのつもりで」

そう言い残すと、コイツは消えた。

「何だっただんだ？夢でも見てたのかな」

戻って寝ようと思い、立った瞬間、女性が居た場所で何かが目の端に入った。

近寄って見ると、

「剣、だな」

刀身が黒く美しい造形だが、目に見えるほど禍々しいオーラを放つ西洋の剣がそこにはあった。・・・取扱説明書付きで。

せっかくのオーラが台無しだぞ。

「うわゝ、手に取りたくねえ…でもアイツが言ってたのってコレのことだよな」

放置しておくわけにもいかないので、とりあえず握ってみる。

ほう、これは

「剣、だな」

何を当たり前な事言ってるって？いやいや、だって俺この世界に来るまで剣なんて触ったこと無いもん。確かに握ってシックリくるけどさ、剣ってそういう物かもしれないじゃん。

しかし丁寧に使われていたのか、刀身には血脂の跡ひとつない。

初心者 of 俺が見る限りでは、形状は片手半剣、いわゆるバスタードソードだ。刃渡りは1.5メートルくらいか…って長っ！魔王はどんだけデカかったんだよ！よくこんなの持てるな俺。ん？そういえば重さを感じないな…まあ、いいや。

バスタードソードの特徴でもある狭い刃には金色の文字で何か書かれている。いかにも魔剣って感じだな。

それにこの剣、

「魔力がよく通るな」

魔王仕様ってやつか？

そういえば説明書があつたっけか？一応読んどくか。

「って、もう時間か……んじゃ、説明は次回だな。ちゃんとバスタードソードについて勉強しとけよ？」

って、何独り言言っちゃってるんだ俺。

38 なんか、拾いました（後書き）

次回予告

潤「今回は説明回か…面倒くさいな。やっぱり魔剣なんてありませんでした、って感じになんないかな。え？ならないつて？はあ」

39 なんか、涙目です（前書き）

久しぶりの本編です。

39 なんか、涙目です

「んじゃ、説明書を読みますか」

何で説明口調なんだ？俺。

《神魔剣オルギヌス 取扱説明書》

お買い上げありがとうございます。本品は呪いの武器につき、返品が出来ませんので、予めご了承下さい。

尚、本品は吸呪性に優れております故、意思を持つもの（人や魔物など）を斬りつけますと、より一層扱う者を選ぶ剣となりますので、代々受け継いでいこうとお考えのお客様はあまり意思を持つものを斬りつけないようご注意下さい。

（保管方法や保証期間など、どうでもいい事なので省略）

神魔剣オルギヌスは魔剣ですので、黒魔力を注ぎ、一定の行動をする事で剣技が扱えます。

・N-001

剣を地面に突き刺し、魔力を注ぐ事で発動します。剣の周囲を魔力を注いだ分だけ広がる漆黒の球体で、相手の視界を奪います。発動者はこの限りではないのでご安心下さい。

・N-002

魔力を注ぎ、剣を前に突く事で発動します。切っ先の方向へ螺旋状に進む黒い魔力砲を生み出します。魔力を注いだ分だけ魔力砲は太くなります。

以上が剣自体に備わっている剣技となります。

では、今後とも我が社の通信販売をご贖頂に。

だそうだ。魔剣みたいなのってダンジョンとかにあるものかと思
ってたわ…通販で買えんのな。

しかも魔王、絶対人斬りまくっただろ。滅茶苦茶邪悪なオーラを
感じるんだけど…

「とりあえずは、儲けたって認識でいいのかな？」

俺武器になるもの黒刀しかないし。

「さてと、用事も終わったみたいだし、戻るか」

今は夜中の3時頃だ、多分。説明書読むのに時間が掛かったから
な。

俺は神魔剣とやらを持って、もと来た道を歩いていった。

ヴェルの居るところまで戻ると（事前にヴェルに掛けておいた闇
玉のおかげで魔力を辿って戻れた）緑色の光について行った時と特
に変わったことは無さそうだった。

俺はヴェルに掛けた闇玉を解き、起こさないように静かに寝っ転
がった。

「ん〜！朝かあ」

朝日が眩しく、目を細めながら伸びをするヴェル。

「おはようさん、よく寝れたか？」

「うん、っっておにいさんどうしたの!？」

「どうしたって何が？」

寝癖でも付いているんだろうか。

「いや、隈がすごいよ!」

「ああ、昨日は寝られなくてな…」

と、俺は昨夜にあった事をヴェルに話した。ああ、もちろん武器

にキスされたなんて事は言っていないぜ？

「やっぱり……だからあたしに魔法を掛けたんだ」

「そういうこと。んじゃ、この剣の事は道中話し合うとして、朝ご飯にするか？」

「うん！お腹と背中がこんにちはだよ、朝ご飯は何にするの？」

小学生かつ！？いや、今どきお腹と背中がこんにちはなんて幼稚園児レベルだよ！

「そうだな…昨日の肉がまだ余ってるからヴェルはそれでいいか？」

「あたしはいいけど、おにさんはどうするの？野菜は昨日食べきっちゃったよね？」

別に俺が大食いなわけじゃないぞ？野菜は日持ちしないかなって思っただけだ。

「缶詰めがあるから俺の分は大丈夫だな。んじゃ、とつと食べてレーテルンに行きますか」

「うん、いったただっきまゝす！」

朝食を終えた俺たちは、魔物との戦闘もなく、昼過ぎには森を抜けた。

「それにしても、旅をしてから今まで1匹も魔物に出くわさないな」

「アハハ、何でだろうね…」

何か物凄く白々しい返しがきた。ヴェルが何かしてるのか？まあ、敢えて追求はすまい。

「魔物が少ないのはいい事だから気にしないでいいか。ところでヴェル、レーテルンまではあとの位なんだ？」

「うん、このペースで行くと、明日には着くかな」

期限は1ヶ月、今日がハリンテ城を出て25日だからちょうどいいか。

「んじゃ、黙々と歩いていきますか」

「10分後」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「20分後」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「30分後」

「・・・もうダメだ！黙々となんて歩いてられねえよ」

「限界早っ！！まだ30分位しか経ってないよ！？」

おっと、ヴェルに突っ込まれちゃった。俺の横を歩くヴェルは何だか得意げな顔をしてるし……って、

「森に入ってから俺のローブに入らないけど、大丈夫なのか？」

「うん、もう尾行されてる気配は無いし大丈夫だよ。ありがとね、おにいさん」

今まで尾行されてたのか……全然気付かなかった。俺が気付かないなんてメイドさんレベルか……厄介なのに追われてるな。

「いやいや、気にすんな。ヴェルの耳も堪能できたことだしな」

「まったく、おにいさんったら」

ハハハ、と俺たちは笑いあって、歩き続けた。え？平和すぎるって？安全第一、平和が一番ってな、H A H A H A

歩き続けること更に10時間、俺たちはレーテルンに入って初めての村、ピテルンに到着した。

何か可愛い名前だな、ピテルン。

「ちょうど夕方だし、今日はここに泊まるか」

「そうだね、じゃあ宿屋を探そうか」

「その前に1つ聞きたいんだが、レーテルンの貨幣を俺は持つてないんだが…」

「ん？この世界はどの国でもワロ貨幣で統一されてるよ？おにいさんの世界では色んな貨幣があったの？」

「ああ、国によって独自の貨幣を使う国が多かったな」

「この世界は元の世界のEUみたいなものって認識でいいのか？国を往来するのにパスポートとかも要らないし…まあ、便利だからいいけど。」

「へー、不便だね」

「まあ、俺はそれが普通だったから不便に感じなかったけどな。さて、サッサと宿をとっちゃうか」

「2部屋、それぞれ1泊でよろしいでしょうか」

宿屋の受付のスケルトンのお兄さん（お姉さんだったらゴメンナサイ）に俺とヴェルの部屋をとってもらった。

「はい、大丈夫です」

「食事は付きませんので、各自調達してください」
「分かりました」

「さて、じゃあ食事をとるついでに村を見て回りますか」

自分たちの部屋を確認して、俺たちは再び宿屋の玄関で待ち合わせた。

「この村はあたしも初めて来たからね」

そう言っただけ俺たちは宿の外へとくりだした。

よし、村を散策した結果から報告しよう。

・・・何にもねえええ！！確かに規模の小さい村だったけど、宿

屋1軒に食事処2軒、民家13軒の村って…武器屋も無いがどうやって魔物が襲ってきた時に撃退するんだ？

ま、そんな事より夕飯にしよう。

「えーっと、ヴェルは普通の定食屋と虫をふんだんに使った定食屋、どっちがいい？」

ちなみに今俺は涙目だ。理由は…察してくれ。

「おにいさん…あたしだって虫なんて食べたくないよ。普通の定食屋にしよう？ほら、涙拭いて」

これは気を使ってもらえたのか？それともやっぱり虫をたべるなんて特殊なのか？

俺は涙を拭いて普通（ここ大事）の定食屋に入ってしまった。

39 なんか、涙目です（後書き）

次回予告

潤「虫つたつて食えるのもあるけどさ……やっぱ俺は無理。あ、別に虫を食べるの事を批判してるわけじゃないからな。好みの相違つてヤツだ。次回はいいよレーテルンに到着する！……かも」

ただの、番外編です（クリスマス編1）（前書き）

なんとかクリスマスに滑り込みました。

いきなり話が変わるのは許してください…

ただの、番外編です（クリスマス編1）

「クリスマス、とな？」

「はい、クリスマスです」

俺は今日が元居た世界での12月25日に当たる日だと聞き、女王やメイドさん、セレンが揃う夕食にこの話題を切り出した。

「この世界にはそんなの無いけど、どんな行事なの？」

「うーん、街が綺麗なイルミネーションで飾られて、皆がハッピーになる日？ ああ、あとよい子にはサンタクロースからプレゼントが貰える」

間違ってはいないはず、間違っては。

「サンタクロース？ プレゼントを配るなんて物好きな奴じゃの」

「子供好きなんじゃないですか？」

適当だな俺。

女王は少し悩む素振りをみせて、何か決めたようだ。

「よし、妾がサンタクロースになって国民に幸せを届けようぞ」

おおー！ 斬新な思いつき！ まあ、こっちにサンタクロースはいないだろうからな…

「メイドよ、……………」

「はい、承知いたしました」

女王とメイドさんで何か打ち合わせをしたようだ。

「ところでジュン、そのサンタクロースってどんな人なの？」

「ああ、サンタクロースは赤い服を着て、プレゼントを入れた袋を担いだ優しそうなおじいさん？」

「何で疑問文なのよ」

「誰も見たことはないからな、あくまで俺の想像だ」

「ふーん、変な人なのねサンタクロースって」

「ハハッ、まあ、確かにサンタクロースを知らない人が聞いたら変な話かもな」

セレンの尤もな言葉に思わず笑みが零れる。

夜7時になり、国民は全員広場に集められた。

この広場、滅茶苦茶広いな…だいたい5000万人位の人が集まれるって…

俺がそんな事を考えていたら、いつの間にか女王が全体を見渡せる台の上に立っていた。

「今日はよく集まってくれた。今日皆を呼び出したのは他でもない、クリスマスを開催するためじゃ」

クリスマス？何だそりゃ。というような声があちこちから聞こえる。

「クリスマスというのは、彩られた街の中でプレゼントが貰える祭りの事じゃ。今日は皆が集まっている間にメイドが皆の家にプレゼントを置いてきた。わかりにくい場所に隠しておるから探すとよい」
いくら何でも速すぎないか？何者だあのメイド、鍵をかけたはずなんだが、というような声がチャホラ聞こえる。

メイドさんをただの人と思っちゃいけないぜ？俺もよく知らないけど…

「うむ、ではクリスマス開始じゃ！各々の家を探すがよい、その者の最も欲する物が置いてあるはずじゃ」

そう宣言すると、街に一齐に光（あれは魔法の光だな…）が溢れ、街を彩った。

「綺麗…」

とセレンが思わずといった感じで呟く。

「ああ、魔法ってこんな使い方もあったんだな」

そう言う俺も感心している。

「ほれ、お主らも自分の部屋でプレゼントを探さぬか、せっかくの祭りじゃぞ？もっと楽しめ」

女王が八重歯を見せながら笑いかける。

「えっ！？プレゼントって私たちにもあるんですか？」

「当たり前じゃろう、お主らはもう我が国の民じゃ」

ありがたいお言葉で……だけどそんな簡単に国民にしちゃうといつか滅びるぞ。ならず者が入ってこないとも限らないわけだし。

まあ、クリスマスにこんな事考えるのは無粋ってやつか？

「そりやどうも。んじゃ、部屋でプレゼント探しに行きますか」

って事でやってきました俺の部屋。せっかくだから探してみますか。

「前と変わった所は……ないか」

流石メイドさんだな。ぬかりがない。

「楽に見つけられるほどプレゼントは甘くないってか」

いいぜ、やってやる。クリスマスの趣旨と違う気がするがこの際気にしない。

机の下及び裏、ないか。

クローゼットの中、やっぱりない。

ベッドの中も、ないな。

「見つかりましたでしょうか？」

「おおっ！ビックリした〜、驚かさないで下さいよメイドさん」

プレゼントを隠した張本人、メイドさんのご登場。

「その様子だとまだのようですね。ヒントを差し上げましょうか？」

「ヒントがないと分からないような難しい場所なんですか？」

「ジュン様のプレゼントのみ、わたくしが全力を以て隠しましたので、ヒント無しでは難しいかと」

メイドさああん！何で俺だけ難易度最高なの！？

「すぐに見つけられてはこちらが面白くないからです」

また心を読んだし……

「メイドさんの全力じゃヒント無しでは見つかりませんよ。ヒント

ください」

メイドさんはいつもの無表情で、

「ヒントは、、この部屋にプレゼントがあります」

と言った。

うん。全然ヒントになってない。部屋にあることは分かってるんだけどな。

「もうちょっと分かりやすいヒントとかは…」

「あとはご自分でお探し下さい。では」

そう言つとメイドさんは部屋から出てしまった。

結局ヒントは貰えず、か。あのメイドさん、絶対俺の事嫌いだろ…

「プレゼント探し、再開しますか」

このまま見つからないのも癪だしな。

闇雲に探しても見つからないだろう。メイドさんの隠しそうな所は…

そういえば女王は分かりにくい場所に隠してあるって言ったよな。って事はプレゼントの隠し場所は女王も知ってるのか。

「女王が隠しそうな場所を探せと」

女王なら新参者の俺たちに国の特色を知ってもらいたいはずだ。

そこまで考えてるかは些か疑問だが。

「この国の特色……ユリナントよりもテレビが普及してるか？」

そう思いテレビの周りを探してみるが、ない。

いや、女王は俺が異世界人って事を知っている。隠すとしたらこの世界にしか無いもの。

……あるじゃないか、魔法の本が。

本棚にしまつてある魔法の本を出してみる。

あった。『クリスマス』と書かれた包装紙が魔法の本の奥に入っていた。

「これか」

ティッシュの箱くらいの大ささの包みだ。重さは…重くもなく軽くもない、手頃な感じだ。

「プレゼントって事は開けて良いんだよな？」

誰もいるはずのない部屋で誰とはなしに呟く。

まあ、開けるしかないよな…

包装紙を破り箱を開けると、

「携帯電話か」

黒い折りたたみ式の携帯電話が入っていた。ちゃんと説明書と保証書の入った安心設計だ。

俺の一番欲しいものの、か。確かに当たってるかな。あれば便利だし。

そういえば女王と初めて会った時もテレビやら携帯電話やらで泣きじゃくってたんだっけ……

おっと、懐かしんでる場合じゃない。俺もやる事があるからな。

「女王様、携帯電話ありがとうございます」

俺は今、女王の部屋に入れてもらっている。

「うむ、見つかったようじゃの。勝手に選んでしまったが良かったかの？」

「ええ、とても気に入りました。それで、よかつたらこちらからもプレゼントを贈りたいんですが」

「なんじゃ？妾にもくれるのか」

女王が興味津々に顔を近づけてくる。女王といってもまだ俺と同じ子供、プレゼントを貰えると聞いて悪い気はしないんだろう。

「もちろんです。クリスマスは皆に平等ですから。・・・ちよつと目を閉じててください」

俺がそう言っていると女王は素直に目を閉じた。ちよつとは疑ったりし

ないものかね…

「・・・はい、もう目を開けて良いですよ」

その言葉と同時に女王は目を開け、自分の首元を見た。

俺がプレゼントしたのはネックレスだ。女王からすれば安物に見えないかもしれないが、あまり気の利いたプレゼントが思いつかなかったのでネックレスで我慢して貰うことにした。

「この首飾りを妾にか？」

ネックレスと俺を交互に見る女王。

「はい。安物で申し訳ありませんが、女王様に似合うかなと思いついて…これが俺なりのプレゼントです」

「安物なんて、そんな事はない！妾は今、とても嬉しいぞ。こんなに心の籠もったプレゼントなんて初めてじゃ」

女王はニコニコしながらネックレスを抱えている。うん、微笑ましいな。

「では、俺はこれで」

「うむ。感謝するぞ」

そんなやりとりをして部屋を出て行った。

ただの、番外編です（クリスマス編1）（後書き）

これは完全に気分で書いたもので、1時間掛けずに書いてしまったものです。

1月の半ば頃に消そうと思ってるのでご安心下さい。

万が一、残して欲しい。また、クリスマス編の続きが気になるという方が1人でもいらっしゃったらご連絡ください。何とかします（笑）

ただの、番外編です（クリスマス編2）（前書き）

クリスマスの続きです。

クリスマスが終わってからの投稿ですが、許してください。

ただの、番外編です（クリスマス編2）

「メイドさん、プレゼント見つめましたよ」

そう言つて携帯電話をメイドさんに見せる。

「あの場所が分かりましたか、跡は残さなかったはずなんですが…
悔しいです」

そうは言いつつも、まったく表情を変化させていないメイドさん。
「あんまり悔しがってるようには見えませんが…」と、本題を忘れるところだった。メイドさんに会いに来たのは、これを渡そうと思つたからです」

俺はメイドさんにメイドが使いそうなフリフリのついたカチューシャをプレゼントした。

実はこのメイドさん、服はメイドのそれだが頭に例のカチューシャをしていないのだ。

「何ですか？この恥ずかしい曲がつた棒は」

「あれ？この世界にカチューシャって無いんですか？」

まあ、元の世界でもあんまり見なかったけどね。

「このような形状の棒は初めて見ます。どのように使うのですか？」
表情には現れないが、興味を持ってもらえたようだ。

「一言余計です」

だから心を読まないでつて…

「はあ、カチューシャはですね、こうやって頭に付けるものなんですよ」

そう言つて俺はカチューシャを頭に付ける。

「……………」

「……………」

「……よくお似合いで…」

「ダウトオオオ！！別に似合わないのは分かってますから、変に気を使わないでください。もともとカチューシャは女物だし」

「なるほど、ジュン様にはそんなご趣味があつたのですね」

納得がいったという感じで言っていた。

「いやいや、違います！断じてそんな趣味は持ってません！付け方が分からないであろうメイドさんの為に実演しただけです」

「分かつております。何を当たり前な事を言ってるんですか？」

何か平然と返された…え？これって俺が悪いの？俺の勘違いだったの？

「はい、勘違いでございます」

もう心を読まれた事に対して突っ込まないぞ。なんせメイドさんだからな。

「はあ、もういいですよ。んじゃ、俺はまだ用事があるんで」

そう言つて俺はその場から離れた。

「プレゼント、ですか…人から貰うのはなかなか嬉しいものですね」

そう呟いてそつと自分の頭にカチューシャをかけたのは、きっと誰も知らないだろう。

「ヴェル、居るか？」

メイドさんにカチューシャを渡した俺はヴェルにプレゼントを渡すため、庭に出た。

「おにさんから声を掛けてくるなんて珍しいね、どうしたのさ」
虚空から突然声が聞こえてきたかと思つたら、俺の目の前にヴェルが現れた。

毎回思うが、どうやってんだ？

「今、女王様が国民にプレゼントをあげたのは知ってるよな？」

「うん、あの場には居なかったけど、皆がプレゼント探しに夢中なのは気付いてるよ？」

ヴェルは広場には居なかったのか、何でだ？まあ、聞かない方が

良さそうだな。うん、俺大人。

「それで俺もヴェルにプレゼントをあげようと思うんだ」

「え？ ホント？？ なにくれんの？？」

ヴェルは飼い主に遊んでもらう犬のように（実際は狼だが）目をきらきらさせて俺を見てきた。

「実はな、服を買おうかと思ったんだがサイズが分からない上にどんなデザインが好きなのか分からなかったから、今度一緒に買いに行かないか？」

「うん！ 約束だよ」

「おう！ 約束だ。いつ買いに行くかはまた連絡するから」

「楽しみにしてるよ」

俺は手を振ってそれに応え、城の中へと戻っていった。
まだまだやる事はあるからな。

「セレン？？ 入っても大丈夫か？」

俺はセレンの部屋の前まできて扉をノックする。

「ジュン？ 入っていいわよ」

中から声がして、入室の許可を得る。

「私の部屋に来たってことは、もう女王様からのプレゼントは見つかったの？」

「ああ、バッチリだ。俺は携帯電話がプレゼントだったんだがセレンはどうだった？」

「へー、良かったじゃない。私はこの剣だったわ」

そう言っただけに見せてきたのは、もとの世界でいうフランヴェルジェという剣によく似ていた。刀身が波打っていて、傷口を治りにくくすることが特徴の恐ろしい剣だ。

「クリスマスに武器をプレゼントって… しかも女の子に」
無粋な気がしてならないな。

「そう？私は気に入ったわよ？今までのユリナント兵が使ってた大量生産の安物じゃないし」

「まあ、本人が気に入ったのなら良いんだけどさ」

「で？ジューンは何しにここに來たのよ？」

セレンが剣を壁に立て掛けて尋ねてくる。

「ああ、そうそう。今日はクリスマスなんで俺からもセレンにプレゼントをあげようと思ってね。はい、どうぞ」

俺はそう言つてセレンにブーツを手渡す。

ブーツって言つてもヒールの高いような物じゃなく、動きやすさを考えてあるようなブーツだ。

「な、なによ突然。変なジューンね」

そうは言いつつもブーツを受け取るセレン。

「照れるな照れるな」

「て、照れてなんかいないわよ！」

だんだん顔が赤くなつていくセレン。分かりやすいな…

「はいはい、んで、そのブーツだけど、風の魔力と俺の黒い魔力と一緒に付与しといたから機動性は今の靴よりも良いと思う」

「そ、そう。……ありがとう」

真つ赤になりながら俺に礼を言うセレン。プレゼントされただけでこんなに赤くなるもんなのか？

「どういたしまして。んじゃ、俺はこの辺で」

そう言つてセレンの部屋から出ていく俺。え？もうプレゼントは渡し終えたんじゃないかって？あと1人居るだろう。

「シリチナさん、メリークリスマスです」

そうだよ、瞬息剣シリチナだよ。この人にもお世話になったからな。プレゼントを渡す相手が必ずしも女性とは限らないぜ？

「ああ、ジューン君。なんだいそのメリークリスマスというのは？」

ああ、そういえばクリスマスについては言つたけど、メリークリ

スマスとはこの世界では言っていなかったわけ？

「えーっと、クリスマスおめでとうって感じです」

「へー、じゃ、メリークリスマスジュン君」

見た目オッサンなシリチナがイケメンボイスで言ってくる。なんかややこしいな…

「ありがとうございます。で、早速ですがシリチナさん、プレゼントです。どうぞ」

そう言って俺はシリチナに剣を渡した。

まあ、騎士（軍人）だし、剣でもいいだろ。

「これは？変わった色の剣だね」

俺が渡したのは緑のロングソード。これは

「癒しの力が付与されていて、剣の腹を傷にあてると傷が治るんです。騎士団長ともなれば必要になるでしょう？」

怪我をするのは必ずしも自分とは限らないわけだし。

「なるほど、ありがとうございます。大切にに使わせてもらうよ」

「では、俺はこれで」

そう言って俺は城の自分の部屋へと戻った。

「すっかり懐が寒くなっちゃったな」

ヴェルの服を買うことも考えると、ギルドの依頼で貯めた金が無くなっちゃうな。まあ、たまにはこんなのもいいかな。

「はあ、なんか疲れたな…寝よ寝よ」

そう独り言を呟いて、ベッドに潜った。

《とある2人の会話》

「サンタクロースとしてじゃなく、友人としてプレゼントを渡すのはアリか？」

「はい、アリだと思います。ところで、わたくしも、1人の友人

にプレゼントを贈りたいのですが、これもアリでございましょうか？」

「アリじゃの」

そう言って笑う1人と無表情な1人の会話。

《とある庭での独り言》

「おにいさん、何が欲しいかな。人にプレゼントを渡すなんて初めてだ、楽しみだな」

そう言って虚空に消えた少女の独り言。

《とある部屋での独り言》

「ジューンは何が好きだったかしら。べ、別に私がプレゼントを渡すのはお返しとしての意味しかないからね！って、1人で何言ってるんだろ私」

そう言って物思いに耽る少女の独り言。

《とある練習場での独り言》

「プレゼントなんて何年ぶりくらいだろうか。ふ、オレも年をとったんだな。さて、ちよつと城下に行ってくるか」

そう言って城の外へと向かう男性の独り言。

その晩、潤の枕元にはプレゼントが5つ置いてあったとさ...

40 なんか、ギャップがあります（前書き）

ちよつとずつ明かされていきます。何がとは言いませんが…

40 なんか、ギャップがあります

俺たちは普通の（ちゃんとチエックしたか？）定食屋で食事を済ませ、何事もなく、翌日出発した。

歩くこと2時間、レーテルンの首都、ミューレンに着いた。

ここが邪神王サナトスの居る場所か……なんて言うか、ラスボスのいる魔王城みたいだな。まだ昼間だっていうのに空は星がでているものの真っ暗で、住民は魔族やスケルトン、ゾンビばかりが目につく。街の中心にある城は壁が黒く、窓らしい窓が見当たらない。

「ヴェル、割とマジで帰りたいんだけど」

「あたしもこの街は好きじゃないんだから、ほら一緒に行こ？」

ヴェルに手を引かれて俺は街の中へと入っていった。

もしかして俺って今非常に情けない？

「ハリンテ国からサナトス様に国書を預かっているんですけど」

なるべく住民や風景を見ないようにして、一目散に城を目指し、今は門番に話を通している。

「ジユン殿で間違いはないか？」

ちなみに門番はスケルトンだ。めっちゃ怖いぜ。今も膝がガクガクしてる……

「か、勘違いしないでよね！これは武者震いなんだからね！」

「何を言っとるんだ。ジユン殿で間違いはないかと聞いているんだ」

おっと、つい口に出しちゃったぜ。恥ずかしい。

「はい、潤で間違いありません」

「よし、では城の中に入ったらまっすぐ進み、突き当たりで待っているといい」

「分かりました。あ、連れがいるんですが一緒に入っても大丈夫ですか？」

「その者の身分証明ができれば大丈夫だが、その連れはどこにいる？」

「いや、どこって、さっきから俺の後ろに……って、あれ？ヴェルはどこにいった？」

門番と話す直前までは俺の後ろにいたはずなのに…どうなってるんだ？

「訳の分からない事を言っていないでサッサと入りなさい」

門番にそう言われ、納得出来ないながらも城の中へと入っていった。

さて、言われたとおりまっすぐ進み、突き当たりで待機していると不意に目の前の壁が開いた。

「ジュン殿ですね、どうぞお乗りください。サナトス様のお部屋まで案内させていただきます」

箱状の部屋の中から魔族の女性が現れて俺に話し掛けた。

「よろしく願います」

そう言っただけはその部屋に入った。それを確認すると、女性は壁に取りつけられたボタンを押して、部屋が上昇した。

これってもしかしてエレベーター…いや、何でもない。もう俺は気にしないんだ。別にファンタジーな世界に科学的な物があってもいいじゃないか。

チンツという百貨店でなりそうな音とともにドアが開いた。

「この廊下の突き当たりにサナトス様のお部屋があります。どうぞ、実りのある話が出来ますよう」

一礼して俺を見送る女性。

実りのある話って、手紙を届けて終わりじゃないのか？

「分かりました。ありがとうございます」

そう言っただけは廊下を歩いていった。

部屋の前に着いたはいいけど、威圧感っていうか存在感っていうかが半端ねえ！！怖い人だったらどうしよう。いきなり戦いとか挑まれないよな？

あゝ、サツサと手紙渡してサツサと帰ろう。

「サナトス様、ジュンです。ハリンテ国から国書を持って参りました」

ノックをして用件を述べる。機嫌を損ねるような事言わなかったよな？俺。

「あ、入っていいよ」

中から洪い声で返事が聞こえる。

「ってか、え？俺の聞き間違えか？めっちゃくちゃ軽い返事が聞こえたよな」

「し、失礼します」

そう言って部屋の中に入ると、サナトスと思われる5メートル位あるつかという巨大なスケルトンとその隣にヴェルが居た。

「ってヴェル！？いつの間に城に入ってたの？」

「あ、おにいさん。思ったより遅かったね」

「急にヴェルが居なくなつて戸惑つてたからな」

「こいつは転移魔法でいきなり現れてさゝ、ワシもビックリしちゃったよ」

骨をカタカタ鳴らして笑っている。

サナトスってこんなにフランクなのか？

「ちよつとオジサンに用事があつてね、先に行かせてもらったの」
サナトスをオジサンって…

「サ、サナトス様…」

「あ、サナトスでいいよ」

「い、いや、そういうわけには」

王族でプロミネントギルダーでもある相手にそんな事言えねえよ。

「大丈夫だよおにいさん、オジサンはこんな姿だけど優しい人だから」

ヴェル、お前この人苦手って言うてたじゃねえか。

「いきなり呼び捨ては流石に俺の方が無理があるので、サナトスさんでよろしいですか？」

「まあ、いつか。好きなように呼んで」

「では、サナトスさん、これがハリンテ国からの国書になります」

俺はサナトスに女王から預かった国書を渡す。

「サンキュー、どれどれ…」

サナトスは受け取った手紙を早速読み出した。

「ふゝん、やっぱりか。ジュン、手紙を持ってきてくれてありがとう。ところで、中身は見てみた？」

「いえ、滅相もない」

国書なんて盗み見れないだろ。

「手紙にはね、ジュンが今代の魔王と書かれている」

あっさりと重要なこと漏らしたア！

「えっ！？ いえいえ、俺が魔王だなんて」

「うゝん、でもジュンから感じる黒い魔力は普通の悪魔の魔力とは雰囲気が違うし、それにその背中に背負った魔剣は先代魔王が使ってたものと特徴が一致するんだよね」

そっついえばこの剣をもらった時にそんな事言ってたっけ？

「俺が魔王だとして、何をすれば良いんですか？」

面倒事なんてゴメンだ。

「恐らく、勇者が現れて魔王であるジュンを倒しに来るだろうね」

面倒事キタ〜！

「何で勇者が現れるんですか？」

「これは本当か嘘か分からないんだけど、どうやらバーラン共和国が勇者を召喚する特別魔法を持ってるらしくて、魔王を倒した勇者を召喚した国として他の国よりも優位に立とうとしているらしい」
「腐ってますね」

「まったくだ」

はあ、と溜め息をついてイスの背もたれに寄りかかるサナトス。

「そういえばオジサン、この国に入った頃に魔天剣がちよっかい出てきたんだけど、どうにかしてよ」

ヴェルが思い出したように言い出した。

「アイツもまだ若いからな、遊びたい年頃なんですよ」

「オジサンから見たらみんな若くなっちゃうよ」

「そりゃそうだ」

ハハハハハ、と笑いあう2人。

仲良いじゃねえか。

「あ、もうこんな時間だ。おにいさん、早く帰ないと夜までにピテルンに着かなくなっちゃうよ?」

「そうだな、ではサナトスさん俺たちはこれで」

「夕食くらい食べていきなよ。ハリンガルまではワシが転移魔法を使って返してあげるから」

「ん、ならいいかな。どう?おにいさん」

「あ、ああ。では、お言葉に甘えて」

断るのは何か悪いしな。

「そう、よかった。んじゃ、早速夕食にしちゃおっか?食堂に行くからついて来て」

そう言っでイスから立ち上がり廊下に向かって歩き出すサナトス。うわ、やつは滅茶苦茶デカいな。

「行こ?おにいさん」

おう、と応えてサナトスについていく俺たち。

……夕食が虫料理でないことを切にねがうね。

40 なんか、ギャップがあります（後書き）

次回予告

潤「今回は夕食が何かによって俺のモチベーションが変わってくるな…テンションの低い文章が読みたいなら夕食が虫料理である事を祈ってくれ」

41 なんか、どうなんでしょう(前書き)

今年最後になるであろう投稿。

みなさん今年、といっても11月からですか？今年はありがとう
ございました。

どうぞ来年もよろしくお願いします。

41 なんか、どうなんでしょう

さて、夕食が虫料理じゃなかったからアゲアゲでいくぜー！ハハハハッ！

・・・え？これはこれでウザイって？じゃ、やめます。

サナトス、ヴェル、俺の3人で和やかな雰囲気の中進んだ夕食は1時間ほど続いた。その後、ヴェルが帰るとサナトスに伝え、転移魔法でハリンガルの入り口まで送ってもらった。

「そっぴやヴェル、サナトスの事苦手とか言ってなかったっけ？」

「うーん、優しいし良い人なんだけど見た目が怖くて・・・」

「なるほど、それについては同感だ」

なんせ俺が3人分くらいのデカさの骸骨だからな。

「それにあたしやおにいさんには優しくかったけど、気に入らない人に対しては迷いなく命を奪い取るからね・・・プロミネントギルダの中でも1番強いから、オジサンを止められる人なんていないし」

「いかにも強そうだったけど、あの人が1番か」

「戦場でオジサンが1歩進むと100人の命が散るって言われた程だしね」

もはや別格だな・・・

「そりゃ恐ろしい。あ、俺はこのまま城に戻ろうかと思うけど、ヴェルはどうする？」

するとヴェルは一瞬の迷いを見せ、次の瞬間には決心したように「ちよつとあたしの話を聞いてくれる？」

と、尋ねてきた。

「ん？おう、いいよ」

何の話だ？

「おにいさん、あたしの名前が何だか分かる？」

「当たり前じゃないか、ヴェルの名前はノルティ・タリス。俺がプ

ロミネントギルダーと出会うことを避けていると知って、嫌われないヴェルは名前を偽って友達としての対等な付き合いを目指した」

「・・・知ってたの？」

「おう、確信したのは魔天剣とかいうプロミネントギルダーと戦った時だけだな」

むしろあれだけヒントがあれば嫌でも気付いちまうだろ。

「そう、あたしがプロミネントギルダーかもって思ったのはいつから？」

「最初に城の庭で会ったときからだな、俺はこう見えて気配察知能力に優れててな、大方の人の気配には気付くんだ。だがヴェルには気付かなかった。つまりは相当な手練れ、もしくはプロミネントギルダーの上位にしか使えないらしい転移魔法の使い手って事だからな」

「なるほどね、おにいさん頭いいね。で？どうする？あたしとは関わらないようにする？」

はあ、まったく

「セレンの時といい今回といい、何でお前らは本当の事を俺が聞いたからって、突き放すと思ってるんだ？」

そこで俺は一息おいて

「これからもよろしく頼むぜ？俺の友人、ヴェル」

一息おいた方がカッコいいだろ？え？そうでもない？さいですか。

「おにいさん：これからもよろしく！じゃねっ！」

そう言つと、姿が揺らいで消えていった。

「うん、子供は元気が1番」

と、訳もなく爺臭い事を言つて俺は城へと向かった。

「無事国書を届けられたようじゃの。苦勞をかけた」

ここは謁見の間。俺、女王、メイドさんが揃っている。

「いえ、行きも心強い味方がいましたから、帰りはサナトスさんに転移魔法で送ってもらったので」

「ほう、あのサナトスが。いや、それよりも心強い味方とはノルティの事かの？」

「やはりあなたの方でしたか。ヴェ、いやノルティの言つてた追っ手とは。アイツが嫌がつてるんで止めていただだけませんか？」

「それは……無理なぞ……」

ガキンッ！！

そんな音を伴って俺の魔剣オルギヌスとメイドさんのフォークが交差する。

フォークって、そんな物で俺の斬撃を防いだとか俺の心が立ち直れないです。はい。

「武器をお収めください。ジュン様」

ぎらついた目で俺を見てくる。

怖っ！思わず武器を収めなくなっちまう。

「そういうわけにはいかなくてな。前世と同じ過ちは繰り返すつもりはない」

前世についてはあまり聞くなよ？色々あるんだよ。

「前世に何があったか知らぬが、そこまで言うならいいじやろう。

条件を満たせばもうノルティを探すことはしない」

「条件つてのは？」

「お主に力が無ければそんな綺麗事に意味はない。シリチナと戦い勝つてみせよ」

「なるほど、そうしましょう」

何で強気なの？俺。勝てる要素ないよね？

「よく分からないが、オレとジュン君の模擬戦という事でいいのかな？」

南側の庭に呼び出され、行くとそこにはシリチナと女王とメイド

さんが立っていた。

「え？まあ、はい」

模擬戦なんて聞こえは良いが、要は俺とシリチナのガチバトルだろ？やりたくね。

「ルールとしましては、制限時間10分、魔法での攻撃は許可いたしません。しかし特別魔法はその限りではないので、存分にお使いください。勝利の条件としましてはどちらかの戦闘不能が認められた時となります。なお、引き分けの場合はジウン様の負けとなります」

「えっ！？引き分けでも俺の負けなんですか？」

相手はプロミネントギルダーなのに。

「シリチナ様はプロミネントギルダーでも実力は下から2番目、第9位となりますので、少なくともシリチナ様に勝てないようでは、これからノルティ様を守るのは無理かと」

「はあ、分かりました」

そう言って魔剣オルギヌスを持って前に出る。

「シリチナ、手を抜くでないぞ？」

「承知しております」

そう言ってシリチナも前に出る。

「では、始めてください」

静かに言い放ったメイドさん。それと同時に身体能力強化をかけ、魔剣に魔力を込めた。

さすが魔王の魔剣。黒刀より扱いやすいぜ。

「黒鴉！」

通常の3倍の速度で赤い、いや黒い魔力が飛んでいく。しかし

「遅い、遅すぎる」

そう言ってシリチナは突っ立ったまま（恐らく目に見えないスピードで剣を振っているんだろう）黒鴉を散らした。

「くそっ、闇世界！」

って事で魔剣の取扱説明書に書いてあった剣技『N・001』だ。俺の厨二力を総動員して闇世界と名付けた。

「くっ、なんだこの技はっ！」

効いたみたいだな、良かった良かった。

「食らえ、闇針」

俺からはシリチナがよく見えるので、楽に狙える。ズドドドツと音がして、シリチナを土煙が覆った。

「やったか？」

あれ？これ、やってないフラグじゃね？

「はあ、油断したよ。まさか開始早々この技を使わされるとは」

やっぱりフラグだったのか…そこには無傷で立つシリチナの姿があった。しかしどこか変だ。

「気配が、変わった？」

なんとなく雰囲気が違うというか何というか。

「久しぶりの感覚だったよ。本当に久しぶりにヤバいって思えた。でもねジュン君」

そこでシリチナの姿が消えた。

「オレもタダでやられるわけにはいなくてね」

後ろか！

そう思った俺は魔剣を背後に向かって薙ぐ。

キンツという澄んだ音と共に剣が交わった。

「くっ」

苦悶の声を上げる俺。対してシリチナは

「ほう、良い反応だ」

余裕そうです、はい。

「転移魔法なんていつ…」

「勘違いしないでほしいな。オレの身体は転移魔法なんて使わなくても十分に速く動ける」

筋肉バカが、と心の中で悪態をつき鍰迫り合いを解消するため余

っている片手で

「闇針」

をシリチナに放ち、互いに距離をとる。
さて、どうするか…

41 なんか、どうなんでしょう（後書き）

次回予告

潤「来年に戦闘が持ち越して…しつくりこないな。って事で次回はシリチナとの後半戦だ。あ、ところで俺の作った年賀状を発売するぜ！買いたい人は……え？発売しないの？」

42 なんか、先が思いやられます（前書き）

決着、そして…

42 なんか、先が思いやられます

「女王様から本気でいくように言われてるから・・・覚悟してもら
う、よっ！」

そう言っただけでシリチナは頭上に振り上げた剣を名の通り瞬息の間に
振り下ろした。

身体能力強化をした動体視力でも見えなかったぞ。

だが当たらない所で剣を振っても…

「ぐっ」

脚に鋭い痛みを感じたので見ると、刃物で斬られたような傷がつ
いて血が滲んでいた。

「衝撃波、なのか？」

「よく気付いたね、全力で振り下ろした剣には衝撃波が生じるんだ。
何故かは分からないけどね」

衝撃波は超音速で移動する物体に発生する圧力波なんだが

「衝撃波は本来物体後方に出来るはずなんだが」

「向きの変換はこの剣に付加された特別魔法なんだ」

「なるほどね」

そう言う間にも打ち合いをするべくシリチナに斬りかかる俺。

近距離に持ち込まないと不利になりそうだからな。

「その行動には少しガッカリだな。ハッ」

剣を打ち合わせた瞬間、幾千もの刃が俺を襲ってきた。

「ぐ、ガハッ！」

おおっと、今年初めての吐血だ。どうやら剣の柄で殴られたらし
いな、内臓がやられたっぽい。剣の軌道が目で追えないのが厄介だ
な。

「そろそろ終わりにしようか」

シリチナが剣を収めた。あの構えは居合いか？剣で居合いつて違
和感あるな。

「こうなりや、受けきつてやるよ」

だから何で強気なの？俺。

恐らくシリチナの最強の一撃が来るはずだ。

物質化した魔力を3重に身体を覆い、防御力を上げる。更に魔剣を構え、見える斬撃に備える。

「良い選択だ。この技は避けられるものじゃない・・・一閃千殺！」

シリチナが剣を振り切ると、質量を伴った銀色の衝撃波が全方位に広がる。戦場でやったらフレンドリーファイアーもんだな。

魔剣に込めておいた魔力を開放して衝撃波の威力を緩め、魔力の壁も2枚破壊し、3枚目にひびを入れてそこで止まった。

「・・・オレの負けです。メイドさん」

シリチナが不意にそんな事を言い出した。

「魔法が禁止のルールですから、そのようですね」

よく見るとシリチナの剣はさっきの大技で柄から先が無くなっている。

「ふん、甘いのお主は：ジュン、お主の勝ちじゃ。妾たちはもうノルティを追うことを止めよう。しかしノルティは野放しにしておくにはあまりにも危険じゃ。アヤツの事は任せたぞ」

「任せてください、と言いたいところですが、危険とはどういう意味ですか？」

するとメイドさんがヤレヤレといった感じで言った。

「頭の悪いジュン様ですね。危険とは、現在または未来において害を及ぼす可能性がある行為の事でございます」

「・・・ワザですよね？」

「はい。ノルティ様についてはあの方が自分でお話しになるまで待つた方がよろしいかと」

「分かりました、そう早く言うてください」

「申し訳ありません」

「話は以上じゃ。各自戻ってよいぞ」

女王の一言で俺たちは解散した。

さて、俺も戻るかな。

・・・シリチナ、プロミネントギルダー第9位か。他のプロミネントギルダーはどんだけ強いんだ？

「精進しろ、ってか」

その前にちよつと調べ事…

「プロミネントギルダーの順位とか詳しい事は何も知らないからな
俺はハリンテ城の書庫にいる。

「これか、」

《プロミネントギルダー大辞典 最新版》

プロミネントギルダーは現在6人の所在が特定されており、最聖賢アレス、邪神王サナトス、瞬息剣シリチナ、悪魔殺しテナ、時操師クラン、守砦壁ヘクトが特定されている。

プロミネントギルダーには順位が付けられており、それは1年に1度行われる闘技会で決定される。

現在の順位は

- 第1位 邪神王サナトス
- 第2位 時操師クラン
- 第3位 獣懷狼ノルティ
- 第4位 最聖賢アレス
- 第5位 悪魔殺しテナ
- 第6位 大気使いシニフ
- 第7位 魔天剣クラウ
- 第8位 未来視ウィスニル
- 第9位 瞬息剣シリチナ

第10位 守砦壁ヘクト

となっている。また、今回調査した結果、プロミネントギルダーにはそれぞれ特別魔法を持つておるが、実状はよく分かっていない。なお、プロミネントギルダーには伝説持ちも多く、それについては20952ページを参照。

ページ数多っ！ってか伝説持ちって何！？気になるな。

《現在のプロミネントギルダーの伝説》

現在のプロミネントギルダーで伝説持ちなのは5人いる。

邪神王サナトス

神魔人戦争の時、1歩進めば100の兵が散り、片手を振り上げれば1人の将が消え、目を付けられた者は神でも死からは逃れられなかったという。

時操師クラン

彼が12の時、当時街の領主がいた城を一瞬の内に廃墟にし、記憶に新しいテログループの村に引きこもった事件では、やはり一瞬の内に村は跡形もなく消えていた。

獣懷狼ノルティ

彼女がまだ初級冒険者の頃、グランドドラゴン（龍種最高位）を1人で倒したという報告を受け確認すると、骨のみになったグランドドラゴンとその前に立つ彼女の姿だった。

最聖賢アレス

御歳102になる彼だが、98の時の闘技会ではテナを5秒と経たずに戦闘不能に陥れるほどの強力な魔法を使っただけらしい。

悪魔殺しテナ

彼女の代名詞ともなった悪魔殺しだが、これは4年前の大悪魔聖戦にて、彼女の武器と共に大悪魔に挑み、何か特別魔法によって

倒したらしい。

おおう、みんな怖えな。この上位5人とは戦いたくないな。
生き残れる気がしないわ…

「ま、俺は俺って事で」

そう言って書庫を後にした。

42 なんか、先が思いやられます（後書き）

次回予告

潤「最近本編が多いな、そんな事を思ったその君っ！安心してくれ、次回から少しの間、ちょっと緩い感じの話題になるぜ」

たまには、こんな事も（前書き）

閑話休題

一休み

たまには、こんな事も

「ジュン君ね、どうしてこのレストランを受けようと思ったの？」
俺は今、ハリンガルのとあるレストランでバイトをするべく面接をしている。

「はい、このレストランは雰囲気（と時給）が良く、私がこれから社会に出ていく上で良い社会勉強（と女の子と触れ合う）の場になると考えたからです」

たまには息抜きもいいだろ？

「立派な事言つてんのに何か釈然としないなあ……まあ、このレストランも今人手不足だから、人格に問題はなさそうだし働いてもらえるかな？」

「はい！是非明日からでもよろしくお願いします」

「じゃあ、早速現場に立つてもらおうかな？」

そう言われて連れてこられたのはホールだ。

「俺はウェイターをすればいいんですか？」

「理解が早くて助かるよ。今日は見学して流れを掴んで、明日から仕事に入ってもらえる？」

「はい、分かりました」

じゃあね、と面接官（聞いたところ店長だったらしい）はどこかに行ってしまった。

てつきり講義を受けたりするもんかと思ってた。いいかげんだなあ、あのウェイトレス可愛い。

1日ウェイターの仕事を見てみて得たこと。ほとんど元の世界の

ウェ이터と同じだが、唯一違う点は店員に中学生くらいの人が雇われてることくらいか。まあ、小学生くらいの冒険者がいるくらいだからな。

あ、さっきのウェイトレスさんはハルって名前らしいよ。これも得たことだな。

「ま、明日から頑張ろう」
って事で帰って寝る。

現在は朝の5時。レストランは7時に開店なので6時にはレストランに着いていなくてはならない。

「おはようございます、ジュン様」
城の廊下を歩くと後ろからメイドさんの声が聞こえた。

「ああ、おはようございます。ちょっと仕事があるんで朝食はいりませんので」

「承知いたしました。レストランでのアルバイト、頑張ってくださいませ」

そう言って完璧なお辞儀をするメイドさん。

「はい、行つて来ます」

そう言って城を出た。

「そついやメイドさんにレストランでバイトするなんて言つたっけっかな？」

まあ、いいか。

「おはようございま〜す」

「あ、おはよう。君が今日から一緒に働く新人さんね、よろしく」
軽くホールで挨拶すると、すでに来ていた女性が返事した。昨日知り合つたハルさんだ。

「よろしく願います」

「ハハッ、そんなに堅くならなくていいよ。じゃ、早速テーブルを

拭いてもらえる？」

布巾を手渡され、俺は各テーブルを拭いた。

それから何チャラカンチャラで時間が経って、開店した。

午前中は人も少なく、先輩方で回せていたが、昼時になり客の数が増えてきて、俺が駆り出された。

「いらっしやいませ、本日はどのようなトマトになさいますか？」

客は会社員っぽい男性だ。

「え？トマト？」

「え？トマトでございますか？」

「いやいや、だって君今トマトって」

「はいはいはい……え？」

「え？」

「あ、ああ、はい、かしこまりました」

「ん、あ、ああ、たのむよ」

って事で2番テーブルの客にトマトをちゃんとお届けしてきた。

トマトを昼食にするなんて変わった人だな。

テーブルにトマトを置いた時にどこか納得してない顔をしてたけど何だっただらうな。

さて、仕事仕事。

「いらっしやいませ、本日はどのような物をお持ちいたしましたでしょうか？」

今度の客はどこぞのマダムだ。

「いつものやつ頂戴」

いつもの？いつものって何だ？

「い、いつものやつでございますか？」

「そ、いつものやつ。分かるでしょ？」

そんなプレッシャー掛けないで。

「は、はい。かしこまりました」

・
・
・

「お待たせ致しました。ト、トマトでございます」

苦し紛れのトマトです。はい。

「ふ、ふざけないで！帰るわ！お代は払わないからね！！」

トマトみたいな顔をして帰ってしまった。おっ、今のうまくなかった？え？そうでもない？さいですか。

「食い逃げを公言なさるとは大した度胸ですね？」

「食べてないので食い逃げにはならないはずですわ！」

「いえ、すでにお客様のお頼みになった食事の方をお届けしましたので、申し訳ありませんが代金はお支払いして頂きます」

「そんなのおかしいわよ！」

「やれやれ、では逆にお聞きしますが半分だけ食べたお客様はお支払いの方も半額で良いのですか？」

「それはダメよ。食べているのだから」

「半分は当たっておりますが、半分は間違っております。例えばお客様が唾を入れてしまったら？」

「それもダメね、うまく言えないけどダメだと思うわ」

「それは食事をお客様のテーブルに運んだ時点で私たちの所有を離れお客様のモノとなったからです」

「そ、そうなの、かしら？」

「私たちの損害は大したものではございません。しかしお客様の心の問題なのです。今後のお客様の善良さを保つためにも必要な事なのです」

「・・・分かったわ。私も熱くなりすぎたわ。それだけ客と真っ向から向かっていく店員初めて見た。これからも頑張つてね」

そう言って代金を置いて出て行った。

適当に言い訳してたけど何とかなるもんだな。え？詐欺師だった

て？俺は魔王だよ。

「お仕事頑張っているようですね、ジユン様？」

「メ、メイドさん！？どうしてここに！？」

「ジユン様が真面目に仕事をしているか見に来させていただいたのですが…どうやらおふざけになっているようです」

「いや、それはその……お客様、ご注文はお決まりでしょうか？」

「言つに事欠いてマニュアル通りにならないでください」

「お客様、他のお客様もいらっしゃいますのでお静かにお願い致します」

「ほう、わたくしにそのような事を言いますか。いいでしょう」

そう言つて立ち去つた。何しに来たんだ？あの人。つてか後がメ
ッチャ怖え〜！

「いらつしゃいませ〜、本日はどのような物をお持ちいたしましたし
ょうか？」

次のお客様は街の青年だ。
ターゲット

「おう、この『こだわりステーキ（120ワロ）』をくれよ」

「『王虎のこだわりステーキ（5300ワロ）』ですね。かしこま
りました」

「え？あ、ちょ…」

・
・
・

「お待たせ致しました。『王虎のこだわりステーキ』でございます」

「いや、あの、俺が頼んだのは…」

「こちらが伝票となります。ではごゆっくりどうぞ」

そう言って俺はその場を離れた。
その後どうなったかなんて知ったこっちゃない。

・ ・ ・

「仕事お疲れ様、で、君を呼び出した理由だけ……」
仕事が終わわり、店長に呼び出された俺は、面接をした部屋に行っ
た。

「何となく分かります。国に仕えてる人から私の接客態度が極端に
悪いつてクレームが入って、実際に現場を見た店長さんも同じこと
を考え、クビにする事を決めた。こんなところですか？」

すると店長はキョトンとして、

「あ、ああ、それで君には申し訳ないが……」

「はい、自分でも分かったので、辞めます。バイト代はいらないの
で」

「すまないね。また今度うちにおいで」

「はい、ありがとうございます」

甘い店長だ。

「お仕事お疲れ様でした」

レストランを出たところでメイドさんに会った。ってか待ち伏せ
してただろ絶対。

「してましたが何か？」

「開き直らないでください。メイドさんのせいでバイトクビになっ
ちゃったんですよ？」

「ジユン様の自業自得です。それにあまり乗り気なバイトではあり
ませんでしたね？」

「まあ、そうですね。・・・帰りますか」

「はい、夕食の準備も出来ております」

「呼びに来てもらって悪かったですね」

「いえ、仕事ですので」

「それでもありがとうございます。・・・クッキーでも食べます？」

俺はクッキー屋が目につき、メイドさんへのお礼を兼ねて提案する。

「ジユン様の奢りであるなら」

「もちろんです」

その後はクッキーが入った袋を片手に城に帰ったとき。

・・・これで終わりと思うなよ？

「無駄に伏線をはってないで、行きますよ？」

「はい」

たまには、こんな事も（後書き）

次回予告

潤「今回は予想外の客が来たからな…次回はばれないように頑張りますか。って事で次回も俺がなんかやらかすぜ！」

たまには、まあ、そうですね（前書き）

タイトルに特に意味はありません？

たまには、まあ、そうですね

ふっふっふ、前回の予告通り俺は再度バイト（暇つぶし）に挑んだぜ。

今回のバイトは、

「らっしゃいっせ」

コンビニだ。今なんて言ったかって？誰がどう聞いてもいらっしやいませだろ。失礼しちゃうな。

「……………」

おっと、客が商品を決めてレジに来た。何か一言言っただけと欲しかったところだな。

ピッ、ピッとバーコードを読み取り金額を表示する。

買ったのは炭酸の飲み物と弁当だ。

「62ワロになります。温めますか？」

「あ、はい、よろ、いや、その…お、お願いします」

客よ、何をキョドっておる。

「はい、温めさせていただきます」

「え？あの、それ…」

1分位かな、よし、スイッチオン！

さて、この暇な時間に何をするか…客は会話が続かなそうだし…妄想に耽るか。

チンツと音がしてレンジから商品を取り出す。

「余計なお世話かもしれませんが、本当によろしかったのですか？冷たい飲み物、それも炭酸を温めて。ペットボトルの中パンパンになってますよ？」

俺が温めたのは飲み物の方ですが何か？

「うう、うう」

と泣きつつもお代と商品を受け取ってコンビニを出ていく青年。
「ありつした」

もちろん今のはありがとうございましたぞ？

ピンポンというこのコンビニの出入り口が開く音がして、客が入ってくる。見目麗しい金髪のお嬢さんだ。

「いらっしゃいませ！コンビニホライズンへようこそ！」

45度の完璧なお辞儀をしてお嬢さんを出迎える。

さつきとテンションが違うつて？そりゃ、相手が綺麗なお嬢さんだったらテンション上がるでしょ。

「これ、お願いします」

お嬢さんは一通りコンビニ内を歩き回った後、商品を決めてレジに来た。

「はい、かしこまりました。いや、お客様お綺麗ですね」

「は、はあ、ありがとうございます。店員さんもなかなかカッコいいですよ？」

控えめながらもシッカリした娘だ。

「おだてても何も出ませんよ？はい、オマケの肉まんです」

「これ、いいんですか？」

「いいです。サービスです」

「あ、ありがとうございます。優しいんですね」

ちゃんと後で俺の財布から出すから問題はないぜ？

バーコードをゆっくりと読み込みながら話を続ける。

「ハハッ、お上手ですね。今度一緒にお食事でもいかがでしょうか？」

その言葉が予想外だったのか、顔を赤らめて困惑したすお嬢さん。
「ふえ！？お、お食事ですか？で、でもそんないきなり」

「このコンビニで出会えた記念として、是非どうでしょう」

「そんな大袈裟なこと…」

「嫌ですか？」

「嫌じゃ、ありません」

「じゃ、決まりだ！これ、俺のメールアドレスだから、今度連絡し…」

「ジユン君、何やってんの？」

店長登場、俺退場。裏の店員控え室に連れて行かれる。

「ジユン君、ダメだよ、お会計はなるべく早く早く済ませてくれないと。私的なことはバイト終了後にやってね？」

「はい、すみません」

全然反省なんてしてないが、形式だけ店長に頭を下げる。

「じゃ、戻っていいよ」

戻ってみると、さっきのお嬢さんは既に居なかった。あ、ちゃんとレジ台にお金が置いてある。

ピンポーン

おや？また客が来たようだ。今度は男の子だ。

「らっしやいっせ」

弁当置き場をじっくり見定め見定め…あ、決めた。

「お願いします」

弁当のみか、飲み物を温める手は使えないな…

「はい、48ワロになります。温めますか？」

ぴったりの代金を渡され、レシートを渡した。

「お願いします」

「分かりました。あれは私が10歳の頃の事。近くの公園でよく遊んでいまして、当時私の友人であった

・
・
という事があって、それ以来私はその友人には毎年必ず顔を会わせるようにしています」

「・・・いや、僕の心は温まりましたけど、温めてほしいのはお弁当の方です。それに途中から省略されて僕以外の人は全く心は温まってませんよ？って店員さん！？」

「まさか省略されてたなんて、、」

俺はコンビ二の端っこでの字を書き始めた。

「そんなに落ち込まなくても、ほら、僕の心はとても温まりました。いやゝ、こんなに良い話が聞けたなんて僕はなんて幸運だったんだ。・・・し、失礼します！」

励ますだけ励まして手に負えないと思ったのか、お金を置いて帰っていった。

どうよこの新しい作戦『温めるものを間違えて怒るはずの客に逆に励ましてもらう作戦』え？長い？じゃ、『いじけ店員作戦』に変更します。それも微妙？いいよ、もう。どうせこの作戦これっきりだし。

ピンポン

また客か、今度は…

「メ、メイドさん！？また来たんですか！？」

「お客様にそのような事を仰るとは失礼なジュン様ですね」

「い、いや、メイドさんには前回バイトをクビにさせられた嫌な思い出が」

「あれはジュン様がちゃんと仕事をしなかったからです」

「前回はそうですけど、何で俺がここで働いてるって分かるんですか？」

「ジュン様に超小型の監視カメラ（メイドさん作成）が取り付けら

れているからです」

「そんな恐ろしい事が！？こ、今回は何もしませんよね？」

「……フフツ」

やる気だー！！このメイドさんまたクビにさせる気だー！！ってか無表情なのに笑い声出されるとメツチャ怖えー。

「そういえばジュン様、ハリンテの大貴族であるアイシス家のご令嬢のカトレア様と何やらお約束があらりのようで」

「あの娘そんな偉い人だったのかー、じゃなくて！誰にも言わないでくださいよ？」

「少しセレン様に用事を思い出してしまいました」

「……何が望みですか？」

「いえ、何も。そういえば最近肩凝りが酷く」

「やらせていただきます」

「そこまで仰るなら」

と、俺の前でSDカードのような物を消滅させた。いちいちレベルの高い人だな…

「さて、ジュン様、何やら店長様がお話があるそうですよ？」

メイドさんとじゃれあってる間に、店長が俺の背中を凝視していた。うわ、怖っ

「手が早いですねメイドさん」

「仕事の速さには自信があります」

「できれば今以外の時に言っただけ欲しかったな……はあ、いつてきます」

俺は溜め息を一つつき、店長の待つ控え室へと向かった。

「お仕事お疲れ様でした」

「あーあ、結局クビになっちゃいましたよ」

今回のバイトも1銭ももらえずじまい。まあ、いいけど。

「やはり今回もジユン様の自業自得かと」

「まあ今回は収入があっただけ良しとしますか」

「カトレア様とお食事ですか？」

「そうだけど、何でメイドさんはそんなに気にしてるんですか？」

「いえ、城に着いたらお話し致します」

この場で話せないような事なのか？

「そういうことです」

「……メイドさん」

「どういたしましたか？」

「今夜のご飯のメニューは何ですか？」

「時々ジユン様の考えている事が分かります。ちなみに、季節の野菜のサラダ、オニオンスープ、仔牛のソテー、レアチーズケーキ、トラス村産の豆を使ったコーヒーでございます」

「今日も美味しそうですね」

「ご期待に添えるよう努力致します。ところでジユン様、今回も終わりが近づいておりますが、どのように締めるおつもりですか？」

「……つづく、みたいな？」

「ハア」

たまには、まあ、そうですね（後書き）

次回予告

潤「ハア、俺は学んだよ。バイトという名の暇つぶしはもう止めた方が良いらしい。必ずメイドさんが乗り込んでくるからな…って事で、今回はあのお嬢さんとお食事でもしようかな」

たまには、真面目に（前書き）

これを書き上げるのに2時間も掛かりました：しかも大して面白くも無いです。

はあ、待ってくれていた皆様には本当に申し訳が立ちません。

たまには、真面目に

『こんばんは、コンビニホライズンで出会った者です。名前はカトレアと申します。よろしく願います』

ん？これか？これはさつき携帯に來たメールの内容だ。

ふゝん、メイドさんの言うとおり、このお嬢さんはカトレアっていうのか。

『こんばんは、俺はジュンといいます。こちらこそよろしく。今回は食事の件でメールを？』

なるべくフレンドリーに、しかし礼儀をわきまえる。これがポイント。何のポイントだかは言わないがな。

『はい、外食の許可がおりたので。日時はいつに致しますか？』

外食するのに許可が必要って、厳しい家なのか？まあ、大貴族だしな、色々あるんだろ。

『明日にでもいかがでしょうか。お店は俺が選んでおきます』

男がエスコートするのはこの世界でも通じるのか少し心配だが、

まあ、大丈夫だろ。

『ありがとうございます。私の方は大丈夫です。では明日にお食事という事でよろしいですか？』

まあ、俺が言った事だしな。

『よろしく願います。では詳しい日時と場所が決まり次第、再度連絡させていただきます』

『お会いするのを楽しみます』

『俺もです。それでは、また連絡します』

てな感じでメールを切り上げて、店探しに移行する。

そういえば、今日の夕食が終わった後にメイドさんから話があったんだが、店探しをインターネットでする間に話しちゃうか。

メイドさんが言うには、ハリンテの政は幾つかの派閥（はつごう）によって構

成されているらしい。ありがちな設定だな。

んで、派閥は主に3つあって、女王や騎士たちで構成されている女王派、大臣やその他貴族によって構成されている貴族派、最も数の多い市民議員を含む市民派だそう。あ、この店の料理おいしそう。

アイシス家つてのはメイドさんの言った通り大貴族で、もちろん貴族派だ。

そんな中にどこの派閥にも所属してない俺が現れ、少しでも人数を増やして優位に立とうとみんな躍起になってるらしい。まあ、女王と親しいから女王派と捉えて諦めてる人もいるみたいだな。

メイドさんは俺が唆されて貴族派になることを恐れてるらしい。まあ、メイドさんは俺が魔王（笑）である事を知ってるみたいだし、色々考えてるんだろうなあ、俺は何もする気はないけど。

おつ、この店がいいかな？高級レストランってやつだ。偏見かもしれないが、貴族ならそこら辺の料理なんて口に合わなさそうだからな。ハリンテ城から徒歩3分、雰囲気も良さそう。ネット予約は…出来そうだな。はい、予約つと。

『レストランが決まりました。ハリンガル内のお店なので中央広場のオブジェクト前に5時に集合でいかがでしょう？』

今は夜の8時30分、まだ寝てはいないだろ。

『はい、分かりました。ではまた明日、よろしくお願いします。おやすみなさい』

ほらな、ちゃんと返ってきた。20秒位で返ってきたけど、滅茶苦茶打つの速いんだな…

『おやすみなさい』

もう返信は来ないだろ、とパタンと携帯を閉じてテーブルに放る。ちゃんと魔力でクッションをおいたから大丈夫だぜ？ファンタジーな世界は便利だな。

時は経って次の日の4時ちよい過ぎ、え？時間が経つのが早すぎないかって？う、うん、まあな。聞かないでやってくれ。

「セレン？ちょっといいか？」

最近小説内では出てこないが、ちゃんと会ってるから安心しろよ？この前も一緒に買い物に行ってたな…っと、この話はまたの機会にしよう。セレンが部屋から出てきた。

「ジュン？どうしたのよ」

この前とは違い普通に出てきたセレン。って、この前を知らないんだっけか？しょうがない、次回はそんな時の話をするか。

「ちよつと外に出てくる。夕食には間に合いそうにないからそのつもりでって事を言いにな」

「私に言わないでメイドさんに言うことだと思っけど…分かった、メイドさんにも伝えとく。あと、」

そこでセレンは一旦言葉を切った。

「ん？どうした？」

「また誰か女の子とでしょ…」

怒り、悲しみ、不安、呆れ、様々な負の感情が見てとれる。暗黒面に支配されてはならぬぞ、セレンよ。

「ま、まあ、その、な？」

「私がどんな気持ちで……………」

何か言ってるが小さくて良く聞こえない。

「この埋め合わせは必ず、な？」

セレンの頭にボンと手を乗せ、その場を離れる。セレンには悪いが時間が無いもんでな。

現在4時30分、俺は中央広場のオブジェクト前にいる。30分

前行動の俺に抜かりはないぜ。

「お待たせしました」

俺が睡魔に襲われうつらうつらしていた時に、コンビニで出会ったお嬢さん、カトレアが声をかけてきた。

「いやいや、俺もさつき来たのでそれほど待ちませんでしたよ」と、お決まりの科白^{セリフ}を言う俺。

「ふふつ、先ほどまで眠そうにしていた人とは思えない科白ですね」「い、いや、それは、今日の日差しがポカポカと気持ちいい陽気で別に待ってた事がバレても問題はないのに必死に取り繕う俺。」

「今日は今年1番の冷え込みだそうですよ？」

「はははは…ちょっと街を歩いてから食事にはしませんか？」
って事で話題チェンジ。

まず訪れたのは服屋だ。定番だろ？

「へえ、色々な服があるんですね」

「カトレアさんは服屋にはあまり来ないんですか？」

「はい、いつも着ている服は家のメイドさんが選んでくれるので」「そうでしたか」

貴族つてのも大変なんだな。

その後、この服は似合うか、こっちはどうかと、散々俺を使ったお姫様（いや、貴族だからお嬢様か？）。

毎回思うが、どうして女性は買う気のない服を長々と選ぶのだろうか、まあ、結果的には俺がプレゼントとして買ってあげるんだけどな…ま、まさかそれを狙っているのか！？恐るべし女の子。

と、そんな適当な事を考えているうちにカトレアが服を見終えたようだ。

「お待たせいたしました」

「いいですよ、で、何かいい服は見つかりました？」

「はい、どれも可愛らしいのですが、特にこの服が気に入りました」
そう言っただけに見せたのは水色のワンピース。この真冬に随分涼しげだな…

「そうですか、んじゃ記念として買ってあげますよ」

「え？でもそんな…」

カトレアの声を背中に浴びながら会計を済ませる。

「どうぞ、受け取ってください」

と、ワンピースの入った袋を渡す。

「あの、本当にいいんですか？」

袋と俺とを交互に見て少し困惑気味なカトレア。

「それじゃあ、代わりにと言っただけなんですけど、今度そのワンピースを着た姿を見せてください」

「は、はい、それでいいのでしたら」

と、何とか納得してくれたみたいだ。

服屋を出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。この世界でも冬は日が暮れるのが早いんだな。まあ、当たり前か。

因みに近くの時計台を見ると、時計は6時45分を指していた。予約を入れたのが7時だから余裕だな。というよりも服屋に何時間も居たことが驚きなんだが…

「レストランには7時に予約を入れてありますので、そろそろ向かいましょう」

「はい、分かりました」

そう言っただけ俺たちはレストランへと歩いていった。

たまには、真面目に（後書き）

次回予告

潤「よし、今のところは失敗無しにきてるぞ、あとは食事を乗り越えればゴールだ。って事で今回は食事風景をご覧ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2012年1月13日18時54分発行